

我が名は物部布都である。

べあべあ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

むしゃむしゃ

これは傲岸不遜氣味の布都ちゃんが大和時代を元気に血生臭く生きていく物語です。

- ・布都ちゃんは善人ではありません。美人です。
- ・残酷な描写は保険でも何でもありません。
- ・可愛さが最強です、きっと。

順次改稿していくので、話の流れがズレるかと思われます

ということではしばらくの間、閲覧をチラ裏に設定しております

現在6話途中

目 次

第1話 黒髪	1
第2話 見世物	8
第3話 焼べる	16
第4話 前々日談	21
第5話 閻夜	27
第6話 踏み入れる	32
第7話 瞬き	38
第8話 村	46
第9話 不満足	56
第10話 変化	66
第11話 とある日常	75
第12話 森の森の森	84
第13話 転機	95
第14話 とじこ	101
第15話 おやばか	115
第16話 温もり	125
第17話 鬼	133
第18話 鬼、そして鬼	142
第19話 致死毒	156
第20話 灰銀	169
第21話 様々な	177
第22話 帰郷	184
第23話 願望がそれを否定する	

第24話	間合いの中
第25話	欲望と策謀
第26話	流れる時
第27話	進む行程
第28話	人
第29話	気にくわないもの
第30話	理解
第31話	響き
第32話	転回

274 264 255 243 236 227 216 206 194

# 第1話 黒髪

肌寒い夜だつた。

月光が少女を照らしている。

「夜が甘美であるのは、秘するからだとは思わないか？」

そう言う少女の口元は、光が妖しく反射していた。

「独り占めするのもいいが、分かち合うのもいい」

細く白い指が口元の光を拭うと、指先に付いた光が舐め取られる。舌の上で唾液と混じり合い、程よい苦味と甘味を少女に伝えた。

「しかし、分かち合えばすぐに無くなってしまう」

少女は足元に目をやると、小さなため息を吐いた。

微動だにしない肉体が一つ。所々に人ではあり得ない特徴があった。

「よく喋れる程度には稀なやつであつたのに、少しもつたいないことをしてたか」

布都は足元のそれに向かつてしゃがみ込み、顔を下げる。灰色の髪が血に触れたが気にした様子もなく、舌を這わせた。

「……ああ」

先程よりも、強く深い香りが鼻腔を満した。

酔つたような恍惚の表情を浮かべた布都は、手を胸に突き刺し、ゆっくりと侵入させる。深く入る毎に液体が溢れ出て、熱が白い蒸氣として目に見える形で出てきた。

手を引き抜くと、そこにはお目当ての果実があつた。

「……堪らないな」

そう言うと、かぶりついた。



この国がまだ日本という名前を持つていなかつた頃。

邪馬台国が滅亡した後、内乱状態になつたこの国をまとめ誕生したのが、ヤマト政権という政治組織であった。

この政治組織は、六世紀頃には九州から東国まで勢力を拡大し、権勢を誇つた。

勢力拡大には武力による衝突が主であつたが、この国の拡大に関しては少し事情が違つていた。

絶対的な課題として生存があつた。

人を回避しなければならなかつた。人と人とで争うよりも優先すべきことがあつた。

刃が通じない程の頑強な皮膚、骨ごと食いちぎるような牙と顎力。夜になればそれらは現れ、人を襲つた。

人間同士でいがみ合つてていることを続けていられるような環境ではなかつた。

人間は手を取り合つた。

そうした動きにより、ヤマト政権の拡大し、仮初めともいえるくらいに人の生存が確保され、人は思い出したように人間同士で争うようになつてきていた。

争う理由は権力だつた。

ヤマト政権には氏姓制度という身分制度がある。豪族には、例えば蘇我氏といつたように氏<sup>し</sup>が与えられ、また姓<sup>せい</sup>という地位や職を表す名を与え序列もつけられた。

その中の臣<sup>おみ</sup>と連<sup>むらじ</sup>という二つの姓が、ヤマト政権のなかでも中心的存在の豪族に与えられ、争いの火種となつていた。



その言葉には、諦観と憤りがあつた。

「——馬鹿らしい」

布都は気に入らないでいた。己の置かれた現状とその扱いにである。

布都は物部氏という豪族の長の娘として誕生した。物部氏というのは連に値する姓を持ち、その連の中でも大連というより中心的な存在となつていて。

その高すぎる身分がゆえに、自由とは程と遠い環境にいた。だが、布都は自由が欲しいのではなかつた。煩わしいものを嫌つていたにすぎない。布都にとつての煩わしいものというのは、人と人との関わりであり、それを強制されることがどうにも耐えられなかつた。物部の子ともなれば、その数は多い。物部の氏族とは幸運なことに、才能を認められた者は多く、どれもが並以上の何かを持つていてとされていた。布都はその中でも格別であつた。

——まるで粘液のようだ。

父の物部尾輿の視線からは常に期待というものが混じつっていた。それは次第に氏族中に伝搬し、家人のほとんどが似たような視線を送るようになつていて。布都にとつては、見えない重しが肩にのしかつてゐる想いだつた。自然、布都はそういう視線から逃れるかのように、身を隠すようになつた。

威勢表すように大きな物部の屋敷で、気忙しい足音が響き渡つていた。

「姫様はいざこに——」

幾人かの者たちが布都を探し回つてゐる。

布都は屋敷のはずれにある一室にいた。部屋には凹凸があり、身を隠すことが出来た。布都はそれを利用し、壁に背を預けながら身を潜めてだらけていた。

とはいひつかは見つかるだろう。そう思うと布都是あらゆる全てに対して気が乗らない。

「——布都はどこにいる」

「まだ、見つからず——」

「隅々まで探せ！」

「つは！　すぐに」

布都の名を、名指し呼び捨てで口に出せる者はごくわずかである。  
(父上まで探しているとなれば、面倒事だな)

あまり気の長い方ではない尾輿は、部下がきびきび動くことを好む  
がその逆をひどく嫌う節があつた。

その大きな声のやりとりは布都にまで聞こえてきており、眉間に皺  
が寄ったが動きはしなかつた。布都は、家臣に対しても辛く当たること  
もないが優しくもない。あまり関心を持つていなかつた。

布都が顔を上げると、闇夜のような黒い髪が肩を撫でる。髪の指先  
で掴むと、氣急げにいじつた。やがて戸を開かれると、部屋の中にな  
し踏み込んだ人間が中の様子を確認するやいなや、すぐに出ていつ  
た。

布都は戸を恨めし気に睨んだ。

「……にいたのか。——探ししたぞ」

探すなどは言えなかつた。少なくともこちらには用はない。

「……何用でしようか」

目が合うと、尾輿は眉を寄せて咳ばらいをした。

「参内せよ」

「何故でしようか？」

参内とは朝廷に出仕することである。

面倒事だと思つていた布都だったが、予想を超えていた。

布都の視線を直に受け止めた尾輿は、後ろへ引きそうになる身を堪  
えて答えた。

「……お前を一日見てみたいというものが多くてだな」

「それこそ何故でしよう？　跡取りでもないただの子供をわざわざ見  
たいなどと、宮中の方々がお思いになるとは考えられませんが」

そう言う布都に、尾輿は言葉が詰まつた。

だが尾輿は引きたくはない。なんと言おうと押し通すつもりであ  
る。

「政治というのは、いわば関係性だ。お前も物部の人間であるなら、そういう機会も訪れよう。お互に顔を把握していくのも政治の延長上なのだ。——いいな？」

布都は黙った。

(子供騙しとしてもどうであろうか)

酷い口上で、茶番に無理やり付き合わされそうな状況が気に食わない。

「……兄上はどうされるのです？」

「あいつも連れていく。お前一人ではないから、心配することはない」

布都は息を吐くと、しぶしぶといった様子を隠さずに頷いて見せた。

そんな布都の態度に尾輿は不快感を示さず、喜色を浮かべた。

「おお、ようやく来るか。——それは良い」

言うやいなや、尾輿はさつさと部屋から出ていった。

——これは兄上も苦労しているだろう。

布都是兄の苦労を想つた。

立場には責務があるらしい。馬鹿々々しいと思わないでもないが、特権を享受出来ていてる自覚もあつた。だからといって、興味のないものは興味がない。

布都是隣に向かつて口を開いた。

「——止めてくれても良かつたのでは？」 兄上

兄上と呼ばれた男は、初めから同じ部屋にいた。

布都の横で、壁に擦りつくように身を隠していた。

「いや、話を振られなかつたからな」

「では振られていれば、止めてくれたと？」

「もちろんだ。兄とはそういうものだろう」

男は物部守屋といった。布都の兄であり、次期当主としての扱いを受けている。

「では今からでも遅くありますまい。偶々見えない位置にいたから会話に参加しなかつた理由と一緒に話されると良い」

「おいおい。ここから追い出す気か？ しばらくここでゆつくりする

つもりなのだが

「兄とはそういうものでは？」

「過ぎ去つた時には勝てない。時を追いかけるのは負けたやつがするものだ。そこに兄妹はない」

普段、布都はあまり雑談を行わない。話し相手がいなかつた。だが例外はいた。その例外が横にいる兄の守屋で、諧謔ユーモアの調子がよく合つた。そして何よりは、他人が大事に想つているものを、大したものだと思つていらない点において仲間であつた。

そんな守屋としても、話が合う存在というものは少なく、布都と会話をするのを好んでいた。

物部氏の子息ともなれば、自分と同じ身分の者すらほとんど存在していない。しかし同じ身分であれば、同じ尾輿の子としては幾人かいる。現状、物部の次の長となるのは守屋とされており、守屋にとつての他の子供というのは敵でしかなかつた。実際に暗殺されそうになつたことも多々あり、守屋にとつて屋敷の中は落ち着く空間とはいえたなかつた。

「父上は結局のところ、どうしたいのと思つてているのでしょうか」

守屋は一拍間を開け、答える。

「物部という存在を頂点にしたいのだろう」

それに何の意味があるのだろうか。属するという欲がない布都にはそれは分からぬ。

だが、参内した際に一体なにをさせられるのか。おおよそ予想がつかないわけでもない。

「……されば我らはさしづめ見世物でありますな」

「言うな。悲しくなるだろう」

「そんな感傷的なものをお持ちだとは思いませんでしたが」

目が合う。

守屋の眼はおだやかとは言えなかつた。

「……見世物というのは己の意思で動けないものだ。どうにもやりきれないこともある」

絞りだしたような声。

布都はもう一度茶化した。

「さすが体験されてる方の感想は違いますね」

守屋は茶化しには付き合わないで話を続ける。

「世代一つ早く生まれていたら、今でも思つてしまふ」

「おや、それは望みすぎでは？」

「ん？」

また目が合う。

「……お前に言われると、なんだか新鮮に聞こえるな」

守屋には生まれた境遇を考えたら現状に満足するべきだという風に聞こえた。

「ああ、言葉が足りませんでしたな」

布都はにやりと笑つて見せると、人差し指を立てて、くるりと回す。「兄上には何か欲しいものでも？　いらぬものばかりと思つていまし  
たが」

「……ふむ」

守屋は頷いた。

「……そうか。いや、そうだな」

「良き人生とはいらぬものを取り払つたものではないかと。反対につ  
まらぬ人生とはそれらを取り払え無かつた人生かと」

守屋は思わず笑みをこぼした。

「年寄りのようなことを言う」

たしかにと思つた布都は、簡潔に理由を述べる。

「執着が無いからでしょう」

そういうものかと、守屋は頷いた。

## 第2話 見世物

馬車などという楽な乗り物はなかつた。

この地には元々馬という生き物は存在しておらず、馬がこの地に入ってきたのも最近のことであつた。いくら物部氏といえどもまだ所有していない。

布都を連れた物部の一行は朝一から歩いていた。

布都は朝が嫌いだつた。夜が明けるというだけでも気分が良くなのに加えて、朝というのはどうにも騒がしさの前触れのようで好きになれない。それを朝に起こされた挙げ句、歩かされている。

目的地に着かない限りはこの気怠い歩み終わらないが、着いてもまた氣怠いものが待つていた。到着して布都が連れて行かれたのは宮中の宴会場のような広場だつた。

そこでは音曲が奏でられ、愉快そうに酒を片手に談笑している者たちが多くいた。

(なんとつまらないことか)

広場には屋根だけの建物が四方にあり、自然とその屋根に人が集まり、そのままその集まりが勢力分布図のようになつていて。分かりやすく、臣と連とで分かれている。

物部氏も大連として屋根の中心で、大いに談笑を楽しんでいた。

布都はそこに混じらない程度に距離を取つていたが、着いた当初からずつと視線が向け続けられている。あからさまではないにしても、布都には鬱陶しかつた。

「はあ……」

そして単純に視線の数が多い。見世物になつた気分に徐々に我慢が出来なくなり、布都是不機嫌を表に出し始めていた。特に、物部尾輿に誼よしみを得ようと集まつてきた者たちからの意図が込もつた視線が多くつた。

目が合わないよう視線を散らしていると、あることに気づいた。

(そういうえば子供が多いな)

そもそもこういう場に来ない以上、比率など知りもしないことだつ

たが、見渡すとやけに多かつた。耳を澄ましてみると、どうやら今回が特別にそういうものであるらしかつた。

自分たちの未来を自慢するかのように、我が子を自慢し合つていた。謙虚な言葉で迂遠に自慢するその言葉の遣い方が布都にはどうにも気に入らない。隠した欲が隠せていない上に自己を取り繕おうする精神が、ひどく醜く感じた。

その中に自身の父の物部尾輿も含まれているのだから、布都としてはため息も出ない。尾輿は自慢に返つてくる返事を、気分良く愉快に受け止めていく。

その度、集まる視線が増えていく。

——不快極まる。

話のダシ、それか酒のつまみ。布都は、口に入れられ噛み碎かれる食べ物を想像した。

しかし、まだ始まつたばかりである。

「あの、話をしても——」

布都に言わせるところの積極性が長所だと勘違いした阿呆が近づいてきた。

一人話しかけに来たと思うと、好機とばかりに数が増えた。

「私は——」

「布都姫でありますよね——」

大方親に何か吹き込まれてゐるのだろう。返事の有無に関わらず、しつこく話しかけてくる。

身分的にもまともに相手もする必要もない。布都は時が過ぎゆくのだけを待つた。

そうしてると、

「——布都よ。こちらに来い」

ついに尾輿に呼ばれた。

愉快なことが起きないのは分かつてゐる。

「はあ」

義務を果たすしかなかつた。少なくとも今は、まだ。

「ほお、そちらが——」

目が合う。尾輿と同じくらいの年の男。先程から視線だけは送つてきたくせに、初めて見るかのように、上から下へとじっくりと見られた。

「布都よ、挨拶をせぬか」

頭を下げるだけにとどめた。

(口を開けば呪詛が出そうだ)

尾輿は取り繕つた。

「いや、悪くは思わんでくれ。この子はいつもこのような感じでな」「なるほど、将来は大物かもしませんna」

「いやいや、これが中々大変でしてな」

「うちの息子の嫁に欲しいくらいですよ」

「おお。そう言つていただきと、親としても安心出来る」

自分のことを、自分を置いて話している状況。

布都是頭を下げたまま聞いている。

こういう目にあうのは分かつていたが、ここまで不快な気分になるとは思わなかつた。

(これ以上は付き合いきれない)

一つ息を吸い、一言絞り出す。

「——ではこれにて」

そう声を発すると、すぐさま背を向け歩き出す。

ようやく顔を上げると、少しすがすがしい気持ちになつた。義理は果たした。少なくともやるべきことはやつた。それが期待通りではないとしても。

——何処か。

見渡すと、再び会話の機会が訪れたとばかりに、どこぞ子息らがこちらに意識を向けているのが分かつた。冗談ではない。

これに毎度のごとく付き合つてる兄を想うと、布都是素直に感心した。その兄は、若いやつらが集まつている中心で談笑をしていた。(行くわけにもいかない)

布都是行き先を見失つたままだつた。

大いに困つたが、その矢先、場の空気が変わつた。

確認してみると、広場に武具が運び込まれ、それによつて人の興味が移動していくつていた。

どうやら見世物が始まるらしい。

すぐに手を挙げたどこぞの子息らが、広場の中央で棒で打ち合つたりと、自身の才を見せ始めた。

(その手の棒と何が違う)

自身を誇示するための道具。振り回しているのは棒か自分が分からぬ。

布都は、周りの視線は中央に集まつてることに気づいた。  
(逃げるなら今だろう)

休憩場のような場所があることは先所に教えられていた。  
向こうと、先着がいた。

若い男。年は守屋と同じくらい。  
目が合う。

「——つち」

抜け出せたと思ったのに、人がいる。

布都は無表情のまま、瞳に不機嫌さを映つして見せた。何処かへ行くと、言外にそう伝える。道理で言えば、去るのは後から来た自分の方であることが分かつていて。言葉には出来ない以上、視線で察してもらうしかない。察しきえすれば、身分を考えてすぐに何処かへ行くだろう。

が、男は和らげに笑うだけで動かなかつた。

細い体つきの男である。おそらくは病弱であるために広場の見世物に参加出来ずに抜け出してきたところか。そう、布都が算段をつけたところ、

「ああ、先ほどずいぶんとつまらなそうにしていた方ですね。お戻りになられると皆さん喜ぶと思いますよ」と、攻撃してきた。喧嘩を売つてゐるらしい。

「……名を名乗れ」

睨めつけながら言うも、

「人に名を聞くのならば、まずは自分からではないでしようか?」

意にも介さず返してきた。

「我が名は物部布都である。それ、名乗つたぞ」  
名乗ると同時に、催促する。

(何処の誰かは知つたことではないが)

売られた喧嘩は買つた。

だが、

「なるほど。物部の姫様でしたか」

目の前の男は態度を変えずに、その次を続けた。

「私は蘇我馬子といいます。これもなにかの縁。どうでしようか、仲良くなませんか」

布都は即答出来ず、何度かまばたきをした。

布都は政治には疎い。知ろうとしなかつたので知識がない。それでも蘇我の名前くらいは知つていた。そして馬子という名が誰を指すのものかも加えて。

「……仲良くと申されても、お互いの立場がそうはさせないでしよう」

馬子は少し驚いたような仕草をした。

「まさか、その様な言葉が返つてくるとは」

布都は眉をひそめた。

何だかつまらないことを言つた氣がする。いや、気のせいではない。

「蘇我馬子、でしたね」

馬子という男をじつと見た。

名と顔を憶えた。

——兄上とはずいぶんと違う。

守屋は押せども動くこともないどつしりとした力強さを感じるが、馬子には押してもするつと躊躇されそうな掴みどころのなさを感じた。

「——で、馬子殿はあれに参加しないので?」

人に殿とつけたのはこれが始めてだつた。だがしつかりとやり返す。

「さぞぞ活躍されるに違いないと思うのですが——」

「いえ、私は不参加にしてもらいました。荒事は得意ではなくて」

馬子はやんわりと受け止めてみせた。

「では、貴方の武器は言葉であると？」

「まさか。私が出来ることは微笑んでいることくらいですよ」

「政治ですか」

「貴女もでは？」

布都は目を丸くした。

「他者の欲を理解出来ない者には無理なものです。貴女なら充分な素質がある。やり合うが楽しみですね」

「いえ、あまり興味がないので」

たつた今先程、馬鹿にすらしていたものである。

布都は自分にそういう部分があるようには思えなかつたが、目の前の男が言うのならそうなのだろうかと思わないでもなかつた。が、自分が言葉に嘘もない。

「興味がないですか。それはまだどうしてでしょう？」

「他人を操つてやりたいことがないからでしょうね」

「ふむ。しかし私としては、やりがいのある相手がいた方が嬉しいのですけどね」

「兄の守屋がいます。充分ではないかと」

「こういうのは多ければ多いほどいいのですよ。その少なさに一度でも嘆いたことがあるのならば、誰だつてそう思はずです」

「……貴方に負けるために参加しようと？」

「——まさか。楽しみませんかと、お誘いをしているのです」

馴れ合いと欲が混じり合つた醜悪なものが政治だと布都は思つてゐる。この先も変わらずにそういうものに关心を持つる気はしない。

布都は首を振つた。

「まあ、気長にいきます」

馬子は話を終わらせずに、続けた。

「そういえば、恋愛も政治も緩急が大事なんですよ。知つてました？」

「知つてるとおいで？」

「さて？ なにしろ初対面ですので」

布都是脱力し、息を吐いた。

——敵わない。

口では相手の方がずいぶんと上手であるらしい。

苦笑し、布都是白旗を上げた。

「今日は負かされました」

「おや、ひどく負けず嫌いな方と思つたのですが」

「負けたものは仕方ない。認めて次の勝負をする方が、まだ勝てるといふもの」

「では?」

やる気になつたのかと、馬子の期待交じりの声色に、布都是否定を込めた笑みで返す。

「呼ばれているようなので、行くだけですよ」

肩をすくめて見せる。

参加するのが億劫でしかがなかつたお遊びも今ならそうでもない。

「——布都! どこにおつたのだ! 探していたのだぞ」

布都是駆けつけてきた尾輿には目線すらやらず、そのまま中央へと歩み出た。用は分かつている。

——何か。

見渡すと、矢の的が目に入つたので決めた。

「弓を」

近くにいた何処かの家人にそう言うと、すぐに持つてきた。

受け取つた弓を二度振つて見せると、用が済んだのでそのまま返した。

その布都是の行為を、矢がないと言外に伝えていると受け取つたのか、

「——い、今すぐ矢もお持ちします」

と、家人が慌てて取りに行こうとしたが、布都是止めた。

「いや、必要ない」

「はい?」

「返すぞ」

布都是そのまま中央の広場から背を向け去っていく。

何事かと布都を止めようと動こうする人間もいたが、その全てが足を止めて同じ方向を見た。

音だつた。カラーンと小気味の良い音、木が鳴る音。

そこには、木の的が四つに割かれ、地面に倒れていた。——いつ切つたのか。そう思うも、布都のやつた動作の中でそれに当たるのは、弓を軽く振つていたような動作のみ。皆、理解せざるを得なかつた。

布都はそれまでの見世物を、真に見世物にしてみせた。

出て行く布都を止めようとする者はいない。

——帰るか。

布都の足取りは軽くなつていた。

### 第3話 焼べる

結果的に途中退場となつた布都は、さてどうしたものかと考えていた。

予想とは反して満足のいくものになつたが、自分をここまで連れてきた父連中はそうではないだろうと思えた。あの兄ならばなんとか取められるかもしないと思わないではないが、さすがに頼り過ぎもよくなない。

そんな時、後ろがにわかに騒がしくなつた。そして、その騒がしさから聞き覚えのある音が発せられていることに気づいた。

ちらりと控えめに振り返ると、たしかに物部氏の一団だつた。

——引き戻しに来たか。

身構えたが、妙なことに皆顔に喜色を浮かべており、中でも尾輿は喜色を通り越して浮かれているようにも見えた。

「——布都よ、一人歩きとは関心せんぞ。いかに物部の娘といえど、それすら分からん愚か者もおるからな。まあお前にとつては有象無象だろうがな」

「はあ」

生返事をする布都に気づかない様子で、尾輿はさらには続けた。

「演目というのは終わりが肝心だ。逆にいえばどうであろうと、締めさえ素晴らしければ成功だ。それには観客の面を見て確かめると分かりやすい」

周りにいる者も嬉しそうにざわめき立つ。

「蘇我のやつらは見ものでした」

「蘇我稻目のやつにいたつては、顔を顰めておつたわ。これほど気分の良いこともないぞ！」

衆目の中、堂々と歩いていく物部の一団。

そこには、ヤマト王朝の中枢から天下を腰にぶら下げて帰るような勢いがあつた。

我らが中心であり、我らこそが天下であると。

それはそれで一体何なのかと気になつた布都が守屋に視線をやる

と、ただ一人いつもと変わらない調子の守屋が布都に近寄った。

「お前が出ていった後、父上は『それでは失礼』と一言だけ発して宮から出た。ただ、それだけだ」

布都は己の疑問が解消された。

物部尾輿が考えてであろう、我が子を使って物部の威を示すという目的は十二分に果たされた。そうである以上は、思う通りの展開ではなかろうが非礼があろうが捨て置ける範囲のことでしかない。ただ自分の自慢したいものを自慢したかった。そして結果として、これ以上ない形で望みが叶つた。そうである以上はあの場に残る必要も無く、またそれはあの場は物部の場であつたという認識を周りに与えるようなことにもなる。

布都にとつては心底どうでもいいことだつたが、面倒が無くなつたのであれば歓迎出来る。

気が楽になつた布都に、守屋は言葉を付け加えた。

「良いことばかりということも無さそうだぞ」

「——それはどういう？」

その疑問は、当事者から解消されることになつた。

「布都、次の狩りに参加せよ」

尾輿が間に入つてきた。

「一体、何故——」

「心配することはない。それまでに準備はする。腕の良い術士を師として寄越すから、しつかりと習うといい」

「無用です」

「ならん。狩りとはいえども、相手は妖魔だ。甘さは死に繋がる。我々はお前を失うわけにはいかない」

だつたら参加させるなと思いつつも、どう断つたものかと頭を働かせる。

見かねたのか、守屋が助け舟を出した。

「父上、布都是この通りまだ幼き身。——まだ早いのでは？」

「いや、そんなことはない。あの場で可能性を見た。この才はいち早く磨かれなければいけない。今からでも遅いくらいだろう」

「しかし、万が一のことがあれば」

「万全を期す。それ以外はない」

「これは難しそうだと守屋は謝罪を込めて布都を目を見た。

「……その師という者に教わることが無い場合はどうすればいいのでしょうか？」

布都は腹を決めた。

「その時は別の師を寄越そう。もつとも、一番の者を寄越すゆえその心配はない」

「分かりました。しかし、教わるもののが無いと判断した場合は勝手にやらせてもらいます」

「ならん」

布都は返事をしなかつた。

ここまでくれば言葉ではなく事実が必要になる。布都は知っている。己が師など必要のない存在であると。少なくとも物部にいる存在する者からは。

以降の道中、布都は口を開くことはなかつた。



それから3日も経たなかつた。

「どういうことだ？」

問い合わせるような尾輿に、平服する男は自身の抱いた驚愕を言葉に乗せて答えた。

「——私のような者に教えるようなことはすでに、いえ、始めからありませんでした」

「それほどか」

「言葉にすれば損じるほどに」

尾輿の疑惑の中に期待が混じつた。

「詳しく言え」

「我らが学んでようやく覚えることを、の方は始めから知つておいでなのです。我らが教えを乞いたいと思うほどに。まだの方のことを、誰も分かつてはいないです」

主に言うには突つ込んでいるが、本人に非礼の意識はない。可能限り自分の驚愕を伝えることの方が忠義に沿つていると確信している。

「やはり天より授かつた才か」

「才とは、人に対する申すものです」

男には畏怖の念。

「神には才能という言葉は使いません。私にとつてはあの方も同様に、才という言葉を使うには適切とは感じられないのです」

天才とて人に使う。少なくとも、天や神には使わない。

「名を言うのも憚れるくらいにか」

「ご容赦願いたく」

敬称を付けようとも礼を損じていてるようを感じられる。近くにいるだけでも、居心地の悪い。佇まいを正さなければと思わされる緊張感。

「やはり見て確かめる必要があるな」

「訂正が必要です」

「何だ?」

「あの方のそれは見れるものではありません。研ぎ澄ませた感性をもつてようやく感じることが出来るものなのです。天とは理解するものではありません。そもそも可能ではないのです。我らにとつて、天とは、最大の努力を労することによってやくその一端を感じることが出来るだけなのです」

迂遠な言い回し。要するに、

——格の問題だ。

尾輿はそう理解した。能力ではない、生まれ出た時に始めから備わっているもの。——俺ならば、いや俺くらいが、尾輿はそう思った。

尾輿はそれらを見せないように奥に隠し、よく言ってくれたと言わんばかりの表情で、

「お前の言うことはよく分かった」と言つて、領いて見せた。

「だが、俺は物部の長として知らねばならない。これは俺に課せられた義務だ」

尾輿は臣下の男を下がらせると、血が薫つてきそうな笑みを浮かべた。

野心は善悪を必要としない。必要とするのは欲望。善悪とは他人に理解させる道具でしかない。

「天佑とは努力によつて勝ち取るものだ」

尾輿は手を強く握りしめた。

## 第4話 前々日談

布都の眼前には、澄んだ泉があつた。波紋も起きないような、静かな所だった。

泉を囲うように木々が茂つており、その空間を陽が照らし出すように差している。

人の欲には際限がないものだ。父よりそう教えられた布都は、何か違うなあと、しみじみ思つた。なにより初めて食つた謎の甘い餅がえらく美味かつた。

「ううむ」

茶を啜ると苦味の他に、新緑を感じさせる香りがあつた。きつとこの茶も貴重なのだろう。たいへん美味しく、味わつたことがないものであつた。

茶といえば葉の香りをどうにかしてお湯に移しただけの手間がかかる大して美味くないものだと思つていたが、なかなかどうして今飲んでいる茶は美味だった。きっとこういうのを本物のというのだろうか。しかし、こういうものをしつと独占してるというのは何ともいい身分だなあと思わないでもなかつた。自分にではなく、横の男に對してである。

「どうですか？ なかなかいいものでしよう？」

男は柔和な笑みで布都にもう一つ差し出した。

「いや、結構。舌が慣れると困る」

惜しい気がしないでもないが、一度断つた以上はと布都は未練を断つた。

ここには二人しかいない。

「——馬子殿はいつものこのようなものを口にしているので？」

「そうですね。貿易はうちの管轄なもので、美味しい特権のようなものとでも言えましょくか」

「そう聞くと、蘇我が羨ましく思えますね」

「おや、物部でも似たようなものでは？」

蘇我は貿易を、物部は国内の物品を。それぞれ集めて朝廷に貢いで

いる。互いに特権に与れている。

「うちはもう少し血なまぐさいので」

「それは共通の課題といえますね」

「誰しも土と血が好物なようで」

「なるほど。しかし、あの方ならどうするでしようか」

「兄上のことですか？」

「はい。あの方なら、どのような形であれ上手くやるでしょう」

きつとそうだろうなあと頷きつつ、布都は意外な気がした。

「随分と、評価してらっしゃるのですね」

「数少ない特技というやつです。人を見るのが好きでして」

「——では？」

布都是目を流し、馬子の目と合わせた。

「どう見ていいか分からぬというか、定めてしまふと損してしまう  
ような気持ちになります」

言葉の意味が分からず、布都是首を傾げる。

「損、ですか？」

「ええ。私は決めるということがどうにも嫌いのような気がして」  
「それすらも曖昧ですね」

馬子は大きく頷くと、立ち上がった。

「——しかし、おかげで取り逃すことも減りました」

数歩歩き、馬子は振り返る。

「そろそろ帰りますよ。間違いが起こらないとは限りませんから  
ね。あの人の命は失うには惜しい」

「その間違いが起こらないと踏んだからこそその判断だと思いますが」

「それでも急ぐことに越したことはありません」

布都是立ち上がり、馬子に付いていくことにした。

細い身の背は頼りなかつた。それが弱さに見えないのはこの人に  
よるものだらうと布都是思つた。

決めるのが嫌いというのは、言つてしまえばどんな時でも最後の一  
手は残しているようなものではないだらうか。つまり、目に映るもの  
を信じていない人なのだ。苦労するだらう。自分はどうだらうか。

——いや。

今は考えない方がいいような気がして、止めた。

顔を上げると、集団を成した鳥たちが夕焼け前の空を飛んでいた。時間の進みは思っているより早かつた。



布都と馬子が蘇我の屋敷に戻ると、ざわめきたつた。どうやらもう帰つてこないと本気で思つていた者もいたようで、ざわめきが慌ただしくなり、やがて騒ぎにまでなつた。

走り回る音の中に、力強く確かな足音が混じつていた。

「何を言つている。蘇我の者はまだ恥を重ねようというのか」

それは布都にとつて聞き覚えのある、よく通る声だつた。

「——布都よ。戻つたか」

「ええ、蘇我の居心地は如何でしたか、——兄上？」

「それが茶も出らんどころか、まともに会話も出来ないらしい」

守屋の後ろには困り顔の男が数人。馬子の指示を求めて、視線を送つっていた。

それに対し、馬子は言葉を発さずに、『退がれ』と顎で奥を指した。

「し、しかし——」

馬子の眉間にシワが寄る。

「つ失礼しました」

馬子の機嫌を損なうわけにはいかない彼らは、大人しく退がるしかなかつた。

馬子はそれを見送ると、守屋に頭を下げた。

「これは無作法をしたようで、——申し訳ありません」

頭を下された守屋は表情を変えずに言つた。

「いや、気にしてはいない。そういうものだろう」

「ええ、そういうものです。彼らが去る必要があつたことも、あなたが彼らを鬱陶しく感じたのも、まだ誰も死んでいないことも」

本来ならば、この場で正しかつたのは下がらされた彼らだつた。しかし、正しさという物差しは俗人のものである。二人は、正しさというものが誰かに用意されたものだということを知つてゐる。

「俺はとぼけられるのは好かん」

「はて」

首を傾げる馬子に、守屋は眉を寄せた。

「今更ながらようやく気づいたわ。まつたく情けのないことだ」

この状況は元々、守屋側の仕掛けたものだつた。守屋と布都の二人で蘇我の屋敷に押しかけるという、通常ならあり得ない行動。そのまま馬子と布都が外出までするという事態。それらの流れは全て守屋の考えた通りの筋書きだつた。悪ふざけにしてはやり過ぎてゐるが、若気の至りということで押し通すことにした。

事態としてはその筋書き通りに進みはしたもの、守屋にはやられたといつた感覚があつた。

——試したな。

事前に用意したというのは考えすぎだらう。しかし、ある程度の予測くらいはあつたのではないか。少なくとも負けない程度の予防策のようなものがあつてもおかしくはない。事実、これは勝ちでも負けでもなく、引き分けともいえない。ただうやむやになつた。だが向こうにとつては、ちょうどいいから器でも測つてやるかといった感じだつただろう。敵として見合う存在であるかを。

知つた以上はこのままとはいかない。やれらた以上はきちんとやり返してみせるのが誠実な対応だらう。

「今度はそちらがうちに来るというのはどうかな」

守屋は馬子の反応を期待したが、馬子は何でも無い言つた様子でありながら、

「それはお断ります」

きつぱりと断つた。

「ん?」

守屋としてはてっきり乗つてくると思っていた。

馬子は表情を変えずに、微笑を保ちながら言う。

「やはり、相手は選びたいものです」

「相手？」

訪しむ守屋に、馬子は親愛すらこもつて見える表情を浮かべて見せた。

「あなたに殺されるのであればまだしも、——それ以外の方では足りませんね。この矮小な命となれど、やはりもつたいなく感じます」

守屋は、馬子の命の惜しみ方に外見では分からぬ狂いを見た気がした。

「……選民思想の持ち主とは意外だつたな」

「それは我々が言う台詞ではないでしようねえ」

「まあ、その通りだが」

階級があり、身分がある。才能があり、上下がある。

両者ともにその頂点にいるという自負があつた。今日、二人はそれを知り合つた。

馬子は満足していた。

「それでも今回のことには驚きました」

「それは見えなかつたが」

「ああいう時は流れに逆らわないようにしています。不思議とそろそろほうが結果的に上手くのでね。——私としては、布都姫もこつちの側だと思つてゐるのですが」

「布都が？　まさか、真逆だらう」

話半分にぼやつと聞いていた布都は、顔を上げた。

「……なんと失敬な。唐突に話を振られたかと思えば」

布都是反論しようと難しそうな表情をしたが、

「……まあ、よく分かりませんが。同意するのも癪なので、そのどちらでも在りたくないと言えましょうか」

特に論ずることが見つかなかつた。

考えたこともないかつた。つまりは自分にとつてどうでもいいことなのだろうと思った。

「そもそも、あらゆる言説にさほどの意味を感じません。我々には絶対的基準というものが天より与えられているわけではないのですから」

語りながら、気づいた。

「地上に産み落とされたその時から、我々に与えられたものは全てに 対する不信です。あらゆるものに 対して疑問を持ちます。おそらく 全ての人間が同じでしょう。しかし、その疑いからは暫定的な答えしか得られません。つまり、個人の願望を逸脱しきれないのです。—— なので、『どちらでも在りたくない』と答えるのがまだマシな答えと言えるでしょう」

手に入らないからこそ求めるのだと。それが空虚に感じるからこそ、退屈なのだと。  
布都は口を閉じた。

## 第5話 閨夜

さすがに泊まる気まではない。

帰らないと後が面倒である。そもそも抜け出すようにして来るので、このまま戻つたとしても面倒が待つてゐる。どちらにしても面倒には変わりはないが、軽いに越したことはない。

守屋は周囲に聞こえるように言つた。

「——では、このあたりで帰るとしてよう」

言い終わると、守屋は背を向けて歩き出した。

「帰り道には充分に気をつけてください」

馬子も言い終わると背を向けた。

互いに用はなく、もうこれ以上のことではないと周囲に示してゐる。布都と守屋が屋敷を出ると、空はすでに柿のような暗い橙色をしていた。遠くの空でカラスが鳴いており、夜の訪れを告げていた。二人の歩いている道は草木が除かれただけの人道で、両脇には人が隠れることができるものくらいの木々が立ち並ぶように茂つてゐる。しばらく歩くと、守屋は足を止めて口を開いた。

「鳥がどうして鳴くかを考えたことがある」

長く伸び切つた影が、暗闇と混じり合い出し、輪郭だけがようやく分かるくらいに陽が落ちてきた。

「考へてゐるうちに気になつた。あれこれと予想してみたのだが、いまいち気に入る答えが出ない。お前ならどう考へる?」

同じように足を止めた布都は、守屋を少し見上げると、

「泣きたいから泣いてるのでは?」

首を傾げて、そう答えた。

守屋は鼻を鳴らすと、「まあ聞け」と言つて布都に顔を向けて了。

「俺は2つに絞つてみた」

守屋は左手の人差し指を立てた。

「1つは、恐怖だ。一人では耐えられないから仲間を集めている」

立てた指を一つ増やし、守屋は続ける。

「もう1つは存在の主張だ。自分がここにいるということを自分で確

かめている」

言い終わると、守屋は腰に下げた剣の柄を握った。腰をひねり、すっと剣を抜くと、木々に対してに剣先を向けた。

「——お前らはそのどれかに当たるかな」

木の輪郭が揺れて、膨れる。分離して、人形に成った。手の先から伸びる鋭利な影。武器を持つていて。

「……気づいていたのか」

守屋は肩をすくめた。

「やはり俺はあいつに比べると、少し小さいのかもしだんな。思わず、ほつとしてしまった」

守屋は顎を上げると、影たちを見下すようにして見た。

「敵は弱いに越したことはない。俺は強敵に喜ぶような精神を持ち合わせていないようだ。ここで殺してしまのがもつたいないくらいに、<sup>やす</sup>与みし易そうだ。自尊に、怒りと焦り、どれも俗っぽくて、あまりにも丁度良い」

影たちの持つ武器は槍や弓のようであつたが、その内の一つに剣として捉えられない影があつた。剣とは武器ではあるが、殺傷のしやすさだけでいえば槍や弓に劣る。それでも剣を持つ人はいる。それは地位の証明でもあつたからだ。豪族の、それも長やその限られた親族にしか持てないもの。それが剣であつた。

守屋は剣を横にすると、剣を持つている影の首の高さに合わせた。  
「……何かの間違いで、お前が蘇我の長となつてくれたらどれだけ楽だつたことだろうか。——だが、お前はここで死ぬ。何と残念なことだろうか」

その言葉に、影たちは殺氣立つた。

「——今すぐ殺してやる」

憎悪を向けられた守屋は首を振つて見せた。

「悪いが、それは無理だ。お前たちには到底勝ち目がない」

嘲笑が起ころる。

「この暗さで、我々の数が分からぬいか。二人で何が出来る」  
「例え、俺が一人であつてもそれは現実には起こり得ない。というよ

り、もし俺が一人であるならば、お前たちはもつと早く死ぬことになるだろう」

「何を言つている」

「やはり勿体ないな。その理解の悪さに、思わず惜しくなるよ」

「……問答は止めだ」

あたりはすっかり暗くなっていた。夜と言い切るにはまだわざかに明るさがあるが、表情が見えなくなる程度には暗い。

「——広がれ」

影たちが動き出す。

「お彼らの運命は用意されている。例えここで死なかつたとしても、あいつに手抜かりはないだろう」

言い終えると同時に、飛来音。

守屋は剣を振った。

金属のぶつかる音と、地面に落ちる音。

「面倒だな」

守屋は舌打ちした。

(直接来ればいいものを)

守屋はもう少し挑発してやるべきだったかと後悔した。

「兄上。あまり遅くなると、父上たちへの言い訳を増やす必要が出てきますよ」

「まつたく面倒ばかりが増えていく」

守屋は地を蹴った。

姿勢を四足動物のように低くして駆ける。

身構えた影を確認した守屋は、速度を緩めて敵の目前で上半身を起こした。

守屋の行動の変化に、影は堪らず武器を振るつた。こう暗くては目からでは正確な情報は入つてこない。通常より予測する幅が大きくなる。その予測が困難になつたがために、恐怖を払うようにして武器を振るつていた。その結果は、空気を揺らした音がしただけであった。

守屋は、振るわれた武器と入れ替わるようにしてその空間に入り込

み、剣を振った。

どさりと鈍い音がした。

「よくもつ」

使命と仲間の仇をとろうという意思が載った銅矛が、守屋に目掛け差し込まれた。守屋はそれを半身を引いてかわすと、銅矛の戻り際に柄の部分を片手で掴み取つた。そのまま力ずくに一気に引き、柄の元にある肉体を引き寄せる。その到達地点に、杭のように剣を差し込むと、敵の腹部に深く突き刺さり、生温い液体が守屋の手を濡らした。剣を引き抜くと、守屋は事が終わつたとばかりに、剣に付いた血を払つた。払つただけで落ちなかつた分に関しては、倒れている敵の衣服を裂いて、拭き取り始めた。

その様を見せられ、激昂した者が一人だけいた。

「何をやつていて！ ささつとあいつを――！」

手に持つた剣を振り回し、周りを見る。

「なつ」

いるはずの者が誰も居なかつた

それがどういう意味であるか、察した。

「こんなはずじゃつ」

逃げるしかない。それ以外に生命を維持する術がない。背を向け、全力で駆け出した。

守屋はつまらなさそうに鼻を鳴らすと、その背を冷めた目で見た。

「――布都」

影が一つ起き上がる。その影である布都の手からは血が滴つていた。

「必要はありませんよ」

「ん？」

布都は獰猛な笑みを隠さない。

「死にかけを一人、逃しております。せいぜい血をバラ撒いてることでしよう」

守屋は額を抑えた。

「……そういうのが、好きなのか？」

「まあ、ええ」

どこか嬉しそうに答える布都に、守屋はため息をついた。

「周りには隠しておけよ」

「善処します」

狼とも野犬とも違う、低い遠吠え。

間を置かずに、叫びという形でもつて結果が知らされた。

## 第6話 踏み入れる

数日が経つた。

その日は、影まで照らすような日差しが強い日だった。

門番や稽古に励む兵、室内で難しい顔をしている者まで、多くの汗を流していた。皆険しい顔をしているが、その中で一番険しい顔をしていたのは布都であつた。

布都は大きな瞳を限界まで細めていた。

地面から跳ね返ってきた日光が、瞳から痛みを伴つて差込んできている。

「——姫様、日差しが強いご様子。もうお部屋に戻られては」

布都是一人ではなかつた。後ろに二人いた。

護衛ではない。監視である。

「お前らが居なければ何処へでも戻つてやるとも」

布都是振り返りもせずに言い放つた。昼夜問わず監視されており、鬱陶しくて仕方がない。

「——なりません。ご当主様より言いつけられておりますので」

監視役の男は感情を見せない声で答えた。

「何より、この度のことは姫様の行為がもたらした罰でもあります。甘んじて受けるべきかと」

もう一人の男が、硬い声でそう続けた。

「もう外の空気は充分でしよう。戻りましょう」

そう言われたが、外に出たばかりである。戻るにしては早すぎる。とはいえ、強すぎる日差しに布都も戻る気になつていた。監視役の存在のせいで、毎夜ほとんど寝付けていない。

だが、粘りたかつた。

「……もうすこし歩く」

戻れと言われば戻りたくなくなる。たとえそれが自分を苦しむものであつても、従うのを嫌つた。

布都是数歩だけ歩くと、止まつた。

寝不足がここまで気を悪くするものだとは思わなかつた。

「貴方の立場は決して自由ではありません。それは守屋様といえども同じことです」

あの夜の後、夜が更けすぎており誤魔化せなかつた布都と守屋は尾輿に説教を喰らうはめになつていて。捜索隊まで出ていた上に、二人の衣服には血がいたるところに付着しており、大事になつた。罰ということで、守屋は親しい仲の豪族の元へと一時的に預けられることになつた。これにより、次期当主とされていた守屋の立場が揺らいだと、尾輿の他の子息らが活気づいている。

「分からんなんあ」

布都は独り言をこぼした。

「お分かりにならないというわけにはいけません。姫様には反省を求められておりますゆえ」

独り言というのは誰かに向かつて言うことではない。返事など求めはいないし、その存在も認めることはない。布都は無視した。「ですでのーーー」

何やらまだ何か言つてゐるらしい。きっと聞こえの良いご立派なことを言つてるのだろう。恐らくはどこでも聞けるようなありきたりなものを。

目でなく耳までやられては堪らない。布都は戻る気になつた。

「お前たちの取り柄は、あれだな。忠誠なのだろうな」

布都が振り返りそう言うと、二人の男は誇らしげな顔を見せた。

言葉通りに受け取つたらしい。布都は辟易とした。打てどもまつたく響かない。

「父上は血を見るのが好きらしいな」

到底理解は出来ないだろう。希望が血を流すのだ。

(兄上としては楽になつたのかもしれないが)

守屋が完全に掌握するためには排除すべき存在がいる。

消すなら早い方がいい。やるなら被害者を裝う方がいい。人心は加害者には向かいづらい。

意味が分からぬといつた様子の二人に、布都は色々と馬鹿らしくなつて部屋に戻ることにした。

——今夜だ。

夜の静寂が好きだつた。

決めてしまふと、寝れるような気がした。夜更けまでにはまだ少しある。布都は久方ぶりに気分良くまぶたを閉じた。



闇の中。

布都は、己の存在を知覚した。

目を開けると、暗闇だつた。鈴のような虫の音に、遠くから響いてくる蛙の音。

——悪くない。

衣擦れの音も立てずにゆらりと起き上がると、同じ室内に見張りとして立つてゐる男を認識した。

気配を探ると、中と外で一人ずつ立つていることが分かつた。  
夜更けということもあつてか、意識が薄い。

布都はさつと近づき、腕を掴んだ。

掴まれた見張りの男は、ぎよつと意識を覚醒させたが、

「うつ——」

突如として襲つてきた不快感に耐えれずに意識を手放した。  
床から鈍い音が響いた。

物音に反応した外の見張りが中に入つた來たが、それも同じように腕を掴んだ。

「なつ——」

布都は掴んだ腕から直接靈力を流し込んでいた。耐性の無い者に靈力が入り込むと、扱えない力が外に出ようと体内で高速で巡り回る。それはわずか一、二秒のことしかないが、意識を失うには充分

だつた。

布都は掴んだ手で何かを払う仕草をすると、地を蹴った。塀に飛び乗り、さらに次へと飛び乗つていき、——闇に紛れた。



月は雲に遮られ、あまり顔を出せないでいた。

布都は、そんな月明かりの乏しい闇の中を思い思ひに進んでいく。跳んで駆けていくその様はいかにも自由といった感じだつたが、布都としてはあまり気分は良くなかった。

(気が利かない夜だな)

足を止めると、額に浮かんだ汗を指で拭つた。

風がなく、粘り気のある空氣。そのうち降り出しそうな空。

濡れるのは避けたい。木の下にでも逃げ込むしかないかと、山に向かつた。

夜に出歩くものは少ない。あまりにも命の危険が高い。夜に出歩く者は避けられない用命を受けた悲運な者か、日中には歩けなくなつた社会から弾かれた賊となつた者くらいである。そんな賊ですら夜の山にだけは近づかない。夜の山に入れば間違いなく妖魔に遭遇する。証明が必要ないくらいには人類は血を流していた。

布都は山のふもとまでたどり着いた。

山の始まり。静寂を装つてゐるが、内には妖しさが渦巻いてゐるのが分かつた。

その激しさがふもとまでやつて來ていた。

(待ちきれなかつたらしいな)

布都は愉しげに顔を歪めた。

隠すことすらしないいくつもの気配が、布都を手招くように待ち構

えている。布都が歓迎に応じて森に足を踏み入れるやいなや、気配の一つが飛び掛かってきた。ぎょろりとした目玉に、裂けたような口。

猿のような顔だけがやけに大きく、胴体との均衡が取れていない。

布都は触れることを厭つた。身を躲し距離を取ると、手刀の形を作った手を、猿顔の妖怪に向けて荒く振つた。

「ギヤ、ツギヤギヤ——」

顔に深い裂傷を負つた猿顔の妖怪は、顔から様々な液体を撒き散らしながら暴れまわつた。ただ痛みを誤魔化すためだけのようならめな動き。そうやつて暴れまわつた結果、木に衝突し、その衝撃で裂傷箇所から内容物が溢れた。転倒間際には、狂つたように手足をバタつかせていたが、それも次第に収まつていき、やがて静かになつた。

「——醜いな

日中に見たら、さぞ氣味の悪いことだろう。

血が匂つてきた。苦いがほのかに甘い、そんな香りだつた。

発生箇所は一つしかない。押し返すように鼻を鳴らしたが、あまり意味はない。すぐにまた入り込んでくる。見た目と違つて匂いはあまり嫌ではなかつた。

「これと変わらないと考えると少し嫌だが、まあいいか——」

血の匂いに釣られたか、周りから感じる気配の数が増えていた。

気の高ぶりを感じる。

口元の歪みに獰猛さが増す。

高ぶつたものを周囲に発した。

ざざつ、と葉が擦れる音が立ち、連續していく。  
気配が遠ざかつていつた。

「——つち

楽しもうとしたからだろうか。布都は後悔した。

気の高ぶりが邪魔をしたようだつた。

人を脅かす妖魔も対して人と変わらないらしい。

「冗談ではないぞ。こんなものが自由であるはずがない」

それでも布都は奥に足を踏み入れるしかなかつた。捨てるものはなく捨うものしかない。

そう思つてここまで来たというのに、捨おうとしたものは指に引かれりもせずに落ちていった。

とはいえ、まだ山に入つたばかり。生い茂る木々は未知を隠している。

「まだ出だしだな」

肩を落とすにはまだ早い。

現実なんてものはいつも否定してやるくらいで丁度いい。

そう思えば今の出来事も思慮の外へと出ていった。

## 第7話 瞬き

自然を感じると、摩耗した感覚が研ぎ澄まされるような気分になつた。気配を感知する範囲と精度が増していく。

(思つていたより賑やかだな)

深く入ると、いたる所で小競り合いが起つてゐるのが分かつた。距離が近づけると、波紋のように小競り合いが外へ外へと移動していく。布都は当て付けのようになざと近づくようにして歩いて行く。いつか堪りかねて一斉にこつちに向かつてくるかもしれない。多少の期待があつた。

しかし布都が思うよりも妖魔というのは堪え性があるのが、遠のいていくばかりで起つるもののが起きない。

そうやつて歩いていると、人道に出た。

道は人が4、5人歩けるくらいの少し大きなものだつた。山に入る場合は生存性を上げるために集団で入る。物部氏も護衛として関わっているものだつた。人間が歩く山道というものは、いざというときの為に走れるよう整えられていなければならない。布都はその道に従つて歩き始めた。結局のところ、道は分かりやすいに越したことはない。

感覚に何かの違和感が生じた。

布都は足を止めた。目を細めて、続く道の奥を見る。

出会いというのはいつも唐突であるらしい。当然だが、人は常に自分の想定外の出会いを想像しているわけではない。要は、それを歓迎するか忌避するか、それだけでしかない。

少なくとも、今回にあたつては布都は前者だつた。

草木の輪郭でさえも捉えられる感覚が告げたのは、ひどく歪で無理に組み合つたかのような人の形をした何かだつた。

「——これは、これは、こんなに月が綺麗な夜に人間と出会うとは」  
僧の姿をした男だつた。

互いに向き合う。

「月なら隠れているだろう」

視線だけで上を指す。月は雲に隠れて見えない。

「隠れるているものを見在しないとは言わない。目に見えるものだけを真であると思うこと人に人の限界がある」

「求道者のようなこと言うな。流行っているのか?」

「そのようなもので括つてくれるな。不快だ」

「そんな格好をしていてよく言う」

「……未開の地ではこんなものだろうな。未知を自分たちの知つてい る何かに当てはめたがる」

僧の男はうんざりした表情で言う。

「海まで渡り、苦労した甲斐が無い。よもやここまでとは」

「海というと、ずいぶんと遠くから来たのか?」

「お前には知る必要がないことだ」

男は視線を降ろしため息を吐くと、再び布都に向き直った。

「だが、まあお前でも悪くはないか。多少だが力を感じる。それにどうせなら男より女の良い」

布都は察した。

「食人は関心しないな」

「それはお前が人であるからだ」

「人ではないような口ぶりだな」

「知る必要すらないと言つたはずだ。お前等は家畜を殺すときに行わざわざ説明をするのか?」

「喋る能力があるのなら聞いてみたいだろう。喋れない猿より喋る猿の方が幾分か上等だ」

布都は殺意を表に出した。

男は驚きで体を強張らせてしまい、布都の動きに反応出来ずに上体を反らしてしまった。

即座に懷に入り込んだ布都は、引っ搔くように右手を振った。  
「つが——」

男は腹が裂かれて、倒れそうになる体を支えようと、重心を後ろか

ら前にやつた。

前にかがむように動く男の身体。布都は、その首元に目掛け、左手を振った。

男の喉笛が割かれ、喉と口から血が溢れだす。湿りのある音が発せられる。泡立った音と地面に粘液が落ちる音。

布都は血がかかるのを嫌がつて、距離を取つた。

「気にすることはない。我はお前に期待するところなど無かつた。何なら言葉を使えたことを褒めてやろう」

倒れ伏した男を見下ろしてそう言うと、山の奥に向かつて足を進めた。

周囲は非常に静かだつた。

どうやら山の妖魔達は今の出来事で逃げ去つてしまつたらしい。虫の音さえ聞こえてこないのは違和感があつたが、気にして仕方がない。己の浅い息遣いと小さな足音のみが、周囲に起きた動きを耳に伝えてきている。

だから、布都は気づかなかつた。

それが気配もなく、己の体に到達したことを。背から腹部にめり込んだ鈍い音でようやくそれを知つた。遅れて痛覚が体の異変を訴えてくる。前に一步、ふらつきそうになる体を拒否するように強く踏みしめる。

振り返ると、気が天に向かうように湯気のように立つていた。

「——慣れてはいないようだな」

男は不敵に笑つていた。

布都の腹部に埋まつたものが、中で振動する。

「つぐ

激しい痛みに声が出る。

抑え込もうとすると、逃げるようになると抜け出して男の元へと飛んでいった。

「殺し合いとは殺せば終わりであるが、我々の世界での死と人間の死は同じではない。肉体がすこし壊れたからといって死にはしない。

不滅に近い肉体などそう珍しいことではないのだ。——分かるか？詰ませたものが勝者であるのだ。ようやく勝負の理を出来たお前にもう一つ、次は詰みを教えてやろう」

男はそれを得意げな笑みを浮かべて続ける。

「——ああ、失礼。あの程度の児戯で喜ぶお前に理解出来るかは怪しいものだな」

布都は男を睨みつけた。視線に殺意が載っている。

屈辱から生まれた怒りが、痛みなど薄れてしまう程に布都の中の全てを支配していた。

——ただでは殺さん。

どうしてやろうか。布都の思考はそれに染まつた。  
裂く、潰す、抉る……。きつとそのどれであつても足りない。全てであつてもそう。臓腑が沸き立つ程の熱。頭には凍える程の冷たさ。どうしようもなく、目の前の男を凄惨に殺してやりたかった。

「心配することはない。お前も直に拙僧の一部となるのだ」

僧の男は法衣の中から、蛇の尾のような触手を布都に目掛けて出した。

布都は後ろへ地を蹴り、距離を離しそまに二本程触手を切り落とすと、右に地を蹴った。少し遅れ、布都の居た地には触手が突き刺さり、いくつかの穴を作った。

布都は腹に手をやり、掴むように血を取ると靈力を混ぜ、腕を振つて刃のようにして飛ばした。男は触手を盾のようにして防いだが、刃にあたつた触手が大きく割かれ緑色の液体を撒き散らした。陸に揚げられてた魚が跳ねるように、触手が跳ね回った。

「防いだにしては、ずいぶんと痛そうだな」

布都は、顔をしかめる男に言い放つた。

「その気色の悪いのとずいぶんと似合っているじゃないか。品性を表しているのか？」

言い終わるやいなや、触手がまた布都に殺到する。布都はまた同じように躱す。

「芸がないな」

そしてまた同じように触手を一本切り落とした。

が、

「——どうかな」

切り落ちた触手の向こうから、先程自分の腹部に穴を開けたモノが飛んで来ていた。

間に合わない。体制がそこから脱出することを許さない。このまま受ければ、今度は額に穴が開く。そう覚った布都は比較的すぐに動かせた片手を額にやり、飛来物を掴み取ろうとした。が、その飛来物は途中で急降下して、先程空いた穴の箇所に入り込んだ。衝撃は、すぐ通り抜けた。布都は貫かれたことを知った。

「言つただろう。児戯と言つたのはそういうとこだ。まつたく同じなわけがないだろう。己のことしか考えない者を子供というのだ」

布都は膝をついた。

足に力がいかなかつた。どうやつても胸のあたりでつつかえるようで、立ち上がれない、大きく息を吐き出す。血が混じつていた。

地面が濡れた。生温い液体。どろつとしたそれは、まばゆい生命が含まれていた。

人間にとつて血は特別な意味を持つ。己の過去と未来の存在の証明であり、生の意味。布都にとつては、ただの液体。己を構成するものではあれど、「己ではない。もう一度、大きく吐き出すと、立ち上がりつた。感覚がぼんやりとして、不思議な気持ちよさを感じた。己の肉体から力が湧いてくるのが分かつた。

男は口元をほころばせた。

「運が良い。離だつたわけだ。喰うには最高の餌だ」

ほころばせた口元から、舌が蛇のように伸び出た。嬉しそうに、ちよろちよろと細やかに揺れている。

「そして残念だが、もう仕込みは終わつている」

言い終わるやいなや、布都の腹部からまばゆい光が溢れた。

布都の体はビクリと小さく跳ねると、再び地に沈んだ。

倒れ伏した布都の元まで、男はやつてくると様子を確認した。

息はなく、鼓動も止んでいた。

「死んだか。まさかあれで形を崩さないとは驚きだ」

男は極上の餌を前に、舌なめずりをした。

蛇のように長い舌と、その裏に人の舌があつた。

男は人でもあり、妖怪でもあつた。靈力を持つ人間でありながら、妖力を持っていた。決して同居しないはずの属性を一つの肉体という容れ物に収めていた。人魔が混じつた化け物であつたが、致命的ともいえる弱点があつた。それは男は靈力、もしくは妖力を使って術を発動することが出来ない。その二つの性質は互いを拒絶する。しかし、何らかの要因によつて混ざりあつた場合、拒絶の際に力が爆発的に増幅される。つまり操作と抑制がうまくいかなければ、容れ物である肉体が吹き飛ぶことになる。

人を超えるために妖魔を宿すことに成功した男にとつては絶望であつたが、しばらくするところは必殺の武器足りることに気づいた。男が二つの力を安定させる為に支払つた努力と年数は少なくはない。そんなものを他人の体に急に流し込めば、どうなるか。男はそれを必殺の術として昇華した。

「しかし惜しいな。もう少し育つていればさらに良いものになつていただろうに」

男の術は敵を独鉛杵という術具で貫く必要があつた。それが可能な程度の力の差でないと、術は使えない。基本的な術は使えない以上、男は術具と耐久力をもつて戦うしかなかつた。その耐久力のために、妖怪も人も喰らつた。どちらかに力の量が偏ると、抑制が難しくなつてしまふ以上は偏りなく喰らうしかなかつた。妖怪を喰らうにはさほどの問題はなかつたが、人は問題が多かつた。数が少ない上に、護衛等も付いている場合が多い。その上、当人の戦闘能力も高い。まさしく布都は極上の餌だつた。

「さて、喰うか」

布都の髪を掴み上げようと触れた、その時――。

男の体に電撃が走つた。

何が起こったのかと、男が布都を見た時、見知らぬ力が布都から湧き出していることに気づいた。

靈力とも、妖力とも違う、力。

ゆらりと肉体が起き上がりると、目が合つた。

瞳には生気がなく、こちらを見てはいるようではいるが違和感があつた。見られているというよりは、観察されているような、そんな感覺。

男は自分がいつの間にか距離を取っていることに気づいた。

「何だお前は——」

返答はなかつた。

意図も分からぬまま、ただ瞳がこちらを向いていた。

男は気に食わなかつた。訳は分からぬが腹立たしかつた。

「……もう一度、殺してやる」

死んだはず。男にはその疑念で頭が満たされている。

疑念を払拭せんと、男は独鈷杵を放つた。

「…………」

独鈷杵が布都にまで到達すると、静電気が起きたような小さな衝撃音を発して、一切の独鈷杵が力を失つて地に落ちた。

男は驚きを大きく露わにした。

「つ馬鹿な、そんなはずが」

男は力の属性に気づいた。

布都から発つせられている力には電がともなつていた。

操るどころか発することさえも出来ないとされるもの。男は気づいた。

「神力……」

口に出してなお、信じられない。

「いや、だが——」

否定が出来ない。

証人もまさしく自分であつた。

「つがあ——」

光を見た。

身体の悉くが硬直した。

視界は白に覆われ、感覚はその機能を失い、ただ異常だけを告げた。何かが近づいてくるのが分かった。

何かが近づいてくるのが分かった。たつた少しの間。けれども恐ろしく長い間。

何かに身体を触れられたのが分かった。身体はまともに機能していなかつた。なぜ自分が、自分を触れている何かを感じることが出来るのかが分からなかつた。視界の白が徐々に薄れ始めると、青白く発光する少女が見えた。生氣のない顔に、薄く弧を描いた真紅の口元。瞳はこちらを向いて、何かを覗いていた。紅く濡れる指の腹を舐め取る姿。

——喰われた。

男は己の死を悟つた。たがそれより前に、目に映る光景に魂が奪われた。

己の死のことなど、隅にやつてしまえる程に、魂が惹かれた。神というものはそういうものらしい。その超越に呑まれた。畏ろしかつた。

意識が消えた。

少女は、この場を後にした。

夜空はいつの間にか月が出ており、少女の姿を和らげに照らした。  
「……意識がないわけではなかつたが、まあ似たようなものであつた  
か」

灰銀の髪に、紺碧の瞳の少女。

人のようだが、人と言い切るには違和感があつた。

「つまるところ、己は己を知つたに違いない。うむ、そうであろう」  
何度かうなずくと、布都はちらりと舌を出して血に濡れた唇を綺麗にして、満足そうな表情を浮かべた。

## 第8話 村

山の頂には興味はなかつた。

近づけば近づく程にあらゆるものが減つていく所に用が出来るはずもない。この世の娯楽とは煩雜としたものから生まれるということを布都は知つてゐる。だからこそ嫌がりつつも、否定まではしない。退屈するよりはマシだと思っている。

どれくらい歩いたことか。夜が過ぎ去りつつあり、辺りが白んできていた。

代わり映えしない道中にそろそろ飽きが勝つてきただ頃、水の音を聞き取つた布都は、自分が喉が渴いていることに気づいて音の方向に向かつた。

しばらく歩くと、川が見えた。 ゆるやかな川から流れる水の音に、鳥のさえずり。 どうやら夜は完全に明けたらしい。

布都は口や手の汚れを洗い落とすような人らしい行為を行つた後、ようやく手で川の水を掬つて口に運ぼうとした。――その時だつた。地響きのような低い振動音、遅れて圧力のある水の音。右に視線を動かすと、木々の高さまで伸びるような渦を巻いた水の柱が蛇のようにうねつっていた。

——どこだ。

布都是大きく後方へ飛び下がりながら、感覚を研ぎ澄ませたが、原因となつただろうものの存在を感じることが出来なかつた。一つ分かることは、近づけば逃げるだけだつた妖魔と違つて襲つてくるということ。それはつまり、向こうは勝算があると思つてゐるということ。

——面白い。

いかなる術であるか。対処法に攻略法。布都の頭脳が回転する。謎を解く気分である。

地面に、木々と、渦巻く水の柱は触れるもの全てを削り取つていた。

布都是触れると己が戦闘不能になる程の傷を負うことを見つた。

川の氾濫というのは人にとっては生存に大きく関することであつ

た。それが生に繋がることもある。川の多いこの地において、川にまつわる伝説には事欠かない。布都はそれを知らないが、特段知る必要もなかつた。酒に酔いつぶれる大蛇もいなければ、大層な剣もいらない。ここで必要なのは、度胸とでもいうべき行動力であつた。

布都は川に飛び込んだ。

川を相手にしながら川に飛び込む愚行とでもいう行為。しかし、生き延びるのではなく、敵を打ち倒すという目的においては最適解であつた。

川の外からでは分からなかつた敵の存在も、川の中に飛び込んでしまえば感知出来た。外からでは分からない程に川となつてはいる存在であつたが、実体しては決して川ではなかつた。異がたしかにあつた。異はさらなる異を追い出さんと、荒々さを増し天地きだからぬまでに流れを激しく狂うさせたが、ついぞ追い出すことはかなわなかつた。

布都是兄が矢を放つ姿を思い出した。

後に弓削りという二つ名を持つ兄の矢は、他の者のそれとは明らかに性質が違つていた。速射でもなく、必中でもない。矢を視たものに射手の意を感じさせる特異な矢。射るだけで事が足りるそれは、未だ発展途上という認識の守屋の評価を難しくしていた。

布都是矢をつがえた。

靈子で組まれた弓に矢。川の異に向かつて、青白く発光したそれが飛んでいた。

速度十分。激流に影響されずに正確に向かつた矢は、異の肩口をかすつた。

流された距離のせいで避けるまでの猶予があつた。しかし、効果は十分だつた。

異は川から逃げるように出た。

布都是すぐさまそれを察知すると、同じく川から出て己が矢の如く飛びかかつた。

矢は避けねばすむが、布都是そういはかない。不幸にも一度だけ

避ける動作を許されたが、二度目はなく、鮮血を川べりに晒すことになった。

「あつけないとはいわない。これでも楽しめたほうだ」

半魚のような妖魔の腹を裂き、食指が向くものを掴み上げ口に運んだ。

舌の上で十分に転がし、酔いそうな香りと少しの苦味を堪能する  
と、布都は満足そうに頷いた。

「前に食つた魚は鮮度が悪かつたのであろうな。これは悪くない」

指先を舐めると、

「しかし、見た目は酷いな。とても美味そには見えん。ゲテモノの  
方が味が良いなどという輩がいたが、あれは間違いではなかつたとい  
うことなのだろうか」

首をかしげた。



喉を潤し、腹も満たした。

およそ考えうる楽しみは一通り満たしたような気がする。ただ、こ  
のまま物部の屋敷に帰るのは気が進まない。そもそも帰るという感  
覚に違和感がある。人は場所に帰るのか、それとも人か。もしくは、  
そのどちらでもない何かか。

——解き明かすことに意味があるかな。

結局のところ、自分が一番何を求めてるかなんて分かりはしない。  
欲しいものを全て手に入れてしまつたらようやく分かることなのかも  
しれない。欲が際限なく増大していく人間という存在には難しい  
ことかもしれないが、どこかで事足りたと偽りでもしないと欲に潰さ  
れてしまう。欲の発生源が内から出たものなのか、それとも外から植  
え付けられたものなのか、それさえ見極めることが出来れば取捨選択  
は可能のように思える。

つまるところ、他人の欲しがつてゐるものと己も欲しがるよう誘導されてることに気づけばそれでいい。

——飽くまで寄り道するのもいいか。

好みの欲が見つかなければ、見つければいい。必要なのは楽しもうとする意思くらいであろう。

布都は難しくは考えない。適当に歩いていれば向こうから出迎えてくるだろうと思つてゐる。それが外れだろうが当たりだろうが、関係はない。

布都は出迎えに挨拶をした。

「そこの、一体何か用か?」

布都の視界の端の茂みが、わずかに動いて子供が出てきた。およそ十歳弱といったところの少年。裕福そうには見えないが、食い物に困つてる様子でもない。

「いや、お前こそこんなところで一体なにをしてるんだ」

警戒心を露わに、少年はそう言つた。

「お前に答える必要があるとでも?」

「聞かれたことには答えるものだろう!」

「知らぬ法だ。私は採用していない」

少年は顔をしかめた。

「……お前はいいやつじゃないな。嫌なやつだ」

「こちらからするとお前はそのどちらでもないがな」

「じゃあどうして話しかけたんだよ」

「理由が必要か?」

「もういい。お前と話してると気分が悪くなる」

「そうか? これでも充分期待はしているのだが」

「はあ?」

「お前には興味はないが、お前という存在が現れたことには興味がある」

布都是少年の方を向いているが、見てはいない。状況に対して話しかけているような、半ば独り言のような会話になつてゐる。  
さて、案内くらいはしてくれるのだろう?」

少年はその傲慢さが信じられなかつた。しかし、その言葉を聞いた時、己の中に仄暗い思いが湧き出るのが分かつた。少年はそれに対しどんど無自覚である上に、隠す技術もなかつた。

布都はようやく笑みを見せた。我が意を得たりとばかりに、未來の歓待を期待した。

その村はぽつんとあつた。

外敵が多いこの時代において、村というものは生存戦略の結果のような集合の仕方をしているが、その村は虚空に突然現れたかのように存在が異質だつた。山のふもと、そこで夜を過ごすには辺りに木々が多くすぎた。土地がほとんど切り開かれていない。いつでも何かが忍び込めるような、そんな村だつた。

「ここ」が俺たちの村だ

布都が村の敷居を超えた時、肌に何か当たるような感覚がした。「見ての通り、特に何もない村だけど夜を過ごすくらいは出来る。飯も多少はある」

「ふむ」

布都は袖に両腕を通して合い腕を組むと、周囲を見回した。

村の中で小さな畑を耕している男に、狩りの帰りなのか、弓矢と獲物を担いでいる少人数の集団。そのどれもが布都を一瞥すると、視線をどこかへやつた。人並みではない容姿に釣られた、というわけでもなさそうだった。

——悪くない。

期待外れとはいかなさそうだつた。

「夜、何か食つてくだろ？　日暮れまで待つてくれたら、用意出来るから待つてろよ」

「ん？」　ああ、そうしようか

村の中で夜まで待つていて欲しいらしい。

こう分かりやすいと、存分に乗つてあげたくなつた。

肉を焼くと、脂が焼ける香りに食欲が存分にそそられるが、これも似たようなものだろう。こういうのは馬鹿にでもなつたがごとく、素直に堪能するのがいい。布都は言われた通りの小屋に入り、望まれて

いる通りに外に出すに中でゆっくりすることにした。

不満があるとすれば、話し相手が変わらないことだろうか。飽きがきている。

「その、身なりから考えると、結構身分が高いんだろう？」

「そう思うなら、言葉遣いを改めねばな」

「あ、そうか、えつと……」

「冗談だ。今まで通りでよい。いつもは顔を上げさせるにも許可を出す必要があるのでな、こういうのも新鮮でよい」

「そつか、そんなに……」

少年の顔に期待が滲む。

「それもただの高貴な身分というだけではない。私は特別である」

「特別？」

「妖魔の類からするとヨダレが止まらぬような存在とでも言おうか」

驚きで、少年は大きく口を開けた。

布都は笑みを深くする。己の立場を得意気に話しているからだと、向こうは思っているのだろう。

（あと少し勘の良い者であれば、あからさまに欲しい情報をくれることに何かしらの違和感を持つただろうに）  
「それより、少し疲れた。一人になりたい」

そう言うと、布都是目を閉じて壁に寄りかかった。いかに勘が鈍い者でも伝わったようで、少年は小屋から出ていった。

扉が開く寸前、気を察知した布都是目を開けた。

「つ起きてたのか」

「悪いか？」

「……いや、丁度良かつた。飯の用意が出来たから来てほしい」

布都是立ち上ると、夜の静けさの中にひつそりと蠢くものを感じた。

——どうやら本当に用意が出来てゐるらしい。

布都是村の中で一番大きな家屋にまで案内された。

「ここだよ」

扉が開けられ、中の様子が見えた。広い間が一室のみであった。篝火が焚かれており、揺れ動く影から数人の人間がいることが分かった。

「肝心の食事が見えないが」

「後から運んでくるよ」

「そうか」

「……先に入つて待つててよ」

どう考へても畠に等しい死地である。

布都は中に足を踏み入れた。

すぐに扉が閉められ、追加で硬質な物音が一つ立つた。中からは開けれないようにならしたのだろう。

気には進むと、左右に壮年の男が二人ずつ座つて、表情の読めない顔でこちらを見ていた。

「何か？」

返事はない。

——焦らしてくるな。

催促してやろうかと、殺意を表に出そうとした辺りで、ようやく出てきた。

奥の隅にある扉が開かると、卵に顔の絵を薄く書いたような男がやってきた。広間の奥の中央まで歩くと、嬉しそうに布都を見て言った。

「これは素晴らしい」

上質な着物を着ており、地位の高い豪族の若い長のような出で立ちはだつた。

男は線のような目と口を三日月のように歪め、言つた。

「いくつか質問しても？」

「こちらの質問に先に答えるのであればな」

「分かりました。では、どうぞ——」

布都にとつて知らなければけない情報はない。

質問をする理由など、戯れ以外になかった。

「昼間は見かけなかつたが、どこに？」

「村の者と一緒に狩りに行つておりましたよ。……では、こちらの質問ですが」

「——まだ終わつてはいない」

布都はさえぎつた。

「……どうぞ」

顔の線がひくついた。どうやら感情はあるらしい。

布都は笑みを作つてみせた。

「悪いが、忘れた」

「え？」

「つまりだ、あれこれ考えたが面倒になつた」

布都是笑みを深くし、殺意を表に出了した。

「馳走になれるというから、わざわざ乗つてやつたのだ。そろそろ頂くものを頂こうじやないか」

布都の横で座つていた男がざつと立ち上がる。

「生存に必要なものは勘所だぞ。……お前等は正しく働かせれるかな？」

言い終わる前に、布都の両手は血に濡れた。布都へ飛びかかるとした男が二人、地に伏した。

布都是奥の男を指すと、

「ああ、お前にはその必要はないがな」

ぽたぽたと指から血の滴らせながら、死の宣告を行つた。

布都是返答を待たない。そのまま前へ一つ短く跳躍し、素手で頭から二つに身体を割いた。

すると、後ろから悲鳴が上がつた。

「な、何てことしやがる！」

「開けろっ！——早く、開けろ!!」

男二人は怯えに満ちた顔で、扉に殺到した。

扉を力任せに叩く。壊しても、ここから逃げなければならぬ。男たちは必死だつた。

外から物音がして扉を開くと、男たちは一齊に飛び出した。

「ど、どうしたんだよ」

扉を開けた少年が聞くと、

「つあいつ、やりやがつたつ」

男たちは振り返ると、これから起ころる惨事に身を震わせた。

「何人持つてかかるか分かんねえぞ……」

少年は不安に支配された。

何か尋常じやないことが起こつたことは分かつたが、結局のところ何が起きたかが分からぬ。

ただ、どうしてか自分が何かやつてしまつたような、そんな予感だけがした。

「お前の連れてきたあいつ！　あいつがやりやがつたんだよ！」

分からぬ。何か世界と自分が遠くなつたかのよう。ただ一つ、気になつた。

「——父ちゃんは？」

「ああ？　もうすでにやられちまつたよ」

「え？」

分からぬ。分からぬ今までいたい。

「とにかく、やべえぞ。口クに残つてやしねえが、女子供を集めのしかねえ」

残酷な生存戦略がここにあつた。

「全部持つてかれることがないことを祈るしかねえ」

命とはその他の命の上に成り立つてゐるものである。その有り方に多少の差異があることもあるが。

「全員集めるぞ。寝てるやつがいたら叩き起こせ」

村は決して広くはない。すぐに集まつた。

事態の説明を受け、皆、深刻な顔をしてゐる。助かるのか、助からないのか。そして誰が助かるのか。それでも逃げ出す者だけはいなさい。

「……にしても静かだな。もしかして逆にやられちまつたんじやないのか？」

「馬鹿いえ。そんなわけがあるか。相手は神だぞ」

「……あんなのでもな」

「やめろ。それを言うと耐えられなくなつちまう」

地が揺れた。

木が破裂する音を奏でながら、衝撃を周囲に伝えた。

見上げた先、屋根一つ分程高い位置に、二つに裂けた卵のような顔、その下には肉が地面まで連なつていた。

口の線が上下に裂けると、地響きのような音で言葉を発した。

「——寄越せ。あらゆる全てを」

村人は絶望した。

自分たちがあの一部になる時が来てしまつたのだと、覚つた。

「はてさて」

村人が集まるよりも早い頃から、小屋の屋根の上で座つていた灰銀の髪の少女は、愉しげに細指で唇を撫でて眺めていた。

「随分と醜いなあ」

どちらを指して言つたのかは分からぬ。

## 第9話 不満足

村人たちは、逃げるために距離を取つた。人間としての本能だつた。命の危険からは逃避するようになっていて。だがそれは絶対命令ではない。必死の状態とわかつた上で、立ち向かうこともある。少年が吠えた。

「ふざけるなっ！ 父ちゃんを返せよ！」

布都をこの村にまで連れてきた少年だつた。その目には、妖魔に組み込まれて間もない原型を保つたままのよく見知った肉体が映つていた。もう助からないということは分かつていて。だが、今ここでそれに気を取られるわけにはいかなかつた。意地であることくらいは分かつていて。到底太刀打ち出来ないことも分かつていて。それでも背を向けるわけにはいかなかつた。

「馬鹿野郎っ、さつさと逃げるんだ！」

少年の腕を引っ張られ、無理矢理遠ざけられる。

「何でだよ！ 父ちゃんがいるんだぞ！」

「諦めろ！ 生きたまま喰われたやつなんかいやしねえんだ。あれは絶対に死体しか喰わねえ」

「違う、そうじやない！」

「いいからこい！ お前まで死んじまつたらどうする！ 生き残るためには何でもする、それがこの村の捷だろうが」

少年は奥歯を割れんばかりに噛み締めた。

「……つでも」

否定しなければならなかつた。整理のつかない感情に涙が溢れる。

「……大体、どこに逃げるつていうんだよ。村から出れば必ず死ぬつて」

「それをやる」

「え？」

「生き残つたやつ全員で逃げりや、一人くらいは生き残れるかもしねえ。こうなつた以上はやるしかねえんだ」

少年が顔を上げると、覚悟を決めた顔の男が見えた。

「ごめん」

「今はそういう時じゃない」

「うん、ごめん」

事の発端は自分のせいだと少年は謝った。それが伝わったかどうかは分からぬが、とにかくのんびりしている時間は無かつた。

ここには二種類の人間がいた。生きるために逃げる事を決意した者たちと、生きるために頭を下げた者たちだった。

化け物に向かつて老いた一人の男が跪いている。

「仮面様、どうかお鎮まりください。我らはあなた様に忠誠を捧げた身、どうかこれ以上は——」

正しさなんて分かりはしない。そんなものは過去にしか存在しない。

あがいた結果が過去になつてようやく分かる。

老人の言葉に化け物が返事をした。

「ならば、その忠誠を見せろ」

土の根ような手足を使い、屋根で優雅に眺めていた少女を指し示した。

「そいつを引きずり下ろし、我が下に差し出せ」

「ははっ」

屋根の上の少女、物部布都は笑みを見せた。  
身を隠すどころか、身動き一つしない。

「射落すのだ！」

老いた男の命令で、老人の周りにいた者たちが駆け回り、弓矢を準備すると布都を狙つて弓を引き絞つた。  
「ここまで緩慢だとあくびも出ないぞ」

布都はずつと待つてあげていた。

それは矢を射掛けてもそうだった。避ける氣にもならなかつた。  
また、実際に射掛けられた矢は外れた。

「それじや野兎も狩れん」

布都は屋根から飛び降りてみせた。

「そら、もう一度やつてみるといい」

大きく手を広げ、そう言い放った。

一步踏み込むと、周囲の人間は一歩引いた。

「と、取り囮め！」

布都の目的は初めから変わらない。どう楽しむか。それ以外はない。だからこそ、予想を超えるものを期待している。

目を細め、周りを確認する。

自分を囮む人間たちの腰は引けていた。少し遠くの気配は動きを止めていた。

(さてどうなることか)

微笑を見せた。それが合囮となつた。

「押し倒せ！」

距離が詰まる。

布都は微笑を引っ込めた。

右腕を伸ばし、組み伏そとやつてきた者の頭を掴み、潰す。もう片方の手で、吠えながら突進してきた男の首を割いた。身を回転させ、落ちゆく頭を蹴り飛ばし、指示を出した老いた男に当てて昏倒させると、動きが止まつた。

ほんの少しの間の動作。場の空気を変容させるには充分だつた。

「うそ、だろう——」

怯えから出した現実の否定。言葉を発した者に向かつて、布都に目を合わせ舌なめずりをして見せた。

「つひい」

布都はわざと酷さを出して殺して見せていた。怯えを仮面の化け物に対してもうではなく、自分に生ませるため。

恐怖は二分された。

布都はそれ以上を望んだ。仮面の化け物に対する恐怖を自分へと塗り替えてやりたかった。

「も、もう嫌だ——」

一人、耐えきれなかつた男が逃げた。

「——忠誠は、どうした」

地面が震えるような声。

地中から生えた木の根のような手足が、逃げた男の腹を貫いた。

「つ——」

男の名を叫ぶ声。

村人にとって極限の状態だつた。逃げれば死、従つても死。動かないでいることが、延命出来る唯一の方法だつた。だがそれも数秒だけであることは分かつてゐる。分からぬはずもなかつた。生死の狭間、人はその在り方を変えることがある。

逃げた男が腹部を貫かれた時に男の名を叫んだ者の表情が、悲嘆から悲憤に変容した。

「——何故だ、どうしてこうなる。生きることさえも選べないのか返事はない。」

「ただ生を願つただけじやないか。その為に必死に生きてきただけじやないか。もう俺の娘もいない。どうしてこうなるんだ」

この村で生きるには常に犠牲が必要だつた。

外敵から守つてくれる代わりに、生贊を出さねばならなかつた。逃げたものは全て慘たらしく殺された。そのうえで、罰として生き残つた者にさらなる生贊を要求した。

租税は命によつて行われていた。

「今だ！ 射掛けろ！！」

火が降つた。

最初に逃げたはずの者たちが戻つて来て、火を灯した矢を仮面の妖魔に向かつて射掛けていた。

「お前ら、大丈夫か！」

「な、なんで、戻つて」

少年が前に出て答えた。

「意地だから」

生きることを考えるなら、あのまま逃げ去つてしまふのが一番確率が高かつた。それでも戻つてきた。

「生きるとか死ぬとかじやない」

このまま、逃げて終えてたまるかと、腹が立つた。それが生存本能を越えた。

「あのクソ野郎に一矢報いてやらないと、この先絶対に納得出来ない！」

恐らくは死ぬことになるだろう。皆、そう想つてゐる。一度は決死の覚悟で逃げることを決めた上で、それを翻してこの場に戻ってきた。死の恐怖はもう通り越して來ていた。

「愚か者め——」

怒りを表す妖魔に、緊張した顔の村人たち。その中に一人だけ愉快そうに口元を撫でる少女、布都がいた。

「悪くない。良い土産話が出来た」

布都の中で人間という存在の印象が上書きされた。

少し前からなんとなく変容してきていたものが、形を帶びてきた。

布都は村人たちに向かつて口を開いた。

「——見守つているのと、手を貸すのどどちらがいいか選ぶがいい」

答えは聞かなくても想像出来る。

「しかし、手を貸す場合は我を主と仰げ」

鬱陶しくて拒んでいた存在を、今なら所持してもいいという気になつた。

「ど、どうする——」

そうは言つても、時間はない。この瞬間、もしくは数秒後、いつ仮面の化け物が襲いかかってくるか分からない。

死ぬ覚悟はしてるが、決して死にに来たわけではない。だが頷こうにも、手を貸すといった少女の手は仲間の血で濡れている。

一瞬の逡巡。

答えは出でている。後は納得の問題である。

少年が声を張るために顔を上げた。

「頼むよ！」

注目が少年に集まる

「あいつをぶつ倒せるなら、なんでもいい！」

「あ、ああ！」

「そうだ——」

周りの全てが呼応した。

布都は面白かった。染み込んだ恐怖が上書きされる様、恐怖が払われる様。命の輝きを初めて見た。人がひどく崇高なものにすら見えた。

——いかんな。

乗せられそうになる自分を抑えた。

これは元々、己の欲を満たすだけの行為であるはずだ。思い上がりつた者を地に落とし、踏みにじる。断末魔を聞きながら、腹を満たす。そういうものののはずだつた。

(しかし、この高揚はなんだろうか)

「聞くがよい。我が名は物部布都である。それが、これよりお前たちの主の名となる」

己は人の上は立たない。そう決めたはずだつた。兄を見て、その生き方は自分には性に合わないと、そう思つたはずだつた。

己を支持する声を受けると、少し気恥ずかしげに鼻を鳴らした。

「……さて、義務を果たそう」

布都是仮面の妖魔に向き直つた。

後ろに村人が集う。

「何をすれば——」

村人たちの顔の緊張は解けてはいない。

己に出来ることであれば行う。決して人に放り投げたつもりはなかつた。やるべきことを行う。それが目的に繋がるのであれば、何であつたとしても。

その覚悟を持つて布都の指示を待つた村人たちだが、布都の返答は簡素だつた。

「少し離れている。巻き込まれても知らんぞ」

振り返りもせずにそう言つた。

(気の昂りというのも問題だな)

ただの人間がやる氣を出したからといって、妖魔に勝てるはずもない。死にたいのであれば別だが、そういうわけでもない。恐怖は恐怖としての重要な役割がある。それを忘れてはいけない。

それより、少し気がかりなことがあつた。

布都は視線を上げた。

「なぜ攻撃せずに待っていた？」

布都の声は大きくはない。しかし、天から告げられる言葉のかのようによく通つた。

仮面の妖魔は答える。

「人間の心というものが移ろいやすいものであるということを知っているからだ」

物理的に上から発せられる、地響きのような声。同じようで、まったく違つていた。

言い終えると、仮面の妖魔は肉の触手の一本を周りによく見えるよう掲げた後、地面に突き刺した。触手は地面を掘り進み、村人たちの固まつている地面から勢いよく飛び出した。

「なつ——」

反応が遅れた村人の一人を絡め取つて、上に掲げた。

「——聞け。もう一度、我が元に頭を垂れろ。そうすれば命は助けてやる上に、これまで通り守つてやる」

続ける。

「否と言えばこいつを潰す。特別に何度も問うてやろう」

絡め取られた村人の苦痛から出る声が響き渡る。

「最後の一人まで、問うてやる。すぐに答える方が得だ。犠牲は少ないに越したことはないだろう」

絡め取る力が増したのか、苦痛の声も増した。

——さて、どうなるか。

布都は視線だけを後ろに向けると、村人たちの顔には恐怖ではなく憤怒の色が現れていることが見て取れた。

——ならば。

布都は構えた。

「受け止めに行くやつを決めろ」

腕を振るう。

青白い刃が飛翔し、村人を捉えていた触手を容易く通化した。触手と共に、村人が落ちていく。

慌てて駆け出しつた村人が仲間を受け止める。一命を取りとめた  
村人は周りに礼を言うと、すぐさま自分の足で立ち上がり妖魔に向  
かって睨みつけた。

それは明らかな敵意であつて、そこには毛ほども順従さはなかつ  
た。

「分かつた。ならば死ね——」

皆がこれからのことに寛悟を決めた時、布都は不敵な笑みで右腕を  
上げていた。

青白い刃が、仮面の妖魔の割れていた部分に到達し、血が吹き出し  
怒りの叫びが上がる。

「痛みがあるのかよく分からないな。もう少し、傷つけてみるか」  
痛がるそぶりより、怒りだけを表に出す妖魔に布都是続けて攻撃し  
た。

複数の青白い刃が一斉に妖魔を襲い、妖魔の体中から血を吹き上げ  
た。

「ふむ、腹立たしさが勝つてるとこは、そもそも大して痛みを感じ  
ていなさそうだな」

布都に向かつて、上から下からと触手が、その身体を貫かんと殺到  
した。

「うーむ、醜くく情けない叫びでも上げてくれたら満足出来るのだが」  
襲つてきた触手を、くるりくるりと身を回転させて避ける。その際  
に、次々と両断された触手が地に落ちた。  
「これじゃつまらんぞ」

見上げ、そう言う布都は、さらなるを求めた。

「ところで、——お前、頭が高いんじゃないか?」

布都はそう言つて指を妖魔の仮面に向かて指すと、炎が燃え上がつ  
た。

「あの鈍い刃が刃の役割しか持たないとでも?　お前のほうがはるか  
に鈍かつたわけだ」

炎に包まれた触手が布都に向かつていく。

布都是薄い笑みを浮かべたまま動かない。

そんな布都に目掛けて、上から押しつぶそうと触手が降つてきた。

布都に到達すると、地響きが起きた。

「足りないな」

布都は、降つてきた触手を右手一本で受け止めていた。触手が逃げようとうねるが、布都に触れらている箇所だけが動かない。

「——調子に乗るな」

怒りを表すように触手の速度が上がつた。風を押しのける音と共に、布都の両側から触手が挟むように迫つてくる。

布都は掴んでる触手を下に引き寄せる、真上に飛び上がつた。

「力も、速さも、——知恵も足りない」

追いかけてきた触手を足場代わりに、蹴つて仮面に接近する。

仮面の化け物は後ろへ仰け反つた。

「その上、心も足りていらない」

布都是手を目一杯に広げて仮面に覆いかぶせ、勢いそのまま、地面に押し倒した。

視界いっぱいに土煙が起つた。

村人たちからは、どうなつたのかの様子が分からぬ。来るなと言われた以上は行けない。どうすると周りを確認すると、皆同じようだつた。

「——行こう」

誰かがそう言つた。

一度、言葉になれば我慢は出来なかつた。皆頷き合うと、駆け寄つた。

布都是仮面に足をかけ、ぐつと上半身を折つて顔を近づけた。耳は無いが、耳元で囁くようにして言つた。

「恐怖がどうとかと言つていたが、どうだ、——今の気分は？」  
仮面から軋む音がする。

「怖いのならそう言つてみろ。すぐに楽にしてやるぞ？」

布都是くつくつと笑つた。

返答は無かつた。布都が足に力を入れると、仮面から出る軋む音が

大きくなつた。

「残念だ。どうなぶつてやろうと考えていたのだが無駄だつたな」

布都はかけた足を外すと振り返つた。

「トドメはお前たちでやるがいい」

そう言われた村人たちに依存はなかつた。自分たちの手でやれるのであればそれに越したことはなかつた。

もう興味をなくしていた布都は、その様子を見るわけでもなくぼんやりと空を見上げていた。

「はあ

ただ消滅を待つてゐるようで、つまらなかつた。満足には程遠かつた。得るものはあつたが、最後の最後で肩透かしをくらつてしまつた。

(もう少し遊ぶか)

布都は帰りを延期した。

## 第10話 変化

結局のところ、布都はどうして帰ることを延期したのかは分からなかつた。何となくその方が良いような気がしただけという曖昧なものしか浮かんでこなかつた。

「自分が何を望んでいるか。その答えをハッキリと持つている者はいるのかな」

布都は手頃な岩に腰掛けながら、そう呟いた。

右膝を曲げ、左の太ももの上に置いている。両手は後ろにやつて岩に手をつけて重心を後ろに流していた。

首を上げるといつも変わらない夜空が見えた。

「何か、お悩みですか」

布都は1人ではなかつた。周りに幾人かいた。村にやつてくる妖怪等への見張り番である。

「屋敷に戻らなければいけない気がするが、気が進まない」

「何か懸念でも？」

「ない。……と思うのだが、実のところあるのかもしれない。このまでも悪くない気がするものの、どうしてかそれでは良くない気がする」

「では答えは出てるようなものです」

「戻るべきか」

「はい」

村人はうやうやしく頭を下げ、礼を取つた。

「我らはどこへなりとも付いていきます」

周りの村人たちもならつて同じように頭を下げた。

「念を押さずともよい。明日の朝にでも発とう」

「承知しました」

「一応言つておくが、つまらない所だ。その上に命の危険もある」

「つまらないかどうかはさておき、命の危険であれば今でも充分かと」「たしかに」

布都はくすりと笑うと、立ち上がつた。

「じゃあ、我は寝る。お前たちも上手くやれ」

「つは」

決めた以上はやる。布都はそう思うも、そう思わないではいられないくらいには気がすすまなかつた。義務というのはそういうものかもしれない。



山を降り、人道を通り、その集団はかなり目立つた。  
しかし、その歩みが邪魔されることはない。

先頭を行く者に、皆が気後れした。灰銀の髪に空のような瞳、己とは違う存在に皆が道を開けた。どこの誰かと聞きに来た者も、ただ一度名乗るだけで去つていった。

屋敷の前までたどり着くと、門前で護衛と一緒に父の尾輿が待つていた。

布都が立ち止まる、互いに目が合つた。

少しの間、無言が続いたが尾輿が先に口を開いた。

「……布都、で間違いないか」

「感じたままに判断するのがいいでしよう」

尾輿は眉を寄せたが、布都は変わらず無表情だつた。

「後ろのは我的部下です。寝食の用意をお願い出来ますか？」

「ああ。その程度であれば問題ない。すぐに用意しよう」

「助かります」

布都は振り返ると、目だけ合わせた。村人たちが頷いたのを見ると、前を向き直した。

「では我は休みます」

布都は屋敷の中へと歩いていった。

自室へ行く途中、首を傾げた。

尾輿の様子が前とは違っていた。前のままだと、あのまま長々と問答することになつただろう。しかし、一番最初の問い合わせた。人が変わるには何かきっかけが必要になることを布都は知っている。

(何かあつたな)

てつきり何かしら言い合いするものとばかり思つていた布都は、気がかりになつた。

(後で聞いてみるか)

部屋に入ると、懐かしさが香りとともにやつてきた。

腰を下ろすと、壁に寄りかかり目を閉じた。

力が抜けていく感覚がして、思いの外自分が疲れていたことを布都是知つた。

(少し寝よう)

意識がぼんやりと輪郭を失い、まどろみの中に溶けていった。

そうしてしばらく経つた頃、部屋の扉が開いたことで布都は目を開けた。

「お前が布都か」

知らない男だつた。年は少しばかり上。目の力が強く、身体は鍛えていそうな肉付きだつた。

布都は口を開かなかつた。頭の中で既に数度殺した。

「おい、俺の言葉が聞こえていないのか。お前が布都かと聞いている」  
布都にとつて、二度言われようが催促されようが自分が行動する要因にはならない。脅威も興味も毛ほどに感じない。

布都は見ることすらやめた。

「……どうか、後悔するぞ」

去つたのが分かると、布都は立ち上がつた。  
日差しが眩しかつた。

「教育がなつてないな」

開けたままになつていた扉を閉めると、そう言つた。

部下を何人か連れていだが、どれも同じような態度だつた。

(もしやこれか?)

尾輿の変容の原因が分かつた気がした。

この後、また同じことがあつた。それにより布都は確信した。

(このままでは物部氏が内部から壊れるな)

身の程を超えた欲というのは己を滅ぼすが、欲によつては周りを巻き込むことになる。

(さつさと兄上を呼び出さば片がつくだろうに)

自分を特別な存在だと勘違いしたやからほど面倒なものはない。理想を無理に現実として当て嵌めようとするから、歪が生まれる。関わつて良いことはない。

しばらくすると、また同じようなのがやつてきた。

「——お前が」

何か言つている男の横に、まだ十を越えたくらいの童男がいた。緊張しているようで、表情が硬かつた。子供とはいえ、女のよう線が細かつた。

——おや?

何かを感じ取つた布都は、身を近寄らせた。

「名は?」

「——あ、えつと、贊個といいます」

「そうか」

名前を聞くと、布都は身を引いて元の位置に戻つた。

その様子を見ていた贊個の横にいた男が、気分良さげに鼻をならした。

「お前の弟だ。お前を越える才能の持ち主だとも言われている。態度を改めるなら早い方がいいぞ」

何か言つている男を無視して、布都は贊個によく見えるようにして指を立てた。

「見えるか?」

びくびくとしていた贊個が目を大きく開くと、

「は、はい!」

かしこまつたようにそう答えた。

「充分だ」

布都は微笑んだ。

満足した布都は、虫を払うような手付きを行つた。

「もういいぞ。去れ」

布都は退出を促した。

「いい加減にしろよ——」

そう言つて踏み出した男を、布都是鬱陶しそうに睨んだ。

「つ」

睨まれた男は、息が喉で詰まつた。そのまま逃げるようにならぬで睨んでいた。

今度は扉は閉められた。

夕方になった。

夕食は運び込まれずに、別室で取ることになつた。  
案内された部屋の中には、父ともう一人。布都是記憶を辿つて、その者が物部氏の中で最高の術師であることを思い出した。己の師として数日接することになつた男だつた。

「来たか」

空いた席は一つ。

布都是座つた。

「念入りに人払いはしてある。近づく者があればすぐに排除する手筈だ」

「何か聞かれたくないことでも？」

「いや。お前が好きに喋れるようにしただけだ」

布都是首を傾げた。

「深くは聞きませんが、あまり意味を感じませんね」

「聞こう」

「聞かれたくない話など持ち合わせていませんので」

「まあ、そなうだらうな。——こちらから話そう」

尾輿は真面目な顔で口を開いた。食事にはまだ手をつけていない。

「……兄弟には会つたか？」

「ええ」

「どうだつた」

伺うような視線。

布都は素直に答えた。

「特に。顔も大して憶えていませんね」

「……そうか」

「ああ、でも一人だけ顔を憶えますよ。優れた術師になるでしよう  
「お前がそう言うのであればそうなのだろう」

「聞きたいことはそれですか？」

「ああ」

尾輿は黙り込んだ。

横の術師が尾輿の盃に酒を注いだ。

尾輿は一気に呷った。

「あいつを呼び戻す」

「よろしいので？」

誰を指しているか、疑問は浮かばなかつた。

「必要があるだろう」

「私は傍観に徹するか怪しいですが」

「どうせ結果は変わらないだろう」

尾輿は深くため息を吐いた。

「悪くはないんだ悪くは……」

布都は食事を口に運びつつ、この父にも情というのものがあるとは  
と少し感心した。

「いなくなつてから分かる何とやらですか？」

「それだけなら良かつたが、な」

これまでの人生を氏族の維持、強化を第一に考えてきた尾輿にとつ  
ては、跡継ぎの問題での内輪揉めが信じられなかつた。揉めるという  
のが分からぬでいた。こんなものは勝ち取る以外にないと思つて  
いる尾輿からすると、寝ながら遊んでいるようにしか見えない。この  
程度のことには時間をかけているようでは、物部としての政治は到底務  
まらない。

「血が多く流れるでしょう」

「……出来るだけ最小限にしたいのだ。長期化するも、大きくなるも、  
必要ない血が流れる」

尾輿は布都を見た。

その意図は明確だった。尾輿は小さく言う。  
「有望な者は残してほしい」

布都は眉を寄せた。

「それを兄上にやらせるつもりで？ 『自分でやつた方が早いでしょ  
うに』

「次の長がやる方が收まりが良いだらうからな」

「ああ、そういうことですか。我としては兄上が望めばそうするだけ  
です」

「充分だ」

恐らく結果的にそうなるだろう。布都は、面倒そうな顔で事を終わ  
らせる守屋を思い浮かべた。

「ではそろそろ——」

布都は立ち上がった。

去り際に振り返ると、

「前よりひづいぶんと話しやすくなりましたね」

「少し弱っているだけだ。歳のせいにしておけ」

「そうですか。人とは変化するもの。これが旅路で得た一番大きなも  
のがもしげません」

「旅か、良いな。羨ましくすら思える」

尾輿が少人数で外に出るようなことがあれば、いたるところから刺  
客が訪れることになる。

布都は部屋から出ると、部屋に残っている尾輿は大きく息を吐い  
た。

「……疲れたな」

横の術師がいたわる。

「肩に乗るもののは重さからすれば仕方がないよ」

「まあ、な。……あいつの言葉ではないが、あいつ自身も前より話やす

くなっていた。旅のせいかな

「私の目からでもお変わりがあつたように感じました」

「髪の色からして違うしな。……で、どうだつた。贊個と比べてどれだけ違う」

わざわざ同席までさせた理由がそこにあつた。

「難しい答えになりますが」

「何を言おうと構わん。今更腹など立てるわけもない」

「……では失礼して。贊個様はあと数年もすれば私の座を譲れる程の才氣を感じさせます。これぞ物部が神の恩寵を受けている証とでも言えましょうか」

「聞こえが良い話だ」

「しかし、姫様に関しましては何も分かりませんでした」

尾輿は術師をまじまじと見た。術師の男は神妙な顔を下に向けていた。

「……人が神を測ることが出来ないのと同じです。私などが力を測ろうなど、畏れ多いことです。私があの方の名を口にすることは、これから先に一切無いでしょう。私にとつてそれは不遜を超えております」

尾輿は言葉が見つからなかつた。

「分からぬことが分かる程度の私が何を言うかと思われるかもしれません、あの方の進む道が物部の道となるでないかと」

「その分からぬことが分かる程度が分かるやつはお前の他にいるか？」

術師は首を縦にも横に振らなかつた。

「分かつた」

尾輿にはその答えが何を意味するかを理解出来た。どちらも正しくないというだけだつた。

「俺がまだ生きていることが一番の証拠だな」

汁物を口に運ぶと、すっかり冷えていて、喉を伝う感覚がありありとした。

「この機会に毒も入れれないとはな」

尾輿は食べる気を失つて、立ちが上がつた。  
外はすでに暗くなつていた。

## 第11話 とある日常

数日後のこと。

布都が目を覚ましたのは昼だった。

布都としては日暮れまで寝ていたかつたが、そうはいかないらしく、飯の用意がどうたらと理由をつけて起こされた。せっかく起きたのだからと、昼食は無視して元村人の部下たちの様子でも見に行くことにすることに決めた。

何が入っているか分からぬ飯など取る趣味はない。例え人が用意出来る程度の毒だつたとしても、まんまと摂取してやるのは面白くない。

「確かに、贊個だつたか。あいつを呼べ」

言付けられた家臣は一瞬だけ困惑を浮かべたが、すぐに表情をしまい込んで頭を下げた。よく言いつけられているようだつた。

贊個はすぐに来た。

「——姉上、何のご用でしようか」

生真面目な顔を布都に、向けてそう言つた。

「少し付き合え」

「承知しました」

贊個は従順だつた。

向かつたのは、布都が連れてきた人間たちの住む集落だつた。布都らが住む屋敷からは十分程度歩く必要がある。

辺りにはこういう集落がいくつもあつた。力を持つてゐる何らかの長たちの集落である。各豪族はこうやって中央集権的に部族を配置して、自分たちの領土を主張している。物部の本邸に近い程、その集落に住む人間の重要度が上がる傾向があつた。

布都と贊個が目的の集落に着くと、既に入り口で出迎えている男がいた。

「調子は悪くなさそうだな」

布都がそうやつて声をかけると、顔を上げて口を開いた。

「良い所を貰えましたので」

「そうなのか？」

生まれつき姫様な布都には集落の良し悪しは分からぬ。辺りを見渡すと、破壊されたやぐらと、人より高い木の塀があることが分かつた。

「期待されているような立地ですよ。それに戦闘を意識してるとしか思えない作りです」

「しかし、ところどころ壊れているように見えるが」

「丁度良く無人になるような出来事があつたのでしようね」話しながら中に入つていくと、見かける人間それぞれが何かしらの作業に励んでいた。

「ずいぶんと忙しそうだな」

「後片付け、掃除に追われています」

布都は皮肉気に笑つて見せた。

「増えたんじゃないか？」

「はい。作業が終わりません。穴を掘るのも樂じやありませんし」

男も布都と同じように笑つて見せた。

「だが油断はしないことだ。こいつの様なのが来たら、素直に逃げることだ」

男は意識を贊個に向けた。

「——そちらの方は？」

許可を得た男は、ようやく布都の後ろを歩く贊個について聞いた。

「弟、だそうだ」

「これは氣づかないとはいえ失礼致しました」

男は頭を深々と下げるも、目線は上に向けていた。

贊個は恐縮したように言つた。

「どうか頭を上げてください。自分はただ姉上に付いてきただけですので……」

男は顔を上げると、贊個に視線を合わせた。その後、視線を外し、布都に合わせた。

「では、これからることはこの方ではないと？」

「恐らくな」

「……片付けがいつ終わるのか気になるところですが」

「それは我にも分からぬ。ただ父上にやれと言われた以上は、少々時が早まつても問題は無いだろう」

贊個は困惑を表に出して布都を見た。

「その、話が見えないのですが」

布都は説明不要と笑った。

「知人がいないことを祈つておけ」

年少とはいえ、聰い贊個はそこで気づいた。

「これ以上待つのも焦れつたいな。何かないか」

「向こうも焦れているとすれば、機を待つてことでしよう。頃合い的に飯でも装いましょうか」

「我がやろう」

「お願ひします」

布都はその辺にあつた廃材に火を付けた。

煙が天に向かつて上がつていく。辺りで作業していた人間が集まり、少し声を大きくして雑談を始めた。

これまで贊個は良くも悪くも守られていた。行動の自由は少なかつたし、何をするにしてもぞろぞろと護衛が付いた。だからこそ、護衛無しで出歩けると布都の誘いに乗つたわけだが、まさかこのような事態になるとは思つてもなかつた。聞かされてはいるも、それは聞かされる内容でしかなかつた。

「その、本当にそのようなことが起きるのでしようか？」

贊個は願望も込めながら布都に聞く。

「気になるなら直接聞いてきてもいいぞ。もしかしたらお前の味方かもしけん」

布都はけしかける。

「そうであれば話合いはどうにかなるかもしけん。やつてみるか？」

「贊個は迷う素振りをするも、諦めて息を吐いた。

「……皆のためにと修練に励んだつもりだつたのですが」

「己のためだろう。お前の言う皆とはお前の思う皆でしかない。お前がこれからしなければいけないことは、お前の思う皆の範囲の設定

だ。喜べ、お前からは資質を感じる」

贊個は息を呑んだ。

これまでの人生で褒められ続けられたが、まるで初めて褒められたみたいに嬉しく感じた。

贊個は心を決めた。

「出来れば兄上でないと良いのですが……」

布都は甘いなとは思いつつも、口には出さなかつた。瞳に覚悟が現れていたのが見えていた。

「知つている人がいなくなるのは悲しいことです」

贊個は記憶を思い返した。己の榮達の為とはいえ、自分を庇護してくれた兄には情がある。しかし、やられたらやり返さなければならぬ。でなけれ物になり土になるだけである。この状況自体が間違っていると思うも、それを口にしたところで何も変わらない。何をどうすればいいかも分からぬが、力がいることだけは分かつた。

考える暇はこの場ではなかつた。

動きがあつた。

「——来ます」

儀礼的な言葉だつた。言葉がなくても、殺意を持つて迫り来る人間が見えていた。周囲では既に金属音が鳴つていた。中央にいる布都達には門からやつてきた敵が迫つている。

「姉上っ」

どう動くつもりなのかと布都を見た贊個の目には、特に関心が無い様子の布都が写つた。

号令がかかつた。

「今だ、——投げろっ」

門からやつてきた敵に四方八方から石が襲つた。投石は非常に有効的な飛び道具だつた。弓矢のような準備がなくとも可能で、威力も高い。

実際、足止め以上の効果を出した。投石のみで敵はすべて地に伏し

た。

「……まさか、このような」

と、倒れた敵の一人が、たどり着くことさえも出来ず、また周囲の壁の穴から侵入した仲間も引きずられて運ばれていく様を見て、絞り出すように言つた。

「一応、情報を聞き出します」

「まあ、大したことは喋れないだろうがな」

何事もなかつたように事後処理を行つてゐる様を見て、贊個は驚くしかなかつた。

話を振られた。

「出番がなくて不満ですか？」

「つえ？ あ、いえ、そんなことは——」

何と返していいか分からなかつた。

そんな贊個に布都が助け舟を出した。

「知つてゐるのと体感するのとでは違うということだろう。うすうすとはいへ、お前は知つていたはずだ。ただそれを実際に見たことがないために、どうなのかを分からないでいただけなのだ」

言葉に困つた。しかし、何か言わなければならぬと、今の思いをそのまま口に出した。

「その、……これから先もまた同じことが起きていくのでしょうか？」これを何度も見ていくのはとても辛いことだと思った。例え見なくとも起きていくだけでも同じように辛いことだと思った。

「数回、いや、もしかしたら一度で済むかもしれない。後者だと我も助かるのだが」

「……姉上も嫌なのですね」

「愉快ではない。面倒事というのは楽しめないと不愉快にしかならない。まあ、成るように成る、そう思つてゐるよ」

「そのように考へるのですね。てつきり——」

贊個は口をつぐんだ。布都の表情がどこか投げやりだつたからだ。まるで諦めたようで、でも諦めきつてはないような複雑な表情だつた。

「何の為に生きて、何のために死んでいくか。それが分かればどれだけいいことか」

布都は自嘲した。

それを考えたことがない人間がいるだろうか。何をするにしても意味を見出だそうとするのが人間である。納得がいく答えが出ない布都は問い合わせていて。

「まあ暇人の戯言だろうな」

余裕がないとそんなことを考えたりはしない。恐らくその余裕がない状況こそが愉快な時ではないだろうか。布都は過去を振り返るとうと思つた。命のやり取りの間だけはそのようなこと考えることなく、いかに敵を殺すかだけが全てだつた。

「他に、——まだあるだろうか」

あるのであれば是非堪能したい。少なくとも退屈はしないだろう。

そう思つて。

## 第11話

しばらく経つた昼のこと。

目に差し込んだ陽光が溢れるかのような明るい日だつた。

眩しさを嫌つた布都は、部屋に引つ込んで読書にいそしんでいた。ここ最近は書物を読むだけの生活しかしていない。

兄弟関連の面倒事は向こうから勝手に消えてくれた。守屋の帰還の件が広まるとすぐだつた。布都としては面倒事がなくなつたは良いが、やる事がなく暇をしていた。そんなわけで、大して興味があるわけでもない読書に励んでいる。この頃の書物というのは、つまり仏教の經典になるわけで、立場上入手困難であるが、尾輿に言つてみたところすぐに手に入ってくれた。

「しかし、よくもまあ——」

人とは変わるものだなあとしみじみ思わずにはいられない。

仏教の經典といえば、物部氏の対抗馬である蘇我氏の扱う武器のようなものだつた。政治と宗教は等しいと言つてよく、仏教というのは単純に物部氏を邪魔に思う氏族が神道の代わりに崇めるもので、それを物部氏の人間が読むというのは反逆の意思があると疑われるようなものであつた。

そんなものを当主自らが入手するのは、戦略的に考えてみれば当然であるが、以前の性格からすると別人のような振る舞いである。

「わりと面白いが

引っかかるところもある。けれども、書かれてある内容は布都の退屈を紛らわすには充分だつた。

「しかし、これは、政治には使えないな」

布都は書物を手放すと、天井を見上げた。

「この世の全てがまやかしであり思い込みであれば、位も身分もあつたものではない。人は生まれながらに等しくなく、等しくないものを等しいとするのは無理がある。馬子殿はこれをどうするつもりだろうか。面白いかたちであれば良いが……」

そうやって思案していると、部屋の戸が開いた。

知らない男である。面倒事に違いないと、布都は自分の失敗を悟つた。本邸にいるからこうなる。そう思った。部屋の外で立っている

やつらは、相手の身分によつて簡単に飾りと化すのである。そしてその飾りはわざわざ取り扱われたようだつた。

戸を開けた男は、部屋に入ると膝を付き笑顔を作つた。

「今日は日柄も良く……」

布都是吐き捨てるように言つた。

「要件だけを言え」

好みでない人間が多い布都だが、この手の悪意を善意のような気色の悪い笑顔で包み隠したやからが特に嫌いである。卑しさが表に出でていて、目に映るだけで気分が悪くなつた。

「——おめでとうござります。姫様の婚約が決まりました」

布都是感情を込めずに言つた。

「そうか。それで父上は何と言つている?」

「今頃さぞお喜びになつてることでしよう」

布都是呆れた。せめて既に諒解は取つてあるくらいは言えなかつたのだろうか。天井のシミを数えているような気持ちになつた。

「さぞつまらない男なのだろうなあ」

「失礼ですよ。立派な血筋の方で——」

「そうじやない。お前を遣わせた阿呆のことを言つている」

男から笑顔が消えた。

「——我が主を馬鹿にしましたか?」

「どうした? お前の主は我の父上ではないのか?」

「……とにかく婚約は決まりました。あまりワガママ言いませぬよう

に」

布都からため息を我慢出来なかつた。

「……お前には過ぎた任だつたな。とても務まらない」

呆れを通り越して悲しくなつてきた。

「いいか? お前程度を寄越したお前の主は人の能力を見る目が余程ないか、お前程度のやつしか部下にいないかのどちらかだ。とてもじやないが、この遊びに参加出来る能力を持つていねい。長生きした

けりや畠の雑草でもむしっていろ」

顔を赤くして口を大きく開けた男に、布都は殺氣をぶつけて黙らせた。

「——次、何か言えば殺す。脅しと思うな」

頸で奥を指し、退出を促した。

「ば、馬鹿にするのもいい加減につ」

布都は腕を振った。靈力の刃が飛び出し、男の身体を切り裂いた。

「あがつ——」

倒れる男を、ただただ不快といった表情で布都は見た。そのまま袖を鼻に押し当てた。

「……しまつた」

布都は自分の失敗に気づいた。

(蹴飛ばせば良かつた)

触れるどころか近寄るのも厭んだせいで、自室に血溜まりが出来てしまつた。その上、男の臓腑から出た臭いが部屋に広がっていく。外はとても明るそうである。内も外も不快だつた。

(せめてニオイが無ければ。それか首を落とすとかでも良かつたはずだが、なぜ考えて動かなかつたのか)  
布都は立ち上がつた。

## 第12話 森の森の森

雲海、樹海、海という言葉はそんなところにも使われる。

海より離れた物部一向は、森の奥深く、樹海といえるようなところにまで足を踏み入れていた。辺りの景色は木と木と木。道なんてものはなく、進めるところを進んでいく。天までありそうな背の高い木々が太陽をさえぎり、辺りは暗く湿っていた。

足場には木の根がいたるところに、布のように波打っていた。その間を苔の生えた緑の石ころがごろごろしている。

木々の海中を進む。

ずつと歩いていく。  
変わり映えのしない景色。視界を越えたころの輪郭までがぼやけていくような感覚。そのうち自分はどこへ向かっているのかと問いたくなる。

しかし、物部一向には迷うようなそぶりはない。所々足を止めつとも、淡々と進んでいく。  
術があつた。

山靈の声を聴く。

それが術。

別の言葉を使うなら、山と一体になる。

もつと分かりやすくすると、山の中の気、木や土や岩等からそういうものを感じ、それを印としてアタリをつける。所々止まるのは、術氏が気を感じるため。円になつて座り、目を閉じ隣の者と手を拳を合わせる。意識を澄ませてしばらくそうしていると、なんだかぽんやりと感じてくる。

これもまた物部の秘術の一つだつた。

布都は参加しない。ただ付いてきているだけ。意識はほとんどそこには無い。

布都は、そう遠くない所から発せられる氣の正体についてずっと考えていた。

——願わくば面白いものを。

初めて感じる気だつた。

ドロツとした何か。へばりついたらもう一度と取れないような。呪詛か、瘴氣か。負に偏り過ぎて、思わず身を引いてしまうような、そんな。

——ううむ。

嫌いではない。が、好きでもない。

さつさと見に行つてみるのも手であるが、それだと暇潰しが無くなつてしまふ。のろのろとした歩みに、まだしばらくは付き合わればならない。

意識が現実に無い分、木の根はびこるデコボコの地では大変歩きづらかつたが、足元に意識を向けると今度は退屈に潰されそうになる。救いは、徐々に近づいていること。

——しかし、どうであろう。凡俗術士どもが気づけば、避けようと道を変えるのではないか?

布都の危惧は的中した。

「——これはつ

まずは贊個だつた。

「この先には得体の知れない、……それも凶悪なものを感じます」

一行の足が止まる。

ざわつく。

「確証が得たいので、皆さんも探つてみてください」

そうして、術士たちが円陣を組み、意識を研ぎ澄ませ始めた。

「——つ

そして一斉に震えあがつた。

皆口にして言う。

「道を変えたほうがいい」と。

尾輿も頷いた。

「分かった」

「——待つてください」

さえぎつたのは守屋。

「何だ

「引き返さないのであれば、実際に目で確かめてみるべきです」「犠牲が出るかもしけんのか？」

「元より、そういう旅であつたはず。それに、後ろに危険を放置していく方がよほど怖いかと」

「うむ、たしかにそうだが」

「——我らには優秀な術士がいるはず」

守屋はそこまで言うと、尾輿に寄つて、耳元で囁いた。

効果的だった。

尾輿は一行の顔を見渡すと、

「——行こう。大厄をなすものならば、いずれ知ることになる。早めに知つておいた方がいいかもしだん」と言つた。

皆頷いた。

——さて、何と言つたのやら。

布都は鼻を鳴らした。

どうやら上手くいっているらしい。いや、協力してくれるらしい。その訳は分からぬが、とにかくこれでいい。気分は晴れないが、いいとするしか他に思いつかなかつた。

「では僕が——」

贊個が前に進み出て、先導を始めた。

行くこと数分。

ただならぬ雰囲気。誰もが感じた。

術士にはその方向まで。

贊子にはその存在まで。

布都には——。

——まずそうだな。

人間の五味で例えるなら、ひどく苦く、それでいて酸っぱい。その

上、臭い。大外れを盛大に引いた気分になつた。

唾液が引つ込む。

なんでこんな所にまで来たんだろうかと、いまさらの問い合わせが布都の中に浮かぶ。まったく楽しくない。義務感しかないこれまでの行程。一体何なのだと。どうしてこんなつまらないものに付き合わせられなければならないのかと。

足は動いている。それは、やがて視認可能な距離にまで——。周囲から声が上がる。

「な、なんだあれはっ」

人、——ではない。だが二足歩行の、人が着るような服の、イノシシ頭の——。腕には剛毛が生え茂り、先には岩をも砕きそうな大きなヒズメが。

妖怪。

その言葉が即座には頭に出てこなかつた。

出てきた後も、何故かしつくりとこなかつた。

が、今はそれどころではない。

対象はこちらを向いているようだが、見ていくようには思えない。といか敵意を感じられない。

皆顔を見合わせる。

どうするべきか。

先頭をきつた者がいた。

「やりましょう」

言うやいなや、贊個は走つた。

腰にさげた剣に手をかけ、振り抜く。剣先が空で弧を描き、その軌跡が光を帯びる。

それは光刃となつて、正体不明の妖怪のようなものへと飛んでいつた。

速度、鋭さともに充分。——と思われたが、肉を切り裂く前、触れただ瞬間に弾かれ四散した。

「——ならばっ」

贊個の足は止まらない。

さらに駆け、化け物のそばまで詰め寄る。  
剣が光り、音が出そうなまでに輝く。

一閃。

直接斬った。

胴体が上下に割かれる。

贊個は後ろへ退がり距離を取る。

「よくぞ！」

歓声が周りから上がるが、贊個の表情は緩まない。  
手ごたえはあつた。が、どこか妙だった。

上手く言えない何かがあつた。

ただ斬つただけ。そんな、感覚。

して、それは当たつた。

その光景は――。

「み、見よ！」

歓声が別の中に変化した。

真つ二つになつた化け物。その割かれたところから、タコの触手の  
ようなものが生える。そして、その触手同士が絡み合い引き合う。  
胴がくつついた。

贊個は強く言つた。

「火だ！」

その言葉に呼応し、術士は皆一斉に力を練る。

「今です！」

贊個は合図を出した。

牛ほどの大きさの火球が飛び出す。

贊個は自らも火球を作り、火球を合体させた。

それにより倍以上に膨れ上がつた火球は、化け物を飲み込んだ。

熱が溢れる。

風をともない、肌に当たる。

火が去ると、真っ黒になつた化け物が変わらず立つていた。

焦げ臭い。

「や、やつたのか？」

誰かがそう呟く。

「そ、うなんじゃないか？」

おそるおそる、数人近寄る。

火に飲まれ真っ黒になつて動かない様は、死んでいると思えた。だが、贊個には妙な感じがあつた。まるで初めから何も変わつていような、そんな感じ。

あの化け物が反応を見せたのは、胴を斬られた時ののみ。自己修復のために動いた。もし、あれが生きているとして、黒焦げの状態から修復としたらいいどうするのだろうか。それはもう、体を入れ替えられるようなこと。しかしそんな事が可能だとは到底思えない。実際に似たようなことをする生物といえば、サナギからかえる蝶や蛾のようだ。

勘だつた。

例えばあの剛皮がサナギのような、もしくは防御のための殻のようなものであつたとしたら。一度見せたあの触手のようなものが本体であつたとしたら。

まずい。

「——待つてください！」

意識が、逸れる。

「え？」

化け物から、無数の触手が伸びる。硬い殻を突き破つたそれは、真っ黒のイソギンチャクのよう。

伸びた触手は、近寄っていた数人を瞬く間に貫いた。

貫かれた人間の皮膚が、その箇所から黒く変色していき。叫び声すら口元に上げれずに、地に倒れた。

皆、総毛立つ。

そんな中、始めからずつと平静でいた者がいた。くすんだ水色の瞳に、多少的好奇心が宿つていた。

前へ。一つ飛び、腕を振つた。

鍛え抜かれた刀剣のような鋭さ。光の刃が、空間を裂いていく。そのまま障害物など無かつたかのように、化け物の頭部を寸断した。そ

「おい、布都つ——」

近くにいた尾輿が、咎めるような声を出した。

布都是意に介さない。

布都是化け物を見ている。

あまりに綺麗に斬られすぎて、まだ乗つかつたままの頭部。動こうとしてようやく落ちる。

——ウスノ口め。

動きも、敵意を解するのも、何もかも。全て。反応するしか能がないのか。

「くくつ」

それでもせつかくの暇つぶし。

可能である全てで持つて楽しませるがいい。

——生存本能くらいはあるのだろう？

斬られたら戻るように、火を浴びれば抵抗したように。

「さつさと来い」

黒い触手が伸びてくる。蛇行しながらゆっくり。と、急に加速。

布都是身をよじり、かわす。

さらに数本、伸びてくる。

それもかわす。

倍数伸びてくる。

腕を振り、全て切断しきる。

幾度か繰り返す。

——埒があかん。

布都是地を蹴つた。

大きく前へ出る。

一飛びで本体まで迫らんとするほどの跳躍。

迎撃に伸びてくる触手。

最中。

腕を一振り。複数の刃が生まれ、空間を狂い舞う。伸びてきた触手は全て切り刻まれ地に落ちる。

跳躍する布都の下には、今まで切り落としてきた触手が落ちている。

布都の視界、下の下、ぎりぎり映つた。

バラバラになつていた触手たちが互いに重なり合つていく様。やがて大きな球体となつた。

布都は化け物の本体とその球体の間に降り立つた。

着地した布都の耳に、何かが破裂したような音が飛び込んでくる。確かめる前に、回避行動に移る。

地を蹴り、跳ぶ。

その間、身をねじり後ろを見る。

球体から太い針のような触手が飛んで来ていた。

切り裂く——、手段は取れない。

伸びてきたわけではなく、切り離され飛んできている。斬ったところであまり意味はない。

手を前につき出す布都。すると、靈力で作られた薄い水色の壁が現れる。

触手が壁にぶつかると、はじけた。

が、その間、その奥で先ほどの球体が膨張しているのが見えた。大きく、大きく、膨れ上がつた、——かと思えば急に凝縮したかのようになる。

して、手榴弾のように破裂した。

当たれば体が黒く変色し、即座に死に至る。そんなものが放射状に飛散される。

それは布都だけではない。離れた位置にいる者たちも同様。しかし距離があるため、被害は抑えられる。近距離にいる布都は、避ける事はかなわない。布都は壁を持続させ、致死針の飛来に備える。

挟まれている布都が、片方に専念すれば当然もう片方がその隙を狙う。

布都も警戒を怠つてはいない。

背から迫つてきた触手に気づいた。

空いた手をつき出し、靈力の壁を作つた。

壁にぶつかつた触手ははじかれる。

両面に壁をはつたおかげで、布都は無傷だった。

が、それでも防戦一方。

とにかく位置が悪い。

——どうする。

とりあえず一度敵の攻撃が止まるのを待つか、それとも壁を全身を包むように広げるか。

広げるか。

そうしている間に、敵の攻撃が止んだ。

本体から切り離された方がやせたようにな小さくなっていた。

周辺に散る触手の肉片はない。

次はない。

そう見た布都が、本体を見据え、どう殺してやろうか思案し始めた時。

本体から伸びる触手の一部が地中へ入つてるのが見えた。  
布都ははつとした。

同時に。

地中から布都に向かつて触手が伸びてくる。

一瞬の硬直を、気力で振り払い、体に指令する。

足に力を入れ、後ろに飛ぶ。

同時に身をよじる。

かわした。

着地の寸前。

触手は急激に曲がった。

「つぐ」

触手は布都の肩口を貫いた。

ぞわりと、何かが這いまわるような感覚が布都を襲う。

力を集め、肩口へと集中させる。

触手が消えた。

——いつ以来のことか。

思えば、敵の攻撃をまともに受けたのをは久しぶりのことだ。

——悪くない。

笑みがこぼれる布都。

そんな中、身体全体が脈打つた。

布都の動きが止まる。

目の端に黒いものが映る。

瘴気。

腕。皮膚の上。煙のように広がっていた。

——これは。

再度、靈力を肩口に向けて集める。

黒煙が苦しむように揺らでいく。

だんだん押し込められ、傷口まで押されていく。  
が、途中で止まつた。

凝縮した瘴気と靈力とで拮抗している。

「つち」

布都は力を解放した。

いつもは体の奥深くに隠していたそれ。

通常状態とは比にもならないほどのそれ。

靈力と、妖力。

妖力が瘴気と混ざり合い、靈力が包み込む。

抑えてたものを解放し、布都は高揚感に包まれた。

吐く息が心地良い。

——さて、どうしてやろうか。

殺す算段を気分良く考える。

布都は輪郭のぼやけた瞳で化け物を見ようとした。

「ん？」

そこには何もいなかつた。

氣を追うと、離れていていることが分かつた。

逃げたらしい。

これから楽しもうというところだというのに逃げられた。

——つまらん。

世界は優しくない。肩透かしもいいところである。布都の眉間に

しわが寄る。

「あ、姉上、無事ですか？」  
何か寄ってきた。

「あ？」

—— そういえばこいつ……。

布都の目が愉悦で細まる。

「—— いつ」

後退るのが見えた。  
ため息が出た。

「はあ」

色々台無し。

ここまで上手くいかないものとは。  
もうどうにでもなれ。

布都是これでもかなり我慢している。

つもりだつた。

## 第13話 転機

物部の一行はあの化け物との遭遇後、すぐに退却を決めた。未知とは怖いものである。

脱落者も確かに出たが、物資もまだある中で退却を決めたのはこの先の未知を恐れたからである。その恐怖の未知は、近くにもいた。物部布都。

周りから見た布都の戦闘は、あきらかに人の戦う様ではなかつた。味方ではあるがどうなんだろうか、と。そう思わせるほどの異質さが布都にはあつた。

物部一行の中で、布都の周囲には行くときより間が空いている。その中でももつとも遠くにいるのが弟の贊個だつた。贊個はある時の布都の瞳をまともに見てている。あれは人の目ではない。そう思わざるにはいられないような、恐怖を通り越して畏怖に達しそうなほどの中差を感じた。贊個は自身の能力に自負があつた。自分より強く、そして上手く力を扱える者を見たことが無かつた。そしてその可能性があるとしたら、姉の布都だと思つていた。だが、あの時に見たものは期待していたものとは程遠い、いや——近いとか遠いですらでなかつた。まるで道そのものが違うようなもので。なまじ力がある分、布都のそれを周りの人間より、深く感じてしまつていた。

家に帰つた後も、布都に対する周りのよそよそしさはあつたし、また強まつた。

布都はずつと考へてゐる。

放つて置いてくれるようになつたのはいいが、前より居づらくなつた現状。

どうやつてこの居心地の悪さから解放されようか。

「罰というなら、甘んじて受け入れよう」

罪の意識などないのにそんなことを言つてみる。

罰も受ける気などさららない。ついでに言えば、被害者のつもりも加害者のつもりもない。意味のない言葉遊びを一人でやらなきやいけないほどに暇だつた。

自分一人しかいない自室でくるくる回つてみたりする。  
意味はない。

が、意味があるというのは何であろうか。何に対しても意味があると いうのだろうか。人生といふものに意味が見出せない布都にとつては、全てにあてはまる事である。部屋で無意味にくるくるするのも、飯を食うの人と話すのも何も変わらない。

——楽しめるか否か。

今が楽しくない分、強くそう思つた。  
意味の有無はどうでもよく、ただそれを楽しめるかどうか。それだけであると。

「布都、何をしている」

声がしたので部屋の入り口を見ると、守屋がいた。

回るのをやめた布都。口を開く。

「何かしているように見えましたか？」

「退屈をしているように見えたが」

「これは敵わない」

「よく言つ」

守屋は少し真面目な顔をした。

「それで、肩は、いや身体は無事か？」

視線は化け物の攻撃が刺さつた布都の肩。

「ええ、幸いにて何とか生きております」

「あいつの攻撃を受けたものは、全身が黒く変色して皆死んだ。お前が無事であるのは、その身体に宿る力の所為か？」

「その通りであります。——が、そうでもない様子で」「どう言う事だ？」

布都是右袖をまくつた。

青空に浮かぶ真っ白な雲のような皮膚の色。

「この通りですよ」

布都がそう言うと、青空は陰り雨雲が現れた。やがて灰色から墨色にまで変色し、それは右手の先から顔の半分まで侵食した。

「つな」

驚きを見せる守屋。

布都はにやりと笑う。

「抑えつけておかぬとこのようになります。面倒な同居でバザりますよ」

「……本当に無事なのか？」

「特にどうということも」

「……そうか」

守屋は難しい顔をして目を伏せた。

布都は聞いた。

「それで、本当は何の用で来たのですか？」

「いや、大したことではない」

「というと？」

「……お前が家を出ようとするなら、その前に俺だけにでも一言言っておけと、そう言いに来ただけだ」

「はて、出るなどと言いましたかな？」

「いざれそとなる。父による婚姻ではなく、自分の意思でここから出て行くだろう。あの樹林での戦闘は、お前の目論見も、周りの目論見も、はるかに超えた。もはや同じ生き物であるかとすら思われるほどに。しかし、それがゆえにお前の望みは叶うであろう」

「……次期当主である兄上には出て行かれると困るのでは？」

「次期、ではない。もう当主だ」

「おや、これはいつの間に」

「ついさつきだ」

「それはそれは」

「だから言いに来た。お前が己を我と呼び、偽り無く我を通し続けるのなら、俺はお前を肯定しよう」

守屋が何を言っているのか、布都は分からない。

「物部布都が物部布都である限り、俺に口をはさむ権利はない」

「権利ですか」

やはり分からぬ。

「——とにかく、出て行くときには俺に一言かけるということだ。忘れるなよ」

「ええ」

布都は相づちのような返事をした。

言うだけ言うと、守屋は部屋を去つていった。

残された布都是守屋の言葉を思い返すが、やはりいまいち真意が分からぬ。暗に家を出ろと言われたのは分かったが、それ以外がどうにもつかめない。だからといって、追いかけて聞き直すのも違う気がした。

布都是寝転がつて、大の字になつた。

——明日考えよう。

布都是目を覚ましたのは、夜か朝か分からぬその境のような頃だつた。

夢を見た。

夜空に浮かぶ暗雲と一体になつてふわふわと浮いていた。月が眩しく綺麗で。夜空は澄んでいた。ゆめうつつ。

起きた布都是、外を見た。

夢か現か定かではない中、朝と夜との境を見ていた。

それは思いつきやひらめきのように現れた。

妙案とは突如として去来してくるものらしい。布都是そう思つた。

◇◆◇

日が昇りきると、布都是朝廷へと向かつた。

布都是政治色の強い場所に来るのはたいへん珍しく、いつもにもまして注目をあびたが、気にせずかずかと中へ中へと入りこんでいく。

そして。

「——やあやあ、馬子殿。ご健勝かな？」

目当ての姿を発見するやいなや、ひょうひょうと近づいた。

周りにも人がいる。

さればもう大きな注目をあひた。

馬子殿 といえば蘇我馬子。すなれち物部氏の最大のライバルともいえる存在。物部氏でいうところの守屋が、蘇我馬子。細身で温和な印象を受けるが、権謀術策の政治の舞台上で最上位の存在である。天皇の次に名が挙がるのが守屋や馬子である。

そんな馬子に「あの」物部布都がまるで友達に近づくかのようは寄つていつた。人の視線を集めない方がおかしな話である。

「……これは布都姫。私に何の御用の様でしようか」

知らない仲でもない

立場もあつて親しくしたこともないが、互いにどこか通じるものを感じ取っていた。

それは言ひなれば裏の顔とてもいふべきか されども

布都は、実に楽し氣に、あり得ないことを言い放つた。

馬子ですら思考が追いつかぬ

布都は政治なぞと。口クに表舞台には出ていないが、実際は馬子と度り合える者は布都くつゝなものである。

が、その馬子は布都の真意を読もうとするまえに固まつてしまつて

卷之二

『いい立場』、その言葉に馬子の思考がようやく稼働してきた。

布都は馬子にさらに近寄ると、人差し指を内側に曲げた。頬を近づけろ。

その意を汲みとつて、馬子は腰を下した。

「最近耳が聞こえすぎてな」

馬子は布都の真意を理解した。

要は敵も敵、さらにその一番上のところに行けば煩わしい物部のあれやこれやから逃れられる。

布都は思っている。

豪族を単体で見た時に一番は物部氏である。だとというのに、さらなるを求めるのは欲が過ぎるのではないか。上も下もこれでは、兄上も苦労するだろう。

それはともかく。

「……いいでしよう。乗りますよ」

硬直が解けた馬子は、目に楽しそうな表情を浮かべていた。

「あなたが政治に興味がないようで、実のところ私はだいぶ暇をしていたのですよ」

「それは残念。今後もそのつもりはございません」

「問題は『暇』の部分ですので」

「へえ？」

布都はにやにやと笑つた。

そら、似たもの同士であつたと。

互いに、いわゆる夫婦というものになるとは微塵も思っていない。打算と遊びに満ちた婚姻関係である。つまり世であれば、いつそ混ぜかえしてしまえ。さすれば少しは楽しめるかもしれない。

この事はすぐに周知され、朝廷は揺れるであろう。

真面目くさった顔で政治遊びしてるやからの驚く顔を想像するだけで、布都是愉快な気分になれた。さすがの兄上もこれは想像してなかつたのではないかと思うと、もつと愉快になった。

しかし子など一笑に付した布都が、他人のとはいえた子どもに興味を持つなど、誰が想像出来たことであろうか。

## 第14話　とじこ

初対面の人間に言う事は様々であろうか。

明け透けに言つてしまふと、そのほんとどが『あなたはどちら様でございましょうか?』ではないだろうか。

布都はまさしくそれに直面していた。

二つの意味で、である。

「お前が女狐だな！　蘇我に何をしに来た！」

布都は敵地という名の新しい住まい、それまでの様々なものを意に介せずにのんびりとしていたが、どたどたと元気な足音と勢いよく開かれたふすまと威勢のいい声に、

「何じゃ、ちつこいの」

至極めんどくさそうに答えた。

「ちつこいのではない！　私には屠自古という父上に貰つた名がある！」

「そとか、ではちつこいの。何の用じや」

布都はなんとなく分かってきた。

可愛い可愛いクソガキが可愛さあまつて暴走しにきただけだと。

「だからちつこいのじやないと言つている！　どうやつて父上をたぶらかしたのかは知らないが、私がいるからにはそう上手くはいかないぞ」

「何がどう上手くいかないというんじや？」

「それは、だから、その」

「その？」

「う、うるさいつ」

「何がうるさいのか？　ほれ、言つてみろ」

「う、ううう」

言葉に詰まつたかと思えば、大きな目がうるんできた。

からかつたらからかつたまま面白いように反応するので、布都は少し愉快になつてきた。

布都は唇を舐めてみせ。

「お主の父上の味はどのようなものであろうな？」

「は？」

そして、いかにも悪そうな顔を作つた。

「つな！」

これまた素直に反応するちっこいの、つまり屠自古に、布都はせつかく作つた悪い顔が崩れそうになるほどに楽しくなつてきだ。

感情のまま、顔が赤くなつたり青くなつたり。そんな屠自古を見ているだけでも忙しい。

「——ところでお主、最後に父に会つたのはいつじや？」

「き、昨日の夜？」

思わず、正直に答える屠自古。

布都は吹きだしそうになるの抑え、さらにたたみかけた。

「そうかそうか。今朝、我的ご飯はえらくご馳走だつたぞ？」

「は？」

「何言つてんだこいつ」と、屠自古の顔にはまつたく隠されていない形で怪訝な顔になつた。

「いやあ、美味かつた美味かつた」

布都はお腹をぽんぽんと叩いて見せた。

その後、わけが分からないと顔に出ている屠自古を見ると、にやりとまた悪い顔を作つた。

——父が喰われた。そう理解した屠自古の目が大きく見開かれた。

「ぬ

「ぬ？」

「ぬあああああああああああああ！」

間の抜けた奇声と共に、走つて突つ込んできた。

布都是突つ込んできた屠自古に手を伸ばし、頭を抑えた。

それでもまだ声を上げながら前進を止めない屠自古に、布都是決壊した。

「ぶはつ——」

屠自古は、自身を抑えていた手に力が抜け、何事とかと顔を上げると、上には布都是おらず、足元にうずくまるように倒れているのが見

えた。

布都は細かくけいれんするように、お腹を押さえ震えていた。

笑いが止まらない。

このような阿呆初めて見たと、呼吸が苦しいほどに笑った。

生涯ここまで笑つたことなどない布都だが、今はそんなことに気づけるような状態ではなかつた。笑止ならぬ笑死しそうになつていて。屠自古は何だかよく分からぬが、馬鹿にされていることは分かつた。

だが、目の前にうずくまる者にどうかしようという氣も起きなかつた。

足音。

男の声。

「……これは何事でしようか？」

その声色は困つている色をしていた。

「ち、父上つ！ 生きていたのですか!?」

娘にいつの間にか死んだことにされていた那人、つまり蘇我馬子である。

声は困惑そのものであつたが、目は何やら面白いものを見つけたような色を映していた。

何やら驚いている娘に、笑いが止まらない様子の布都。

何となく状況がつかめてきた馬子は、

「勝手に殺さないでくれないかな？」

柔らかな声。駆け寄ってきた屠自古の頭を優しく撫でた。

「父上つ、父上つ、今です！ 今ならあの女狐を倒せます！」

うずくまる布都から吹きだす声が漏れる。布都は笑いを堪えつつ、顔を上げた。

「……ええつと、——お主の名はなんじやつたかな」

「屠自古だとさつき言つたばつかりだろう！ さてはお前馬鹿だな！」

「ふふつ」とまたもや吹きだす布都であるが、

「屠自古か。よく覚えたぞ。して、我は女狐でなく、布都じや。そう呼

「ぶがいい」

「女狐！」

「布都」

「女狐！」

「布都」

布都是考えた。

「……そう言えば、お主は馬子殿の子だつたの。であれば、我は義理とはいえ母であるな。母上、そう呼んでくれてもよいのだぞ？」  
「ふざけるな！ 誰がお前を母などと呼ぶか！」

「母上」

「女狐」

「母上」

「女狐」

「布都」

「ふと。——あつ」

またまた布都是吹きだした。

「……いづれ母と呼ばせてやろうぞ？」  
「うつゝい、ふと！」

顔を真っ赤にし、ぶすくれながら部屋からどたどたと逃げ去つて、いく屠自古の小さな後ろ姿を布都是にまにまとした笑みで見送つた。  
そのままの機嫌のまま、馬子に話をふる。

「おや、馬子殿。生きておつたのですか？」

「ええ、ちよつと黄泉返つてみました。おかげで面白いものも見れました」

面白いものとは、布都是少し思案して——

「我もあるのように面白い者は初めて見ましたなあ」

思い返すと、くつくつと笑いが出てきた。

「いえ、貴女の方ですよ」

「我が？」

きよとんとするも、すぐに意味が分かつた。

「……ああ、実に面白かつたので——」

また笑いが出てきた。

こんなに愉快な気持ちになつたのはいつ以来であつただろうか。  
「馬子殿の子とは思えない、……いや、なるほどあれは馬子殿の子で  
しょう」

「どういと？」

「少々形は違うものの、感じる雰囲気からする根の部分は同じ」

馬子は興味をそそられた相づちをうつ。

布都は少し羨ましそうな目をして言つた。

「あれは上のくらいの人間ほど氣に入いるでしょう」

人と人との軋轢に疲れた人間ほど、のように真っ直ぐなものは輝いて見える。

あんなに喧嘩腰だつたのに、不思議とすんなりふところまで入り込んでしまう。

屠自古の父、蘇我馬子には、誰かを惹きつけるような武はない。むしろ、どちらかというと病弱で細身である。であるのに、隆盛極まる物部氏と対する位置に居続けていたというのが馬子の並外れた才覚。温和な印象ではあるが、立ち位置から考えて見た目通りであるはずがなく、であるが、どうしても当人から受ける印象は押せば倒れるのではないかというくらいの雰囲気の柔らかさ。

どういった手を使つて物部氏に対抗し続けているか、そんなこと布都にとつてはどうでもいい事であつた。馬子がどういう人間であるか、必要な情報はそれだけで充分だつた。馬子を知れば、結果が見える。結果に至つた手段などせいぜい書物か何かに記する程度のものでしかなく、そもそもしなければ人の記憶にも残らない。文字ではそういうそう表せないものこそが重要だつた。

「ではさしづめ貴女は壁の上で下に向かつて睥睨しているお姫様といつたところでしようか？」

「いえ、我の下には誰に居ませんよ」

布都は謙遜するように首を振つた。

——上下左右居らぬだがな。

今度は少し寂しそうに首を振つた。

## 第15話 おやばか

「気をつけた方がいいですよ」

布都の部屋にやつて来た馬子の第一声はそれだつた。  
「……それは我に言つておるのか？」

部屋には、布都とその膝の上に屠自古。  
遊んでいたというか、話していたというか。  
とにかく、二人の表情は楽し氣であつた。

「鬼が出たという噂が」

「ほう」

布都は馬子の方へ上半身だけ傾けた。

「もしかすると都にもやつてくるかもしないとのことで。今朝廷では遷都も視野に入れて話し合われていますよ」「なるほど。鬼であれば、そうなりましよう」

「ただの遊びで済めばいいのですが」

「で、そいつはどういったやつなのです？」

『『楽しそう』』と、それだけだそうで

「さもなくば、といったところか——」

布都の表情に獰猛さが混じつた。

「会つてみひやいもほ——」

屠自古が布都の口を両側に引っ張つた。

「——何をする」

「……別に」

頬をふくらませ、顔をそむける屠自古。

「んん？ なんじや？ 寂しかつたのか？」

「違うつ」

「じゃあ、何か？ 我に恨みでもあつたのか？」

「そ、それも違うつ」

「んう？ じゃあ、言つてみるがよい」

「……うー」

のけ者にされたことに腹を立てたことくらい布都にはすぐに分

かつて いた。だがしかし、どうし てもからかわなければ 気が済まなかつた。こんな好材料そ うそ うない。

獣 猛さもかき消され、可愛くて可愛くて仕方ない飼い猫を愛撫する ような表情に変わつた。

言葉を発す ることが出来ず に、うめくことしか出来ない屠自古。もう布都は我慢が出来ない。

屠自古から声が上る。

「——つわ、何」

頬ずりをした。

まだ幼い屠自古の頬はたいへん柔らかいものだつた。

「離れる!」

屠自古が渾身の力で布都を引き離そ うとする。

とても布都が引き離されるような力ではなかつたが、布都は屠自古から離れた。

「いやあ、すまんすまん。ついな」

「何がつい、だ!」

屠自古は、布都から顔を背けると、「まつたく!」と顔を赤らめた。まんざら嫌そ うでない様子がまた布都の心をくすぐつた。

「さて——」

布都は立ち上がつた。

「ふと?」

見上げる屠自古に、ふつと笑いかけると、

「少し、散歩に行つてくる」

布都は部屋から去つた。

残された屠自古と馬子は顔を見合させたが、馬子は少し難しい顔をした。

——まさか。

いや、やはり、というべきか。

しかし相手は鬼であれば、人のみでどうこうできるものではない。へんにつついて怒らせれば、辺りが更地になるかもしけない。

その時布都はこの世にはいないかもしけない。

失敗したか、馬子にそんな想いがよぎつた。が――。

「――少しゆつくりしてからにする」

布都の声。

戻ってきた。

そして屠自古を抱き上げ、話しかけた。

「なあ、屠自古。鬼とはどういうものか知つておるか?」

「馬鹿にするな。そのくらい知つておる」

「じゃあ、言うてみい」

「鬼はあれだ、強いやつだ」

「他には?」

「……あと、怖い」

「おや? お主は鬼が怖いのか?」

「怖くなんてない!」

「それはそれは。ならお主には怖いものなんてないのか?」

「ないに決まつている!」

「そうかそうか」

布都はけらけら笑う。

挑発されればそのまま綺麗に乗つかる。

なんと愉快な奴だろうか。

屠自古を床に降ろすと、頬に手をやりはさんだ。

「何をするつ――」

喜怒哀楽。

人にはばかることさえも、自分の心から素直におこなうのである。

う。

怖いものはないと言い張った顔を恐怖に染めるのも、これ以上ないくらい満面の笑みにするのも、どれもきっと面白いのだろう。

布都は顔がころころ、いや物理的にむにゅむにゅ変わる屠自古の顔を見てそんなことを思つた。

屠自古の手が布都を打とうと顔に迫る。

それを布都はつかみ取り、

「――少し、外に出らぬか?」

と言ふと、「いいだろう馬子殿？」と、視線で送つた。

馬子はこくりと頷いた。

「あまり遅くならぬようお願ひしますね」

「うむ」

まだ行くとも言つていないので、勝手に行くことにされて不満を覚えながらも、屠自古は嬉しさを隠せなかつた。

「やあやあ、相変わらずの人ごみじや」

都。

雜踏の中。

恥ずかしさもあるのか、弱い力で屠自古は布都の手を握つていた。

「何かほしいものはあるか？ なんでも買ってやるぞ？」

およそこういうのを親馬鹿というのである。

もしくは可愛い孫に何でも買い与えて親を困らせるおじいちゃんおばあちゃんといったところなのかも。

「別にいらぬつ」

顔を背ける屠自古。

頬が赤い。

欲しいものは、手に入つていた。

「ん？ もしや腹が減ったのか？ そうであろう？」

「うむうむ」と謎に頷きながら、布都は飯屋を目指し始めた。

腹なんてへつてないと言つてやりたかつた屠自古であつたが、何も言わずについていくことにした。

だつてそうではないかと、屠自古は言い訳したかつた。蘇我馬子の娘である。外になんてそういうのなんて無かつたうえ、どうにも他人行儀な女中やほとんど会つたことがない母親、それに比べてこの物部布都という変なやつはよく会いに来るしこつちから押しかけても嫌な顔もせず、それどころかなぜかは分からぬが嬉しそうに、むしろうざつたくらいに歓迎する。

母と呼んでもいいぞと言うわりにはちつこいし、姉というにはなんか婆くさいし、でも実際に婆というには綺麗で若くて——、なんていうかよく分からぬやつには違ひなかつたけども、嫌なやつじやな

かつた。

理由は分からぬけど好かれているのは分かつたし、会いに行つてやるのも悪くはない。

と、そんな具合に始末をつけた。屠自古は共に歩く布都から少し離れつつも、手は離さないでいる。

「なあ、布都」

「ん、なんじや？」

端正な顔立ちが覗き込んでくる。

「なんかやたらと人に見られてないか？」

「気のせいじやろ。そもそもそういうもんじや」

氣のせいじやないじやないか、屠自古は布都から顔をそらした。人の注目が布都に集まっているのは分かつてはいるけど、どうにもそれが嫌な気分になつた。何も気にしていない様子の布都がなんだか恨めしい。布都のくせに。

「ほれ、あそこにしようか」

手をつないでいるので、半ば強制的に店に入ることになつた。

だいたい腹が減つたなどとも言つていなければ、何が食べたいなどとも言つていないというのに、——ああ、やつぱりこいつは勝手なのだと。

屠自古は、不快ではないが不満が湧いてくる感情に居り合いがつけるない。

「適当によい」

しばらく待つと、食事が出てきた。

出てきたものを見て、屠自古が顔を歪める。

「……げつ」

思わず声が漏れた。

「ん？ なんぞどうかしたか？」

「……別に」

屠自古は川魚が苦手だつた。どうしても特有の生臭さが受け付けない。無理矢理食べると、泣きながら戻してしまう。屠自古の持つ箸先がうようよとさまよう。

「うむ、結構うまいぞ？」

渋い表情の屠自古をしり目に、布都はぱくぱく食べていく。

「……あまり腹がへつてない」

「あれ？ そうだつたか？」

なんだか腹が立つてきた。

でも――。

「半分食べるから、もう半分は――」

「そうか、ではそうしよう」

言い終わる前に、布都は箸を伸ばし、魚を半分持つていった。

美味しそうに食べる布都、

「……うう」

屠自古は覚悟を決めた。

飯屋から出た二人は、都の市を歩いていた。

活気のある路であるが、屠自古の顔はすぐれなかつた。

体の中身を取り換えるたい気持ちにすらなつている。

後悔はないが、やつぱり気持ち悪いものは気持ち悪い。手から伝わる柔らかな感触が吐くことをためらう。

『布都め。母などと名乗るのなら、もう少し察しろよ』と、屠自古は内心で毒づいた。

そんな布都の足が急に止まつた。

必然、屠自古の足も止まる。

さては心でも読まれたかと焦つた屠自古であつたが、布都の視線はずつと奥の方にあつた。人の向こうの向こうの向こう。人ごみを超えた先であろうか、布都の目はどうももつと遠くを見ているようだつた。

「なるほど。お主、よほど父親に可愛がられているようじやな？」

「は？」

急に何を言い出すのだと、屠自古は怪訝な顔をした。

こいつなら心くらい読めそうだと思つた矢先に、今の言葉である。

思考が追いついていかない。

再度布都が歩むにつれ、屠自古もついていく。

して、分かつた。

「やあ、馬子殿。このような所で奇遇、——というわけもあるまい?」

布都はにやにやと、まるで机の引き出しの奥に隠していた日記帳でも見つけたかのような悪い顔をした。

「ちょっと所用がありましたで。これさえなければ、始めからついていくつもりでした」

「ふうむ? 忙しい身は辛かろう、でござりますな?」

布都はまだからかうつもりである。

「いえ、公務ではないのです」

「どういと?」

「少々、面白そうな話を聞いたので」

布都は笑みを收め、目をぱちりまばたいた。

この蘇我馬子という人間が面白そうと判断する話とはなんぞや。

布都の興味が向いた。

「廻戸皇子という人物を知っていますか?」

「ウマヤト? 存じませぬな」

「でしようね。私も先ほど初めてお会いしましたから」

「それが馬子殿の言う、面白い話と?」

「ええ。近いうちに貴女は知るかもしません」

「……ほお」

布都の書物やら伝承やらなにやら様々なものが詰め込まれている頭には、人の名前はほとんどない。その中に、人が加わるとすれば、よほどの人物であるということになる。

馬子はそれを布都に伝えた。

わざわざ自らが会いに行つて確かめてまで、である。

それはつまり――。

「どつちで?」

「貴女を知った時と同じで、どちらも、です」

蘇我馬子という男はやはり人の中で生きたいのだ。

布都は馬子の楽し気な瞳を見てそう思つた。

自分と競い合えるような、そんな人物を待つてているのだ。

布都は少し申し訳ない気持ちになつた。

武においては馬子は凡夫にも劣るが、こと知、政治においては比類するものがいない。それがゆえに、本気になれるような相手を探している。才、能力を全て使い切らせてくれるようなそんな相手。

布都は当初その相手、好敵手として目を付けられていたことは分かつていた。今では諦めた様子であるが、心の底から諦めきれている様子でもないのも分かつっていた。

本当によく分かつていた。

今の布都と馬子の関係は、敵対していない好敵手というような存在であつた。

しかし布都にはその馬子の望みを叶えてあげるつもりがない。そのことがどうにも布都に罪悪感を覚えさせた。

だから布都はその全てを飲み込み、新たに見つかった好敵手になりそうな人物の到来を祝福することにした。

「なるほど。であれば、我はいつも通りに過ごしておきましよう。馬子殿がそこまでいうのなら——」

馬子は柔軟な笑みで深く頷いた。

話が一段落すると、布都は手をぐいぐいと引かれた。手を繋いだままであつたので、屠自古の仕業である。

つまらなさそうにふくれているので、理由はすぐに分かつた。

「おおう、すまんすまん」

繋いでない方の手で、頭を撫でる。

「そろそろ昼ご飯にでもしますか。良い頃合いでしょう」

布都が顔を上げる。

「あ、すまん。もう食べてしまつたあとでな」

「これは早いことで」

話まじりに何を食べたか聞く馬子。

「……おや、それは珍しい」

馬子は屠自古を覗き込むように見た。

屠自古は目を逸らす。

「……どうかしたのか？」

首を傾げる布都。

「——ばかふと」

屠自古の頬はほのかに赤かつた。

## 第16話 溫もり

夜。

大きな焚き木が周囲を照らしていた。  
木が燃えると、煙が上がる。

煙とは微細な粒子の固まりのことだが、この粒たちは祈りだつた。  
一つ一つが集い、ゆらりゆらりと天へと昇つっていく。

周りにはたくさんの人の群れ。

熱の周りをぐるぐると回りながら、踊つていてる。

祈りは集い形となつて、天へと昇る。

今宵は豊穣を祈る大祭。

夜の都は多くのかがり火により、明るく輝いていた。

「——熱心なことだな」

人通りの中、布都は横目にしながらそう言つた。

これは都を挙げての祭り。

人は浮かれ騒ぐ。

食べて飲んで踊つて。気分の高揚に酒も合わさり、都は大変賑やか  
だつた。

参加しているようで心がそこにはない。布都是周囲の空気に溶け混  
じつていないことを感じていたが、そもそもそういう柄でもないので  
どうでもよかつた、のだが――。

布都には、自身の傍らの存在がたいへん興奮しているのが分かつ  
た。

それもう今にも駆け出しそうなほどに。

「布都つ、布都つ、あれが食べたい！」

名前を呼ぶ度に跳ねる屠自古。かがり火を受け、大きな瞳がいつそ  
う輝いていた。

屠自古の指す先には、鳥の肉を串焼きにしているところであつた。  
して、布都であるが、

「私は錢を持つておらん。馬子殿に頼め」

三人だつた。

布都に屠自古に馬子。

はた目からは完全に仲良し親子である。

馬子は屠自古に優し気な笑みを向けた。

「銭は必要ありませんよ。あれはうちの者ですから」  
いわゆる顔バスというやつである。

「ですから、貴女でも構わないと思いますよ。知らない者なんていいでしよう」

布都も超がつくほどの有名人。物部でもあり蘇我もある、うまく分類できない存在。

「——父上っ、布都っ、早く早く！」

もう待てないとばかり、屠自古は二人の手を引っ張った。  
そして目当ての物まで駆け寄り、手に入れるやいなや口いっぱいに頬張つた。

並んで歩く布都も、一緒に串焼きを食べる。犬歯で挟み、そぎ取るように串から引き抜く。妙に様になつてゐるその姿を、馬子が面白そうに見ていた。

どんどん都を練り歩く。

身分もあり、これまで屋敷からあまり出してもらえなかつた屠自古はもう楽しくて仕方がない。あれは何だ、これは何だと、指して回り、それに対し馬子が律儀に答えていく。

「父上父上、あれは?」

屠自古がとあるくらい一角を指した。  
人がもぞもぞ動いているのが見える。

「あー、あれは……」

布都が屠自古の顔の前に手をやつた。

ひらひらとした袖が屠自古の視界を覆う。  
「あまり見ん方がよいぞ?」

「何でだ?」

「じきに分かる」

「何だよ」

布都はうけけけと笑い、屠自古の耳元でささやいた。

「そりや、暗い所であるから」

「はあ？」

「大人になれば分かる」

子どもにとつて、これほどつまらない言葉もない。

屠自古の中に反感が湧く。だいたいお前も子どものような外見してるじゃないかとか、そういうことが思い浮かぶ。でも、布都是ひどく子どもっぽくなく、年寄りクサイ喋り方をして、――結局、歳というものを分からなくさせて。

「……んだよ。じゃあ、私もちゃんと分かるようになるんだろうな?」

「ああ、もちろん。……そうであるな」

途端、布都是難しい顔をした。

「おい、布都」

屠自古が心配するように声をかける。

「いや、何でもない」

布都是串を放ると、屠自古の頭を撫でた。

夜は深まり、かかり火は盛大に焚かれる。

火の光を受けた人の影は長く伸び、地を行き交う。祭りはまだまだ終わらない。

「我こそはっ——」

とある一角に、人だからが出来ていた。その奥から勇ましい声が聞こえる。

ちらりと視線をやつた布都だったが、大して興味をひかれなかつたので通り過ぎようとした。が、布都の足が止まつた。

正確には止められた。

屠自古が布都と馬子の袖を掴んでいた。

屠自古の顔が好奇心で満ちている。

「行きましょうか」

馬子もそう言えば、布都に断る意思は湧かない。

近づけば、自然と人だかりが割れて最前列付近にまで移動できた。人の囲いの中では、一人の男が剣を持っていて立っていた。

この時代、剣は誰でも持っているものではない。ある程度の身分、もしくはそれらに許可されたか。

「あれは何をやるんだ？」

屠自古の疑問に、布都は答えない。

馬子に視線をやるも、同じよう。

そうこうしているうちに、動きがあつた。

剣を持つた男は、細い布を取り出すと、目に被せてぐるりと回した。目隠しである。その後、ふところから土を固めて作つたであろう丸いものを取り出した。

周りの見物人もおおよそ見当がついた。

「では——」

男はそう言うと、構え、手に持つ的を投げ、剣を振った。

見当が辺り、観衆から声が上がる。

人が大きく喜ぶときは、想像以上のことを見たとき体験したときである。

見物人の中にも、数日練習すれば出来そうだと思った者も少なくない。それでも声が上るのは、次を期待してのこと。

当然、男も分かっていた。

男は目隠しを外し、大きく手を広げる。

「集まつてもらつたのは、芸を見せるためではない」

芝居がかつた声色。

「見せるのは、強さ。よつて、挑戦者を求む！ 今この場において、我

こそが最強だと宣誓しよう！ 倒せば、その者が最強であろう！」

歎声が上がる。

「武器は自由だ。なんなら素手でもよい。その時はこちらも素手でお相手しよう」

その言葉に、観衆の中にいた血氣盛んな男が飛び出した。

すぐに勝負は終わつた。

その後も、続々と挑戦者が現れたが誰も男を倒すことは出来ない。

「なあ、布都布都」

「やらんぞ」

「な、何故だ。すつごい強いって聞いたぞ」

「気のせいだ。それか人違いか」

「じゃあ、その腰のものは何だ」

「これが？」

布都の腰には剣が差してあつた。屠自古の知つてゐる布都是、いつもそれを持っていた。

「これはお守りみたいなものだ。ほれ、しょっちゅう差しとるだろう？」

「使えもせんのにか？」

「ただの貰い物だ」

蘇我に行くと決まつた日に、守屋から貰つたもの。えらく大事そうに渡すから、何か粗雑には扱えない。

「だから、振り回すことしか出来ん」

「むうー」

子どもは親のかつこいいところを見てみたいものである。

諦めきれない屠自古は馬子の方も見た。

「父上」

馬子は即座に首を振つた。

馬子は戦闘が苦手である。身の上もある。怪我でもしたら、大事。ここは諦めてもらうしかない。

「ほれ、屠自古——」

布都が腰の剣を抜いた。

「な、何だそれは」

「剣だぞ？」

刀身は石に見紛うほどにくすんでいた。切れ味は想像がつく。

「さて、……怪我で済めばいいが」

布都が一步前に出た——ところで、屠自古が布都の袖を掴んで止めた。

「や、やっぱいい」

「そうか？」

布都は鈍色の剣を眺めて、

「このボロ剣を振るういい機会だと思ったのだがな」と笑った。

「——そう言うな」

後ろから声がした。

知つた声だつたので聞きとれた。

人ごみでも知つたものは案外聞き取れるものである。囲いの外。

布都は馬子たちからすつと距離を離し、声の主に歩み寄つた。

「これはどうも」

「久しぶりだな」

兄の守屋。

「ええ。しかし、護衛の姿が見えませんが」

「ほれ、あそこだ」

知つた顔だつた。

弟の贊個が、観衆の中を抜つて中心へ向かつている。

「勝負にならんでしょう」

布都は先の件で、贊個の実力を知つている。ちょっとやそつと武技に優れているだけでは、張り合うことすらかなわない。そもそも、並みの武具では身を傷つけることできえ難しい。

「そりや、普通にやればそうだらうが、当然加減はするだらうさ」

ある種の無情でもある。

「……ならばやる意味なの無いのでは?」

「楽しみたいんだろう」

「よく分かりませんが」

視線の先。

贊個は、力を制限するどころか使うそぶりすら見せずに戦つていた。

「負けそうですが」

「そうだな」

贊子はおされにおされていた。

名高い物部の、それもその中でもさらに名高い人間が挑戦してきたのであれば、挑まれた人間の方がやる気が高まっていた。これではどちらが挑戦者か分からぬが、とにかく、当人にしてみれば名を広める絶好の機会である。

「……あれは変わったのか？」

布都は眉を寄せる。

まとう雰囲気が変わったように感じた。

「勝つことだけが全てでは無いと知つた。そう言つておつたぞ」

「——分かりません」

「何がだ？」

「人とは変わるものでしようか？」

「それは俺が答えるには過ぎた質問だ」

打ち合いは激しさを増す。

戦う両者の顔には笑みがあつた。

一方では純粹に楽しそうに。もう一方では功名心の現れた笑み。高い剣戟の音が響き、勝敗が決した。

「参りました」

負けた贊個が満足したように頭を下げる。

何やら少し言葉を交わしたのち、戻ってきた。

「あ——これは姉上。見てらしたのですか」

「うむ。物部の威を示す素晴らしい戦いであつたな」

「これは手厳しい」

負けたことを言つているが、贊個は笑顔だった。

作つたようなものではない。

「なんだか変わつたな」

「そうですか？」

「気色悪さが無くなつたわ」

「やはり、手厳しい。いや、ですがその言葉が本当に嬉しいです」

「変なやつだな。そこはいきり立つか、口をきかなくなるところであろう」

「不思議ですか？」

「ああ」

「そうですか。それは良かつた」

「は？」

「姉上にも分からぬことがある。それを知ることが出来たので、やはり良かつたと」

「なんじや？ 今度は我を怒らそうとしとるのか？」

「そんなわけありません。——しかし、少し聞いてみたいことがあります」

「言つてみるがいい」

贊子は少し改まり。

「私と同じ条件で、姉上は今の者に勝てたと思いますか？」

「負けるだろうな」

布都は即答した。

「潔いですね。試してみなければ分からないとそう答えるかと」

「負けるさ。勝つ気がない」

「その気があれば？」

「やつてみなければ、——と言いたいところだがやはり負けるだろうな。勝てる要素がなさすぎる」

布都是鼻を鳴らした。

「……では、命のやり取りであればどうです？」

「そりや分からん。命をやり取りするというのはそういうものであろう？」

「それは幾重もの経験によるもので？」

「どうかな」

「実は私も最近ちよこつと抜け出したりするのです」

「へえ？」

「森深くまで行けば、時々妖怪に会えます。そうしているとふいに、姉上のことを思い出しました。多分同じことをしていたのではないかと」

「さてな。そうかもしれんし、そうじやないかもしけん。しかし——」

——この辺りで妖怪が？

気になるところではあつたが、まあくはないことだし、自分も経験したことであつて。

「しかし？」

贊個が不思議そうな顔をしている。

「ああ、なんでもな——」

言葉の途中、布都は強い力でぐいっと引っ張られた。

「布都！ いつまで話しているつもりだ!!」

さらにぐいぐい引っ張られ、

「行くぞ!!」

屠自古。

小さな力。抗う気はおきない。少しの名残惜しさはあるも、やはり抗う気はおきない。

「悪いな、今日はここまでだな」

「はい、元気そうでよかったです」

布都は屠自古に引っ張られて馬子の元まで連れてこられた。

「いやあ、途中から射殺すような視線を送っていましたよ」

とは馬子。

「なるほど。何やら熱い視線を感じていたわけはそれか」

「なつ。ち、違う！」

布都は目を丸くして見せる。

「そうが、では別の誰かであつたか。私は人目を引くゆえ、そういうこともあらうな」

「お、お前は、父上のその、あれだろう？」

「んん？」

いいづらそうな屠自古。

口が小さく開かれる。

「……どつかに行つてしまふのか？」

目が合う。

懇願するようなそんな瞳。

布都是瞬硬直したのち、ふつと笑つた。

「さあな。それは我にも分からんことだ」

「何故だ」

「分からぬことであるから」

「答えになつていない」

「答えなぞ、氣に入る形にはなつていないものだ」

「分からんぞ」

「そう、それでいい」

「むうー」

布都は屠自古の頭をわしわしと撫でた。

「そろそろ帰ろうか」

満足したと。

間違いなくこの身の内は満たされた。

なるほどこれが幸福なるものかと、そう思えるほどに。

ここしばらく楽しい日々を過ごしたと、間違いなくそう思う。

であるが、その上で足りていらないものがあつた。

満ちているはずなのに、不足を感じる。

今ではなくて、前にはあつたもの。

——久しく食つておらん。

唇を舐める。

五臓六腑、体の深いところまでに染みわたるあの美味さ。

——ああ、飢える飢える。

心は満ちているのに。

その心が求める。

あたかも欠乏に気づいたかのように。

——久しぶりに血にでもまみれようか。

生暖かい血を浴びる。

そんな温もりもまた、偽らざる物部布都の楽しみ。

## 第17話 鬼

星は巡る。

その軌跡を追えば一つの線になり、それはまるで空を搔いたように、もしくは細く腫れ上がったように。

夜が廻り時を示す。

時は背中を押すように迫つてくるのか、それとも前を行くように先を走つているのか。それとも共にあるのか。行くものか来るものか。

——百鬼夜行とはこういうことか？

とは布都の皮肉。

生き物には生存本能がある。それはそのまま生存のために働くものであるが、だからといってそれがいつも生存に繋がるかどうかは決まっていない。

生き物、もしくは生き物だつたものが、おおよそ同じ方向に走る、飛ぶ。

夜。

山道。

都からは近くはなくも、それほど遠いというでもない山。人が切り開いた痕のある道を行く。

——愉快。

布都はある夜の欲求に従い、翌日の夜、屋敷を抜け出していた。血にまみれたくて仕方がない。一度その欲求に気づけば、なかなか我慢する気にはなれない。今の平穀な暮らしもまた満足のいくものであつたが、それでも足りないものを見つけてしまつたのならば、それにあがらうことを選ぶことなんて出来ようか。

——数日居らんだったなら、屠自古はなんと言つだらうか。

なんとも久しぶりに見る有象無象の妖怪の波。

思えば久しく来てなかつたと、布都は思うもそれどころではない。

前には見つけるのも困難になつていた妖怪どもが、溢れるほど、いやむしろ溢れて押し出されてきたかのように布都の元までやつてきていた。

違うのは、そのどれもが布都に目がけて来たのではなく、何かから逃げてきたかのようであること。

しかしその先が物部布都。

皆、死んだ。

「一体、何から逃げてきたというのか。その先が我であれば意味をなさぬと、いうに」

恐怖ゆえに逃げて来たのか、それとも恐怖から逃れに来たのか。死とは平等に死であるからゆえに、救いにもなりえた。

——どうせなら我から逃げればいいものを。

嫉妬というには違うけれども少し似た苛立ち。

深まる夜。

山の奥深く。

その先へ。

道標は川の水流のように流れてくる妖怪の群れ。

景気づけだと、派手に殺傷していく。

蒸すような温かみのある臭気が、収まりきれなくなつたように、濃く、濃く、広がっていく。

血に酔つていく。

——勘違いの阿呆を見に行くか。

元よりそのつもり。

鬼とやらが見たかった。その後は深くは考えてはいない。なるようになるであろうと、そのくらいしか。

生も死もその程度でしかなかつた。少なくとも、すこし前までは。屠自古に会うまでは。

——なんとも。

寂しく思つてほしいと思つてゐることに、布都は気づく。それについて明確な言葉が出せないことに困惑した。

悲しんでいる顔は見たくない。そうなるのであれば、いつそ忘れ去つてほしい。

いつものような照れが交じつたような笑みのままでいてほしいとすら思えてくる。

時が止まつて、永遠にあのほがらかな楽しい時間が続いてしまえばいいのに。

その想う全てを肯定しながら、布都は足を前に進める。樂しければ、もつと楽しもうとするのが人に備えられた欲であると。

延々に満足せずに欲に準じて追い回す。片方が満ち足りれば、もう片方の隙間を埋めようとする。

——ああ、心が躍る。

目の前では鮮血が吹きあがる。

逃げてきた妖怪を一つ残らず殺傷する。

——血も、肉も、踊り上がつて天へと昇つてしまえ。

布都は口元をつり上げる。

楽しくて仕方がない。

得ることが出来ない、その両方を掴んだ、そんな気がした。

「お」

声が出た。

多少距離はあるが、感じた。

叶うことなどが約束された期待ほど気分がよくなることもそうない。

前菜を心良く楽しんでいる最中に、主菜の芳醇な香りが鼻腔を喜ばせるような。

遠くとも感じるその気は、まさしく最上級。

少なくとも今までで最高。

きつとそう、たぶんそう。おそらく、間違いなく、そう。楽しみ。足が自然と早くなる。

地を蹴り、空を跳ぶ。

もう雑魚妖怪など放つて。

早く進むと、さらに早く早くと足が進む。

視界がぼやけ線や面になつていく。

風音が強くなる。

そして、

「——ほう」

着いた。

後ろ姿。

思わず感嘆が出る。

いびつなコブのよくな岩の上に座るそれは、まさしく――。

「鬼か」

それは振り返る。

額から角が様はまさしく鬼。

「人か――」

「どうかな?」

軽口。

「ようやく来たか。その姿、巫女か何か?」

「違うが」

「そうか。まあ、いい。待ちに待つた」

鬼が立ち上がった。

向かい合う。

「生贊、ではななそうだな」

「あ?」

さつきから話が通じていない気がして、いたが、どうやら本当にそういうらしい。

「人にしてはそれなりの力を感じる。私は、ここよりずっと東からやつて來たのだ。なに氣負うことはない。お前程の巫女はいくらか見た。――さて本題だ。我を楽しませるがいい。もちろん命がけでな。満足出来なければ、お前たちの町を滅ぼす。これが鬼の遊びぞ」布都は深くゆっくり息をした。

なんだかよく分からぬが、今生最高に侮辱された気がした。

「堅くなる必要はない。鬼と人、そこの差は天と地より広い。それは道理。しかし、お前はお前の全てを見せて我を満足させねばならない。その為にお前は我的元に來たのだろう」

布都の表情から喜色の面だけが抜け落ちていき、瞳が極度の冷気をもつて鬼を見据えた。

「何を固まつてゐる。さつきと来んか」

その言葉に布都の何かがキレた。

布都は口を開く。

「——お前は、角を折り、頸を碎き、四肢をもぎ、腸を引きずり出したのち、肝を喰らつて殺してやる」

誰に口をきいている。

「興がそがれた」

寸前まで楽しい気分だったのに。  
もう——。

「死ね」

布都の抑えていた靈力が解放され膨れ上がる。それに妖力も混ざり、説明のつかない混沌としたものになる。

「空想的道理に溺れて消えろ」

腕振り。一閃。

黒い刃。

それは鋭い刃、ではなく、空間を吸い込むようなそんな異質さを持つていた。

「んん?」

鬼はその飛刃を手でつかみ、握りつぶした。

「これは面白い」

鬼の口元が歪む。

「もつと見せてみるがよい。楽しめそうだ」

布都の脳が怒りと冷たさを保ちながら、目の前の光景に相手が鬼であるということを再認識させるに至った。

——くそが。

布都は跳躍した。

宙に上がった布都は、そのままどどまり、大きく手を広げた。

鬼を中心とした風の渦が起こる。

竜巻。

靈力が練り込まれた鋭い風は刃となり、岩ごと周囲を切り裂く。

が。  
衝撃。

空間が揺れるような音と共に、搔き消える。

——殴つたのか。

見ていたからそう思つた。

だが、それが真実なのか疑う気持ちもあつた。

しかし、たしかに殴つていた。

鬼は無傷。

布都は目の前の者が鬼であることを、また再認識させられることになつた。——いや、ここでようやく鬼というものを理解させられた。

理不尽なまでの力。

およそ人の身では届きうることが出来ないだろうと思わされる程の差。

単純に、傷を負わせることすら出来ないかも知れない。文字通りの必死でようやく傷をつけられるのではと。だとすれば、どうやって倒すまで至るのかと。いや、どうしようもないという答えが出るのみであると。

——それでも。

布都は地に手を着いた。

鬼の足元から土が盛り上がり、鬼を跳ね上げる。

宙に浮いた鬼に向かつて、地面から伸びた土の矛が殺到し、——碎ける。

即座に炎を作り、地に降り立つたばかりの鬼に向かつて発射する。

——も、腕を払われて霧散する。

——これが、これが鬼なのか。

悔しかつた。

悔しくて仕方がなかつた。

よもや、

——この物部布都が全力を出さねばならぬのか。

布都は息を吐いた。

——おののけ。

布都か立ち昇るものが一気に増す。

布都の瞳が鬼をねめつける。

——お前が誰に向かつて何を言つたのか、分からせてやる。

こいつは、我をご機嫌伺いに来た巫女くずれと思ったのだ。

こいつは、我を他の人間と同一と見た上に、それらの為にやつてきたのだと思つたのだ。

こいつは、我が方に一つにも敵うことがないと、そう思つたのだ。

鬼と人である、という理由だけで！

——こいつのこいつたる部分をずたずたに引き裂いたのち、殺してやる。

許されることではなかつた。

憤怒を込め、それでも抑え、想いを口にする。

「届く、届かぬではない。上に居たつもりでもなつたか木偶。增長が行き過ぎて角が伸びたのか？ 思い上がるなよ」

誰に口を聞いたか？

「私は物部布都である。道も無くば理もない」

何かを握りつぶすように、手を握る。

「また、未知も無くば断りもない。一切のそれが更新されることなく、ただ前もつて決まつていた事実が訪れる」

見据える。

「お前のくだらない敗北という死」

それが事実であると。

「教えてやる」

口を歪め。

「私は物部布都。それだけよ」

宣言した。

布都は駆ける。

即座に鬼のふところに寄り、遅れて向かい撃つてくる拳に構わず掌底を放つた。

空に打ち上げられた鬼、両手に力を練る布都。

鬼は布都を見下ろし、布都は鬼を見上げる。

そこには物理的なものと、精神的なものが同一していた。

布都は示す。

——お前が上に居るのではない。

ただそう思うだけであると。

そもそも基準が違うのだと。

上も下も、右も左も、どこかひっくり返してしまえば狂つてしまふ。基準とするものを変えてしまえば、全てが変わる。そんなものでしかないのだと。

——勘違いに我を付き合させた報いを受ける。

布都の両手から視認可能になつた力が鬼へ向かつて放たれる。

それは二対の蛇が絡み合うように鬼へと向かう。

靈力と妖力。およそ合わさることのないそれが、自然と共生したようく存在している。そしてそれを覆うように禍々しい瘴気のようなものが包んでいる。

威力だと貫通力だとそういうものではなく、ただただそれを受けてはいけないと、鬼にそう思わせるものがそれにはあつた。

空中で身をよじり避けようとする鬼であつたが、叶わない。

布都の放つた光線は周囲を巻き込むように進み、わずかにかわしたはずの鬼は空間ごと引き寄せられた。

鬼の横腹を存在が矛盾しているような光線がえぐつた。

「ぐつ」

鬼が地に落ちる。

轟音と土煙が舞い上がる。

鬼は立ち上がると、ゆつくりと口を開いた。

「お前は、——何だ？」

布都はせせら笑う。

「愚か者め。物部布都、そう言つたであろうが」

## 第18話 鬼、そして鬼

鬼は腹に触れると、かすかに笑つた。

「認めよう。お前のようなやつは初めて見た」

和らげな声。それに反する力の胎動。

鬼から出た圧が空間を押しのけ、布都に到達する。

髪が肌が神経が心が、振動を受ける。

「お前は楽しめそうだ」

——この圧。

人の域を優に超えていた。

——我の三倍、いや四、五……。

布都是鼻で笑つた。

鬼と人。その差は歴然。

——ここまで差であれば計るだけ無駄なことよ。

黙つたままの布都。鬼は声をかける。

「なに、心配することはない。その全てを出し切つて見せよ」と、誘う鬼。

布都是眉間にしわを寄せた。

——しかし、こいつまだ分かつておらん。

その差が絶大なれど、無限ではない。また、力と力をぶつけ合うようなものでもない。

布都是鬼の言うままにしてやるのも癪だと思つた。

「——そちらから来たらどうだ？ よもや怖くて仕掛けられぬではないのであろう？」

にしても雑な挑発。

しかし、

「——よかろう」

効果はあつた。

鬼が踏み込む。

地が爆ぜ、音を置き去りに——。

すぐさま布都の目前にまで。  
音、そして。

「ふんつ」

拳が迫る。

身を反らし、躱す。

が、風圧で吹き飛ばれる。

塵が吹き飛ぶように、布都の身体はすっ飛んだ。  
張り合うことすらかなわない。

力と力。両者の間では拮抗すらせずに碎ける。

布都には躱す以外に術は無い。

地と水平に、布都は木の側面に足をつき、勢いを止めた。

「まだだ」

鬼はすでに眼前にまで迫つており、次なる拳を繰り出していた。  
視認するやいなや、布都は木を蹴る。

が、またもや風圧で飛ばされる。

「気を緩めるなよ。すぐに終わつてしまう」

布都は数度身を回転させた後、地に立つた。

鬼が再度迫つてくる気配はない。

——終わつてしまえ。

布都是そういう気分になつた。

まるで、壁に話しかけているような。

——さつさと喰つて仕舞いにするか。

鬼と人。

そこには確かに覆ることのない差があるのかかもしれない。

しかし、人と一括りにして物部布都という個人を見れていないので  
あれば、届きうる刃を見落とすことになるかも知れない。

——我が勝ち、生き残る。

布都是気を固めた。

腰にさげていた刀を引き抜き、地面に投げ捨てた。しょせん戦闘には役にはたたない飾りである。布都にとつては多少とはいえ、重りにしかならないものを提升了ままで戦うほど目の前の鬼を舐めていな

い。

布都の勝利は、鬼の生命を絶えさせること。敗北とはその逆、自身の生命が絶えることである。

固めた気というのは、その二つ。

殺すか殺されるか。

これはただの遊びではない。

正真正銘、命を賭けた遊びである。

二者択一。

血に酔うよりも気持ちよく酔える、布都の知る唯一の方法。

——屠自古。

賭ける必要の無い命に、する必要のない戦闘。

それでもせすにはいられなかつた。

——もし我が帰らなかつたらどう思うだらうか。

満たされてしまつた。

存在そのものを慈しんでしまうような。

思いは想いに。

自分が変わつて別の何かになつてしまふような。

そんな怖さに突き動かされ死地にまで來た。

それで分かつた。ちゃんと知ることが出来た。

今この場においても、自分が何も変わつていなかつたということ。そ

して、おそらくこのまま生きて帰りまたあの屋敷に戻れば、また変わらない自分を知ることになるであろうということ。

それら全てが自分の一部。

——充分。

「そら、さつさと来い」

布都の挑発。反応した鬼が再度迫る。

布都は足を地から離さない。逆に根を張るように、地面に力を流す。

鬼の拳。

布都は身を揺らし、躱す。

今度は吹き飛ばない。

布都はそのまま手を伸ばす。

その手は黒く染まつていた。

全てを腐蝕させてしまいそうな禍々しさ。

鬼は本能でそれが決して触れてはいけないものの類であると覚つた。次なる攻撃を繰り出そうと、前のめりになつていた体勢を崩して後ろへと跳ぶ。

間髪を入れずに布都は追う。

一気に詰め寄ると、手刀を振るい下ろした。

鬼の頑強な皮膚は、布都の手の侵入を肩口から許した。傷すら滅多に負うことのないはずの鬼の剛皮が、溶けるように崩れていく。

人の攻撃など、到底届きうるはずがない。そういう考え方から更新できずにいたから、鬼は当たることになった。いや、避けられなかつた。注意さえ向ければ認識出来ていたはずの死をみすみす見逃したのである。

布都の手がさらに奥深くへと沈んでいく。

その手が黒く染まつていたのは、侵入したその時だけで、肉に分け入つた時にはすでに元の白さを取り戻し、同時に鬼の体内の液体により赤く染まつっていた。

布都の手が目的の物に達する。  
肝。

ぐぶりと音を立てながら、抜き取る。  
「——が、ふつ」

たたらを踏む鬼。

布都は口を開くと、鬼の首に噛み付いた。

剛皮は多少は抵抗したが、深手のうえ肝まで取られた状態では耐えられずに噛み千切られた。

布都はそれを吐き捨てると、鬼の首の傷口に、空いた方の手を突っ込む。そのまま身を回転させると、鬼の首が胴と離れた。

一回りすると、布都の目に落ちていく鬼の首が映つた。その様子を見ながら持つていた肝を喰らう。

——ああ。

身に快感が染みわたる。  
それは得も言えぬ快樂。  
身が体が、歓喜する。  
それにもとない、心も喜ぶ。  
でも、

——満ちていない。

屠自古の顔が浮かんだ。  
喜んだはずの身体と心に不足を見つけた。  
布都は、口元を袖で拭うと、傍にあつた木に腰を掛けた。  
抗えない脱力感。  
——さすがにくたびれた。少しゆっくりしよう。  
瞼がゆっくり落ちた。



「なあ、そろそろ起きないか？」

布都の脳が言語を知覚した。

——妙な気配だ。

確かめようとすると、まるで煙を掴んだかのようにとらえようが無かつた。

「いやあ、しばらく眺めてたんだけど、そろそろ動いてるところが見たくなつてねえ」

目を開き、半身起こす。

すぐそこにいた。

童女のような姿に、大きく伸びた枯れ枝のような二本の角。

「誰だお前」

「見て分からぬかい？——鬼だよ」

「そんなもの見れば分かる」

「そうかよ」

——圧がない。

布都はいぶかしんだ。

鬼であれば周囲を押しつぶしてしまふほどの圧があるものだと思つていたし、事実さつきの鬼はそうだった。

「我に何のようだ」

同胞の敵討ちにしては、どうにも纏う雰囲気が軽い。寝てる間に攻撃してこなかつたのもそうで、なんというか、妙に妙である。当の鬼は手に持つてゐるひょうたんを、しきりに口に寄せてぐびぐび飲んでいる。鼻につくほどの酒の臭いから、中身が酒であるということは分かるが、やはり目の前の生き物がよく分からぬ。

——酔つてるからか？

笑みを絶やさず、楽しそうにすら見える。

「それ、お前がやつたんだろ？」

鬼は視線を、布都が殺した鬼に向けた。

「さあな。そんなものの初めて見たわ」

「おいおい。そういうのはよそうぜ」

「ならば、分かりきつた問い合わせぬことだ」

「お前、嫌なやつだな」

「褒めても何も出らんぞ」

「どうやら真までそういうやつらしい」

布都は立ち上がる。

その動作もじつと見られた。

氣味が悪い。

「——いい加減用件を言つたらどうだ？」

「じらされるのは嫌いなたちか？」

「ああ。逆なら好みであるが」

「それなら私もだ」

鬼はうれしそうに笑う。

「ただ聞きたかっただけさ」

もう一度、鬼は死体に視線をやつた。

「——どうやつてやつた？　およそ人になせるものじゃない」  
笑みは絶えていない。が、どこか刺すような空気がかすかに混じった。

「言わなかつたか？　それが倒れていることに、今さつき気づいたばかりだ。もしやそれ、死んでおるのか？」

口を——、首回りを——、真っ赤に染めた布都が嘲笑しつつ、そう言う。

「なるほどなあ。……まあ、いいか。これは始めて伝えていなかつた私の落ち度もある」

「ん？」

「私は萃香、見ての通り鬼だ。そこで、鬼つてのは基本的に嘘が嫌いだ」

布都是首を傾げて見せた。

「……そんなもの知つているが？」

「そうかよ」

鬼、萃香は首を振つた。

鬼という言葉を聞いただけで、顔色を変えるのが人間である。

しかしどういうわけかこの目の前の人間は、挑発さえしてくる。そもそも鬼なんてものは、嘘をつかれると直感的に分かつてしまい、内に怒りの芽が生えてくるものであるが、不思議と目の前いる嘘を吐いているはずの妙な人間には腹が立たなかつた。

その理由も萃香には何となく分かつていた。

答えは至極簡単で、目の前の人間が嘘をついていないから。とはいえる、眞実は言つていない。ただただ純粹に目の前の人間は、自分の心に嘘をつかずに、相手にもつかずに、眞実の出来事を言葉に換えていないだけで、その実ずっと本心を言つていた。

そして、布都是直接それを口にした。

「——ところで、いい加減かかつてきたらどうだ？　団体のように気

の小さい鬼だな。でかいのは角だけか?」

最初から喧嘩を売っていたにすぎなかつた。

「私は物部布都である。物言いはつまらなかつたが、あの鬼の肝はたいへん美味かつた。この幸運に感謝して、元気におかわりといこう」

鬪氣を露わにする布都。

萃香は顔色を変えない。

「んー。それも悪くはないんだが、ちょっとその気分つてわけでもないんだなこれが」

懐かしむように、倒れている鬼を見る。

「そいつ、……まあ馬が合つたというわけでもないが、それでも付き合いはあつた方だ。私がこの近くにいたのも、こいつの力を感じて来たのもそうだ。ちょっと様子を見に来ようかと思えるくらいはあつたんだ。だからさ、聞きたいんだよ。どういう風にやつたのか。何も復讐しようつて腹じやがない。なあ、聞かせてくれないか?」

正面。目が合う。奥まで見ようとする意思が伝わる。

「アソツの最期。そしてその経過。鬼を殺す人間なんて聞いたことがない。ああでも酒に毒を入れたとかは無しだよ。周辺で暴れてほしいならそれでもいいんだけどさ」

布都は目を細める。

「教えてほしいか?」

「ああ」

「ならば言おう」

布都は口を歪め、

「毒を使つてだな?」

せせら笑う。

「策を弄し、罠に嵌め、毒を盛り、動けないところを執拗にいたぶつてやつたわ」

これまた明確な挑発。

萃香は頭を搔いた。

「うーん、話が進まないなあ。どうしてそこまで本当のことと言わないのか」

「馬鹿め。言う義理も必要もないわ」

「まあそうなんだけどねえ。いやなんていうか、ほんとにやる気はないんだ。なあ、もう楽しんだろ？ そろそろいんじやないか？」

歩み寄ろうとする萃香。——だつたが足を止める。

布都から立ち上る気が一気に上昇する。

「やる、やらないは、お前の決めることじゃがない——」

布都から立ち上る気が、鬼の萃香の足を止めた。全てを浄化するかの如く清らかすぎる靈氣に、全てを覆い隠し惑わすような妖氣が混ざり合っている。

「おいおい、なんだそりや——」

その萃香の疑問は言葉として答えられることなく、形として、語る意思なしというもので答えられた。

人の身体から妖氣が出てくるというあり得なさ。そしてそれが、相反するはずの靈氣と混ざっているというさらなるあり得ないさ。

萃香はそこに見過ごしてはいけないものを感じた。

何か違う。何かを修正しなければならない。そう、根本から。

「お前、何だ——？」

「ああ？」

疑問には答えられず、二つの氣が混ぜられた光弾が萃香に迫る。腕を振り、手の甲で軽くはじく。

脅威、ではない。

だが、問題ないとするのはよくない。勘がそう告げる。

萃香は諦めて、付き合うことにした。

「言葉で聞けないのなら、もう仕方がない。こうなりやお前の望む形で聞いてやる。加減が難しいんだからな？ うつかり死ぬなよ？」

萃香は鬪氣を表した。

## 第19話 致死毒

鬼にも階級のようものがある。

それは力の強さというかケンカの強さで決まるような大雜把なものであつたが、それなりにしつかりとした上下の関係があつた。口の上では軽く接していても、その奥にどこか尊敬や畏怖があつた。

そんな鬼の間で、一番に名が挙がるような存在が萃香である。

酒好きの鬼といえども、萃香ほどいつも飲んでいる者はいない。いつも酔つていて、頬が赤い。そんなことから、酒呑や朱点だつたりと呼ばれていたりする。

未知や恐怖の権化である鬼の中でも特別に目立つ存在。

今、萃香はその力を人、——それも一個の人間に向けようとした。  
「脅しじゃないんだからな？　くたばんなよ？」

見た目は童女。振り上げる拳もまた同じ。

だが振るうと、軌道に接していた空間が擦られ叫びを上げる。拳の前にあつた空間は押し出され、空気の弾となつて布都の肉体に向かう。

「——っ」

布都はとつさに半身をずらし避けた。

その瞬間、先ほどの鬼との差を感じさせられた。

——当たれば終わる。

身体が吹き飛ばされるような攻撃ではなく、当たつたその箇所が吹き飛ぶであろう。

「お、いい反応をするな。まあ、そうでもなきや、ほとんど無傷で鬼なんて倒せないだろうけどな」

余裕を見せる萃香。布都は舌打ちを我慢した。

「そら、次いくぞ。避けろよ——」

萃香はゆつたりとした動作で振りかぶり、また殴った。

言語では表現しがたい音と共に、布都に向かつて空気が襲う。

およそ人の身では視認出来ようはずがないそれ、しかし布都は避けた。およそ勘と、極限までに高まつた集中力がそれを可能にさせてい

る。

「よーし、次は連續でいくぞ」

瞬間、布都は川にでも飛び込むように横へ跳び、接地前に手を着き、もう一度跳んだ。

認識からだいぶ遅れて後ろから木々の碎ける音が聞こえてくる。碎けた木々の倒れる音まで聞いている余裕はなかった。

布都はまた回避行動に移る。

空間の叫び声に呼応したように木々が悲鳴の声を上げていく。

——どうやつて近づけばいい？　いや、近づいた所で危険が増すだけか？

絶対的な力の差をここまでありありと見せられると、さすがの布都も策と呼べるようなものがまったく浮かばなかつた。

どうしようもない。

そんな言葉が出てくるのを抑えようとするも、抑えきれずに脳裏を支配する。

決死で近づいた所で、傷を負わせることが出来るのかさえ怪しかつた。至近距離で攻撃動作などしようものなら、代わりに半身がふつとばされそうな予感もしてきた。小石が大岩を碎こうと玉砕するが如き真似ではないかと。多少の傷をつけることが出来たとしても、それと引き換えに自身が碎けてしまつてはなんの意味もない。

「ふう」

息を吐く。脳裏の思考を外に出すように。

——そのようなこと考えていては死ぬだけ。

欲しいのはやらない理屈ではなく、敵を殺す理屈。ぐだぐだと危険ばかりに思考を巡らせていては、いつまで経つても状況は改善されないだろう。

だからといつて考えを止めて突っ込むような無策無謀をすれば、そこで全てが終わる。

——何でもいい。

そう思つた布都は、腰にさげていた刀を手に取ると地面に落とした。

少しでも身軽にするため。

手が思い浮かばないのなら、出来ることは現状を思いつく程度で最善化することくらい。とはいっても、身に着けていたものを外すことくらいしか思いつかなかつた。

布都の葛藤にも似た思考を読みだかのように、萃香は攻撃動作を止めて口を開いた。

「ん、満足したかい？」

その言葉で、布都は硬直した。

腹の奥から立ち上つた熱が脳を貫く。  
身体が前傾姿勢を取り、——止まる。

「——ふう」

大きく息を吐く。

——落ち着け、落ち着け。

念佛のようになれる。

もう一度、息を吐き、言葉を吐く。

——思考を変える。

熱に従つてしまえば、火中に飛び入る虫と同じ結末が待つてゐる。  
一時の情動で捨てるほど、現世に未練が無いわけでもない。まだ得ていらないものがある。

「満足したことなど無い。それともお前はあるとでも？」

くりつとした瞳を見つめる。

「当然。今この瞬間もね」

「何故」

「私が私であるから」

その表情、声色からは、微塵の混じり気も感じられない。

「酒に喧嘩。これがあれば私は満たされるのさ」

「偽りなく？」

「ああ」

布都には分からぬ。

「納得いっていない様子だな」

酒も喧嘩も知つてゐる。布都にとつてもよく親しあるものだ。そ

してそれらが、満ち足りたと感じた瞬間から抜け落ちていき、決して内に留まらないものであると。

「人間というのはいい。可能性の塊だ」

「何が言いたい」

焦らされるのは嫌いな性質である。

「教えてやるよ。お前はまだ可能性の中にとどまつていたいのさ。満ち足りたければ、これでいいと、そう思うことだ」

「そんなものは——」

「そう、つまらないだろう。でもそこに満足がある。要はそう思えるかどうかさ」「

「思えるはずがない」

「正しさなんかない。好き嫌いの問題にすぎないのさ」

「馬鹿らしい」

「いや、真実だ」

「何故」

「それが真実だから」

「どうしてそう言い切れる」

「知っているから」

「何を」

「それが真実であると」

「阿呆らしい」

「そうでもない」

ふざけた問答だと、布都は思った。無駄だったとすら。

「——いや、違うな。阿呆にでもならなければ分からぬことがあるのさ。特に賢いと思つてるやつには近づきようがないものでね」

布都はこの無駄とさえ思える問答を切り捨てられない。

「あれこれ考えるのを止めにして、衝動で行動してみなよ。きっと楽しいぜ」

「今衝動で動けば死ぬが?」

「そうだな。でも、そうじゃないかもしれない」

「言いたいのはそれだけか?」

「はやるなよ。せつかく楽しくなってきたのに」

「さつき言つてたことと違うようだが？」

「いや、違う違う。満ち足りた上でさらに楽しむのさ。酒にはつまみがいるだろう？」

「そうか？　なくともいけるぞ。何もなくとも月でも見てればそれでいい」

「なんだよ。分かつてるじやないか。うんうん、やっぱそうだと思つたんだよな」

——遊ばれているのか？

いい加減頭が痛くなつてきた。

「お前は分かつてるけど気づいてないだけなのさ。つまみがないから、月を見る。これは誤魔化しでも妥協でもない」

「分からん」

「そんなはずはない。一度でも、満ち足りたようなことが本当にならか？　その後にそれを打ち消そうとしただけじやないか？　ただ認めたくないだけで」

「知らん」

「いいことを教えてやる。満ち足りる方法なんていくらでもあるのさ。その中で好きなものを選んで、好きな楽しみ方をすればいい。お前が認められないのは、その方法か、それとも楽しみ方、それらを見つけられていないだけってこと。言つただろ、衝動で動いてみろつて。——ここを使い過ぎなんだよ」

萃香は頭を指して見せた。

「食うことや飲むことが好きなやつは出来るものだよ。なあ、物部布都」

少しだけ分かつてきた。思い当ることは無くは無い。

しかし、それを初対面の奴に言われたことがなんとなく気に入らない。

「その時、その瞬間を、舐め干すように楽しむ。何かをする時、それが

一番楽しくなるように自分を沿わせるのさ」

「要は気分次第つことになるが？」

「いいんだよ。それが一番大事なんだから。行うことそれ 자체が樂しければ、その樂しさを全力で楽しめれば、それで満足出来ないなんてことはない」

酒に酔うような、刹那的快樂。

「そら、楽しもうぜ。楽しまなきや生きてても損だぜ」

「酒に酔つたように行き、醒めれば死ぬのか？」

「ほら、お前はやっぱり分かってた。——最高だろ？」

分かつていてるけど、気づいていない。

布都の中で、萃香の放つたその言葉がようやく溶けた。

この瞬間が永遠に続いてもいいと思えるほどの瞬間を求める。その求めてる瞬間もまた素晴らしい。なによりその瞬間は一つではない。どれも違つた快樂があつて、その樂しみ方も一様ではない。それを追い求めるのが人生とするならば、なんと良き生を送れるのだろうか。

「お、いい顔で笑うじゃないか。惚れてしまいそうだよ」

「ならば惚れてしまえばいい」

布都の笑みがすこしずつ——。

「おいおい」

官能的なものを孕んだ異質なものへと変貌していった。

生とは繋ぐこと。死とは絶えること。

布都の笑みのそれは、あきらかにその対のもの両方を有していた。

「——ゆくぞ」

視線が交差する。

——なんなら、惚れさせてやる。

物部布都という存在が心に魂にござりついて終始気になつてしまふくらいに。

——我も忘れずにいてやろう。

この瞬間を何度も思い出すように。

——萃香という存在を残すことなく味わおう。

「この瞬間を永遠にと願えるように——」

布都は駆けた。

そこまで離れていない距離。

一瞬。

詰め寄る。

「つ!?

慌てたような鬼の反撃、布都は確信する。

何かを警戒しているような動き。いや間違いなく、警戒している。それが何かはだいたい見当はつくものの、確証まではない。視線が交差すると、互いに地を蹴つて距離を取り合つた。きつとそいことなんだろう。

——この駆け引きこそが、対話なのだろう。

言葉を必要としないがゆえ、心の対話になり得る。

それでもやつぱり言葉を要したくなるもので。

布都は反撃した鬼に言う。

「何だ、恐れているのか?」

「まさか。私は鬼だぞ？ 恐れられるのはこっちだ」

「そうか。確かにそうに違いないであろう。——でも、もし恐れることがあればどうか」

布都是、数歩近づく。

「それはきつと、恐れられる者が恐れるようなそんなもの。——しかし言えない、説明不可の存在であろうよ」

「それがお前だつてか?」

「違うか?」

萃香はにやつと笑つた。

「そうだと嬉しいな。正直期待してるんだなこれが」

萃香から発せられる妖気が爆発的に上がる。

人が、とか。妖が、とか。そんな分け方がどうでもよくなるほどの力の奔流。

布都是もう一步踏み出す。

ざわめく木々に地の数々。

恐怖はある。でも怖くはない。その矛盾。

布都の口が歪む。

何故楽しいのかも分からぬ。

でも今楽しんでいることは確かで。

今ここで飛び掛かっていくのもいい。——が、布都はこの状況でもさらに言葉を交わしたくなつた。

「こういう高揚感は初めてかもしけん」

「お、そりやいい。ま、私は何度かあるけどな」

相手は鬼である。人の世で暮らしてきた者には遭遇し得ない体験もするであろう。

「そうか」

萃香は鼻を鳴らした。

「気に障つたかい？ だが人間相手には初めてだよ」

「ふむ？」

「妖怪や神に仙人。こいつらと喧嘩するのは楽しい。つええからな。でもただ強いってだけじゃあ、やつぱりちよつとなあ？ ——お前なら、もう分かるだろう？」

「まあ」

「そうそう。ここよりずっと北に妙な連中がいたんだ。そいつら人間のくせに強かつたんだが、やり合うとこれがまた楽しくないのなんの。最後の喧嘩がそれだから、人間とやるのはなんとなく気乗りしなかつたんだが、お前を見ているうちに気が変わつたよ」

「惚れたか？」

二度目。

「ああ、惚れさせてくれ。そんで、そのあとに飲もうぜ」

「生きていたら、だろう？」

「当然」

「そろそろ——」

「ああ——」

命を放り出すかのような戦闘だというのに、わざわざ合図をして互いに確かめ合つた。

手を取つて歩くのも、刃を交わし合うのも、そう大きくは変わらない。違いは形だけ。もつとも互いがその気であれば、であるが。だが

布都と萃香の両者はすでに諒解を終えている。

まず布都が動いた。

短く地を蹴り、距離を詰める。

対する萃香は身体を弛緩させたまま、布都の行動を待っていた。酒気のする吐息が心地良く、状況も合いまつて精神的高揚がそのまま萃香の集中力に繋がった。

どちらかが動かない限り戦闘にはおよそならないが、先に動いたのは人間の布都。

鬼か人間か、そのどちらかが仕掛けるといつたら、ほとんど人間からだろうが、この二人の場合は少し事情が違う。鬼や人間といつた種族ではなく、ただの個人の性格によるものでしかなかつた。萃香は興味を持つたものに対して、少し観察してから動き出す癖があり、布都是身を放るようにして対象を確認しようとするところがあつた。布都是、想像通りで終わつてしまふほど退屈なものはないと考えている。これの一番の対策は想像しないことであるが、無策ではすぐに潰える。布都是その狭間にいる。

駆け寄る途中、布都是息を吹いた。

肺で練られた靈力が、口から吹きだされ外氣と混じると火と変じた。それは萃香の視界から布都の身体を隠すには充分だつた。

燃え吹きあがる炎。

明かりが灯され、森の一部に光と影が出来た。

対する萃香は瓢箪の中身をくいっと口に含んだ。迫る布都。

合わせて萃香は口に含まれていたものを吐いた。

鬼を酔わす程の酒に、鬼の妖気。それらが練り混ざり焰と化す。

布都のそれは風船のよう。

萃香のそれは槍のよう。

いや、槍とするにはあまりにも強靱。その火は暗闇を強引に押しの

け、視界を焼くほどに周囲を照らした。

やぶれた風船は空気に溶け混じり、突き破つた槍は轟々と燃えさか

る。あまりの熱に、地面の草々が耐えれず縮こまり頭を垂れる。

その攻防の間に、炎に姿をくらませていた布都は萃香の側面、死角から迫っていた。

「つ——」

腕を振るう。

手刀。

限界まで研ぎ澄まされた靈氣。それは刀匠が幾年も掛けて打ち鍛えた刃のようにして手を纏う。

布都の判断は簡潔だつた。斬撃をいくら飛ばしても斬れぬ。ならば、直接斬る。

速度充分。遅れて気づいた萃香にはもはや避けることが叶わないだろう。

これが通じるかどうかで、次の攻めが変わる。

ところが萃香は防ぐ手立てを見せない。

不審ながらも、振るう腕を止めない布都であつたが、——気づいた。

萃香が拳を握つた。

攻撃と攻撃の交差。

すなわち、痛み分け。

——否。

死と傷は等価ではない。

だが、ここで引けるだろうか。布都の中にそんな思いがよぎる。

死の直前の刹那。

身体は本能を叫び訴えた。避ける、逃げろと。

意思是吠え猛る。引くな、行けと。

本能に準じるなら、そもそもこの戦いはしてはいけない。そもそも

も鬼に近づこうとしてはいけない。

布都は、叫びを探つた。

攻撃を止め、回避行動へと移行する。

両断せんと萃香曰掛けて縦を向いていた布都の手が、動きそのままで向きを変え手の平を見せた。刃状にあつた靈気が手の平に集まり、布都と萃香の間の空間を一枚の板を叩くようにして衝撃を放つた。

互いの身体が浮く。

萃香はわずかに。布都は大きく。

宙の浮きざまに、布都は足でも同様のことを行い、さらに距離を取つた。

——臆したのではない。  
自分にそう言い聞かせる。

あのままであればおそらく死、もしくは最低でも戦闘不能の状態に陥つていたであろう。

——適切だつたはず。

布都の眉間にしわが寄る。

——しかし、何故。

納得できていない。どこか引かかりを覚える自分がいるのか。理屈でなだめようとしても、それで理解しても、どこかしこりがある。そんな自分に戸惑う。

その葛藤を払拭するように、再度突っ込む。

強くなる悲鳴の訴えを無視して、猛る意思に添う。  
——もう出し惜しみはするまい。

布都の半身が黒く染まつていく。

先ほどと同様に、布都は近づきざまに息を吹いた。

違つたのは炎ではなく、霧のようなナニカであること。

黒い灰だか小蠅だか判断つかないものが、吹き出し萃香へと向かう。

「つ——」

ぎよつとした萃香だつたが、即座に回避行動をとつた。

萃香のいた後、その地点にあつた草木が一気に腐蝕したかのように、その形を崩した。

布都はもう迫つて いる。

回避先の萃香に、接近し、黒く染まつた腕を伸ばしていた。

萃香は向かい撃たずに、避けた。

穢れ。もしくは、世界から出た膿のような。形容しがたいものを感じさせる。

さらに追撃しようとする布都に、萃香は見せた。

腕つぶしだけではない萃香としての本領を。

萃香の姿が霧のように薄れていく。

「なつ」

布都の動きが止まる。

「わりいな。それはまずそうなんでね」

姿を消しながらそう言う萃香は、布都がどうやつて鬼を殺すことが出来たかを知り、驚愕と恐怖を覚えた。鬼同士で喧嘩するときでもめつたに使わない能力を人に使うくらいには。

「……どこにいる？」

これでは攻撃のしようがないと動きを止める布都に、萃香は答える。

「まあ反則みたいなもんだ。そつちのも見せてもらつたし、説明はするさ！」

布都は周囲を見回しながら、警戒を怠らない。萃香の気配をそこら中から感じている。

「私はあらゆるものとの密度を自由に操れるのさ。自分も含めてな」

布都は鼻を鳴らした。

「反則じゃないか」

「そうでもない。お前のそれを見たらな」

布都の半身を黒く染めていたものはもう引いていて、自身の髪色に似た靈氣すら漂いそうな白々とした肌に戻っている。

「だが、あまりおすすめはない。お前、もう長くないぞ。そしてその力をえれば使う程、残りの時間が大きく削られていくはずだ」「自分の身体のことくらい自分がよく分かつておる」

「だつたら何故そんな無茶をする?」

「焚きつけたやつが何を言うか」

「まあ、そうか」

布都は深い笑みを作ると、唇を舐めた。

「それに先ほど少し伸びたしな。鬼というのはたいそう美味なるものであつた」

「で、私も喰おうってか？」

「涎が滴るほどに」

「目が悪くなつたかな？ 見えないが」

「ならばさつさと姿を現して、目ではつきりと見るがいい」

「そうさな、気が向いたらな」

ただ乗り気じやない、というよりは何かある。

「よもやそのまま去る気ではないだろ？」

「そなんだがなあ。どうにもなあ」

「臆したか？」

「ま、そうなるな」

「認めるのか？」

「さすがに死ぬかもしれんし」

「覚悟の上じやないと？」

「いいや、そういうんじやない。ケンカつてのはそういうもんだつてのは重々承知だし、だからこそ楽しい。でもだからつて、命を捨てるのは面白くない」

「面白くない？」

「死んだら楽しめねえだろ？」

「まあな」

「その塩梅が、意地を探るなつて方に傾いているのさ」

「ふむ」

姿を現さない理由。なぜそのまま仕掛けてこないか。

布都は答えにたどり着いた。

氣乗りはしない。そう思いながらも、布都の塩梅は意地に寄つていた。

布都は大きく空気を吸うと、体内に溜めた。

布都の半身が黒く染まる。

染まる部分が、回数を増すごとに広がつていくのを布都は知覚している。

「おいおい、またかよつ」

何かする。と、霧状の萃香は警戒を強め、布都から離れるも——。

周囲に黒い霧が急速にまき散らされ。わずかに汚染される。

ぞわりと、氣味の悪い不快感を自身の一部から感じると、萃香はその部分を自分から切り離した。繋がりを失つたそれはただの粒子となり、萃香は肉体の一部を失なつた。

引くのが遅かつたと後悔する萃香だったが、これで終わりと決まつたわけではない。次があるかもしれない。後悔するのは後でいい。自らも病む致死の猛毒。何故その当人が生きているのかさえ怪しくなつてくるほど。

夜の森。立ち込める黒霧により、視界は皆無に近かい。

未来はまさしく未知。暗雲轟々として先は見えずとも、高揚感は増すばかり。今、この一瞬を刻々と――。

## 第20話 灰銀

闇の濃霧は突如として晴れた。

閃光が走り、触れたもの全てを光に染め上げていった。

月光より激しい潔癖な力の奔流。

全てを侵してしまった禍々しさがあるのなら、全てを拒絶してしまう清らかさもある。

よく似ているのにひどく違っていた。

閃光が去ると夜の森が戻った。

正も負もない。ただの壊れた自然。

虫の音すら聞こえない静寂の間。そこには人と鬼だけが息をしていた。

身体を霧状から肉体に戻した鬼が言う。

「色々と反則だな。どうして成り立っているか、今その理由を知る必要はないけどさ。しかし、興味は尽きないな」

布都が答える。

「肉体を霧のように出来るのもよっぽどであろうよ。さすがに人の身では無理がありそうだ」

と、自身を人の身と称した布都は、極限まで高めた靈力により全身が光り輝いている。透けるような白い肌は、もはや本当に透けているのではないかと本気で疑つてしまふくらいに生気に満ちていた。月光を集めて形作つたような、そんな肌。裏を返せば、そこまでしないといけなかつたということにもなる。自らの毒に侵されないためにも。

「——ま、実は私にも反則技つてのはあるんだけどな」

萃香はそう言うが、鬼の段階で人にとってみればすでに反則であり、そのうえその能力もまた充分に反則であるといえるわけだが。まだあるのかと、布都は諦念混じりの想いが湧いた。

「——でだ、何度も見せたように集めたり散らしたり出来るわけなんだけど、それって別に私の身体だけじゃないんだ」

「うん?」

言葉の意味は理解出来るが、いまいちピンとこない。

「ま、全部言つちまつたんじや面白くないだろ?」

「要是体験に勝るものなしど」

「そういうこと」

——だが。

それで死ぬ気もない。

布都は聞いてみる。

「それは致死なるものか?」

「ああ。おそらくな。でも、それ自体はそうじやない。だが限りなくそれに誘うものだ」

「なるほど。相分かつた」

事前運動として、身体を少し動かす。

「じゃあ、タネあかしといこう」

必要なのは度胸と理性。

暴くは死と生の道。

それには何よりもまず歩いてみると、布都是前へと駆けた。

直進、——ではない。左右に飛びながら進む。

相手を惑わそうとする。これは、即座に前へと詰め寄ることが可能であると、互いに認知し合つてゐるから意味のある動作。そしてその後に必殺へと繋がる攻撃手段を持つてゐることも。

萃香は警戒せざるを得ない。

駆け引きとは相手に打撃を与えるものがないと成立しないものである。

——芸が無いのは好かん。

ただ飛び掛かるだけでは、迎撃され、人の身ではそのまま戦闘不能になる。これまでの二回は、炎を吐いたりと目くらましをして虚を突いて近寄つたが、また同じというのは面白くない。面白くないどころか、対応されて手痛いことになるかもしれない。鬼の一撃という負うリスクはあまりにも高い。

攻め手が決めきれない布都是、次第に萃香の周囲を大周りに回り始

めた。近づきすぎると、危ない。が、距離を離したところで有効打はない。

対する萃香は動かない。

訳があつた。

布都が見せた例のものを警戒している。布都のアレは、萃香を充分に警戒させ、軽はずみな行動を許さない抑止になつていた。

よつて萃香は、布都の動向を注視している。

こうして生まれた膠着であるが、布都にとつてこの状況は絶対的に不利だつた。

鬼と人、その体力も歴然。それも今動き続けているのは布都である。そのうえ、先ほどの攻防で布都是命を大きく削るようなことまでしている。それだけでなく、そもそも布都にとつてこの戦いは連戦である。それも鬼との。

——どうする。

布都に焦りが生じる。

多少動き回つたところで、萃香の認識からは出られそうにない。それは実際に萃香の背側に周つた時に感じた。

突破口が見つからない。

とはいえ、何かはしなければならない。

——やるしかない。

布都は仕掛けた。

萃香の死角から飛び上がり、萃香の上空へ。

布都はその動きを、萃香が把握していることは分かつている。  
しかしそれでも、どうにかしなければいけない。  
策は——。

「それで、どうするんだい」

迷いも何もかも見透かしたような言葉が布都に耳に入つてくる。  
手の平の上で踊らされているような気がして、相当に腹が立つが、  
ほかに案がない。

全力でやるのみ。

布都の全身が高まつた靈力でさらなる光を帯びる。

萃香の頭上、そこから真っ逆さま、頭を下にして手を伸ばす。

まるで稻妻のよう。布都は地へと急降下した。

着地、——同時に布都の手の平から伝わつた力が電気が走るようにな地面を割り、その隙間から炎が噴き出させる。

地を蹴り、距離を取る萃香。そのまま宙へ。

当然のごとく避けられた布都であるが、分かつていてことなので焦りはない。

すぐに次の行動へと移す。とにかく攻め立てて突破口をつくらなければならぬ。

靈力を練り上げ肺に集め、吐き出す。

水弾。

人一人分くらいは飲み込める水の塊が萃香へと向かう。  
その速度、それなり。遅くはなかつた。——が、萃香は余裕をもつて避ける。

余裕を残しつつも、萃香は警戒を解いていない。

もし何かしらで動きが封じられる、もしくはそれに類するようなものがあれば、死ぬこともあります。現状の余裕は全てその予期せぬ何かに備えている。実際、布都の繰り出している攻撃は鬼にとつては有効打にはなり得ないものだつたが、それでも警戒を続いている理由がそれだつた。

地が割れ、木は腐り枯れ果て、土草は焦げている。

その全てが布都がやつたものであるが、一顧だにしない。

布都は、とにかく攻める。

水弾を吐き出したと同時に、飛び寄つていた。

最中、手を振りかぶり、萃香に到達するタイミングを見計らつて振り下ろす。

が、水弾を回避し布都の動きを注視していた萃香に、やはり距離を取られる。

それでも、さらに詰め寄る。

思考が介在する間もない速度。引かれればその分寄り、そしてさらに寛ぐ。

追い抜かんとするほど。

時間がない。

少なくともこうして全力で戦える時が。

焦燥の中、布都は急きたてられるように攻めた。

しかし、酔つてふらついただけの動きに見える動作に避けられ、苛烈に攻めようとも霧のように四散され、中々捉えられない。

——おのれ！

業を煮やした布都は、全ての力を足に集中させ、萃香に体当たりをするがごとくに突貫した。

ブラフもなにもない。全てを前進に注いだ。結果。

捉えた——ようを感じた瞬間、月が見えた。その瞬間、時の進みがゆるやかになつた。視界が回転する。意識はまだそのゆるやかな時にまだあつた。

身体に強い衝撃が伝わり、ようやく意識が現在に追いついた。木を背もたれに、地面に座つているように体がある。

状況は分かつたが、それしか分からない。

いまいち動かない思考を捨て、立ち上がるうとする、——も、足が、手が、思うように動かない。

——な。

ここでようやく痛みを感じた。

額に強い痛み。

記憶を辿る。

あの時、萃香の指が見えていた。

弾かれた中指。それが額へ。

——ああ、そうか。

脳への衝撃により回復しきれていない思考で、ようやく布都は現状を理解した。

「効いたみたいだな」  
けらけらと笑いながら萃香は言つた。  
続ける。

「言つただろ？ 反則は持つてるつて」

布都にはその反則が分からぬ。

今まで見たものを利用されただけのように思えるし、またこの失敗は自分が突つ込みすぎた結果だろうと思っている。

「萃密つてさつき言つたけどね、別にそれつて私の体だけが対象じゃないんだよね」

萃香はふふっと楽しげに笑つた声が聞こえる。

「人の意思だつて集めたり散らしたり出来るのさ。——例えば、どうやつて攻めようかと思つてるやつの意思を散らしてやると、そいつには迷いが生じる。逆に集めてやると、だんだん攻めることがかりに注意が向く。後は言葉や行動で誘導してやれば、術中に綺麗にはまる」

萃香は得意気に話す。

「こうやつて種明かしをして、まつたく問題ないくらいの反則だろ？」

布都は返事をしない。

「鬼と喧嘩する時にだつて、ほとんど使わないんだぜ？」これ。勝負が面白くないうえに、鬼つてのはどうも腕つぶしでぶつかり合うのが好きなやつが多くてどうにもウケが悪いんだ。でも、私はそうは思わない。例え搦め手だろうがなんだろうが、そいつが真剣にやつてりや、それは称賛に値すると思うし、やっぱり敬意を払うべきだと思うね。そういう意味では、さつきお前が殺つたやつとは、意見が合わなくてねえ。——喧嘩つてもんはそうじやない。そいつの持てる全てをぶつけ合つてこそじやないか。そう思わないか？」

布都は動かない。

万全に動けるためには少しだけ時間がいる。

ゆつくりと呼吸を繰り返す。一つ一つ意識して、ゆつくりゆつくりと。呼吸により氣を取り入れ、身体のすみずみに送り込むように。

諦めたから、動かないんじやない。動けないから、動かないんじやない。

次に動くために、動いていないだけ。

萃香の長話をこれ幸いと、回復の時間に当てていた。

「で、どうする？ 続けるか？ ——つて、そりや失礼か？」

その通りだと言わんばかりに、布都は立ち上がりうとする動きを見せた。

脚に入力入れ、地面を押す。

布都の身体はふわりと持ち上がり、——前のめり。全身が地に伏した。

——な。

回復した。そう思つた。

だが布都は、焦げ混じりの大地の匂いを嗅くことになつた。

——ここが限界なのか？

夜の森。焼け焦げた地面、そして遠巻きに囲む緑。

吹き飛ばされた布都は、ちょうどその境にいた。腰より上は不毛の大地、腰より下は緑。

——くそ。

限界という言葉を出してしまつた自分に苛立つた。それに屈してしまえば、それこそそこが限界になつてしまつ。多くを逸脱した自分が、その枠を、蓋を、自らこしらえようとするは何たることか。それが——。

——物部布都であろうか？

布都は肘を立て、地面に突き刺さんばかりに押し当てた。体を起こし、もう一度鬼の前に立とうと。

——つぐ

地面を押す力は悲しいほどに非力で、わずかに上体を浮かせただけにとどまつた。その後の再び地面に接した衝撃で思わず苦悶の声が出てしまうほどに、肉体は弱つていた。

「やめとけつて。寿命がさらに縮まる」

布都は諦めない。

ここで折れてはいけない。

布都是その一心で、また起き上がるうと——。

——ああ……。

腕が、肘が、上がらない。もうその力も残っていないようだつた。  
もう倒れている事しかできない。

うつ伏せ。なんとか首をわずかに動かし、右に向ける。  
視界が少しひらけ、息も軽くなつた。

「良いさまだと思うぜ？　あ、侮辱してるわけじやないぞ？　本氣で  
思つてる」

声色からそれは分かつた。

「それでも、それでも——つていう、お前の強い意思の表れ。でもその  
意思でもどうにもならないくらいの肉体の限界が訪れた。これは仕  
方がない。生きてるつてのは、肉体を持つてるのは、そういうも  
のさ」

言つてることはよく分かる。でも、それでも——とさらに思つて  
しまう自分と、それを諦めさせようとはしたくない自分を、布都は自  
身の中でせめぎあつてゐるのを感じてゐる。ただ、肉体はもう動きそ  
うにない。

もうこうやつて考へて考へていることしか出来ない布都だつたが、それの  
終わりも感じ始めてきた。視界が次第にぼやけていく。霧がかかつ  
たように、視界もぼやけていく。目が覚めた時、はたして自分が自分  
であるか保証がない。——また、その危惧さえもぼやけていく。

薄れゆく自己。布都は視界の先の先。置き捨てられていた骨董品  
に目がいった。この状況で何故、そう思うこともなく、ただ目に入つ  
たそれを意識、思考の中へと入らせた。

——名も知らぬ。

一振りの剣。

物部を出る時に渡されたもの。

——色々あつた。

物部の人間に、蘇我の人間。様々な人間がいた。そのどれとも心を  
引かれるようなのは、いな——わけでもなかつたが、それが今なん  
だろうか。

初めは兄の守屋だつた。総じて優秀である。そんな評価をしてい  
た。現実的かと思えば、理想的だつたりして、かと思えばやつぱり現

実的で、と印象をなんども更新した。小さなころは、そんな兄から特別構われる自分がどことなく誇らしく感じたこともあつた。でも少しづつ成長し、見える世界が広がるにつれてそれもどこか空虚に感じていった。気づけばすでに山頂に立っていたような、その登る楽しさも辛さもしらぬままそこにいた。おそらく兄も似た様に思い、自分に目をかけたのだろうと思った。結局のところ、人の中にあって人の中には居なかつた。そんな同士だつたのだと。でも少し違つた。自分とは違つて兄は人としての活力に溢れていた。そう、自分とは違つて、喉が渴いて仕方がなかつた。

「——お、おい。立つて大丈夫なのか？」

次は蘇我馬子だつた。

これもまた同士だと思つた。渴きを覚えているところも同じだと、そう思つた。でも少し、いや根本的なところが違つた。馬子という人間は、つまらないなら面白くしてやろうというそういう気概があつた。自分にはまったくなかつたそういうもの。渴きを癒やそうと血に濡れて、本質的な飢餓から目を背けようとした自分とはまったく性質が違つていた。

「……その剣、大事なものだつたのか？」

そして屠自古。

特に目立つた才は思い浮かばなかつたが、何故か一緒に居ると楽しかつた。その時だけは、自分という人間が一端の人間であるかのように感じて、認めづらいところはあるも、正直嬉しいと思つた感情は否定出来なかつた。あれだけ喜怒哀楽を素直に外へと表すことが出来たら、どれだけ幸せなんだろうかとそう思つた。

「お前、意識がないのか？」

満たされることはどういうこと何だろうかと、考えたことが何度かある。その都度答えを出そうと苦心するも、どうにもしつくりいかなかつた。全力で走つて摩擦で燃え尽くるようなものだと思つたこともある。生死の狭間、極限の境。そこはたしかに燃えるような感触があつた。でも、鎮火してしまえば何てことはなかつた。ならば、常に燃やせばいいと思って、炎の中に身も心も投じたこともあつた。が、

思い通りの結果は得られず、外皮だけ燃えて痒い思いをするだけに終わった。その後蘇我に来て、言葉に上手く表せない心の感触を覚えて、こういう満たし方もあるのだと思った。それは酷く悲しいほどに幸せで、あまりにも空虚だった。満たされる、その瞬間から抜け落ちるような、説明の出来ない矛盾のような錯誤。自分は、自分が自分が自分が自分が分からなくなつた。

でも、我はここにいる。

「そのナマクラでどうしようつてんだ？　おい、来るなら迎撃すんぞ？　いいのか？」

どうしてこんなところにいるのか。そんなのはもう分かつた。よく分かつた。ただ幸せになりたかつただけだつた。我は、私は、幸せこそ、一番に求めていた。心が満ち足りて、身が躍るような幸せを。自己を強く規定して意識しようと我などと自分を呼んだが、おそらくそれは自分がいうものが雲ほどに掴めないと気づかないままに思つていたからだろう。

ああ、そうか。なんだ理解出来たじやないか。

満たされるということとは――。

「お、おい！　いいのか？　本当にいいのか？」

我は我を思う。身体の訴えも、意思の訴えも、その両方を受け取るものも。およそ考えた先にはない。思考せずともここに在る。ただ我を感じるだけで全て結する。

――そういうえば身体が軽い。意識も今までないくらいに透き通っている。邪念がないからだろうか？　いやそもそも邪念というのはない――。

「つと、つい考えてしまつたな」

「意識あるのかよ！　てかおい、これ以上近づけば本当に攻撃するぞ！？　いいのか！」

視界は良好。景色はいつもと変わらずとても流麗。木々がその生命力を誇り、草木も負けじと生い茂る。空は闇にして、その生命力を失わず輝々とそれを示す。月は魔性を帯びながらも、その神秘さを地上へと光として届けている。

空気は冴え冴え、纏わり憑くようにして世界に寄り添っていた。

布都は空気と混じり合ったように、前へと進む。

それは萃香の意識の範疇を超えた。

気づいたら目の前にいた。それが萃香が感じた布都の認識だつた。

「つわ！」

布都是”ナマクラ”を振るう。

名も知らない”ナマクラ”。しかし、それが何であろうか。思えば自分もそうではないかと。人が名付けた名前は、文字通り人が名付けた名前。それが自己を規定するものではない。自己はあくまで自己。自己と他者と区別をつけるために付けただけのものにすぎない。

こんなナマクラ。何故兄上は物部を離れる自分にわざわざ渡したのだろうと思う。おつと、考えてはいけない。どこまでも思い、想い、我を自己を私を——薄く消え去っていくのだ。

満ちていく。

我が身は我であり。また、我が心も我である。すなわち、我的持つ剣も、衣服も、周りの全てもまた変わらずに我であろう。そうである。

身が皮が、突き破られ、我が飛び出した。

そう、これこそが物部布都である。

「私は物部布都。言わねばならぬ理由もないが、そう宣言する方が親切であろう」

「……お前」

消え失せたはずの自己が轟々と唸る。

魂の絶頂。高揚感。

場の全てが歓喜し、迎える。

「ここが遠くも目指した頂きである。心して掛け。幸福の絶頂ぞ」手に持っている剣を振りかぶる。

名が無いのなら我が付けてやろう。我的剣それで充分であろう。恰好をつけるのなら布都御魂剣か？<sup>フツノミタマノツルギ</sup>

萃香は今までに覚えの無い恐怖を感じ、すぐさま飛び退った。

理解が追いつかないが、とにかく触れてはいけない。”ナマクラ”

にそう感じた。

理解は本当に追いついていなかつた。

萃香は目視した。認識した。けれども理解するまでに、何故か絶対的な遅延を感じた。

世界が布都を後押しするかのようになると空間を通つてきて近づき、剣を振り下ろす。確實に認識していたのに、理解が遅れる。慌てた頃には、もう剣は通過していた。

フツ。

そんな音が耳に届いた。

「それ、死ぬぞ？」

萃香は気持ち悪さを感じた。まるで自分の中に異物が入つたような気持ちの悪さ。何なのか分からないうが、それに物部布都を感じた。仮にも鬼である。研ぎ澄まされた剣だろうが、靈氣で強化ようが、傷を負うことも難しい頑強な皮膚である。それが何も細工もないような”ナマクラ”に抵抗なく寸断されるなどありえない。

が、そのありあえないが目の前どころか自分の身で起きた。

「つおい、おい」

萃香引くことしか思い浮かばなかつた。いや、正確には考える間もなく、勝手に身が後ろへと退いた。ケンカというのは身と身、心と心、それらがぶつかつて当り前。そうやつて楽しむものだと思つていた萃香が、その全てを恐怖により拒否して退いた。

剣戟の類なら、例えもあり得なく斬られたとしても霧状になれば無効化出来る。しかし、さつきの剣戟、いや剣戟なのかさえ怪しいものは、斬るというよりかは、……そう、割り込まれた。自身に他者が割り込んできて、そのまま通り過ぎていつた。そんな感触だつた。触れた地点は、もう無い。霧状にして戻すことが叶わない。すなわち、斬られる度に自身を失う。

萃香は頬に伝い落ちる滴を感じた。

——冷や汗つてやつか？

萃香はその滴を指でぬぐつた。

「……いや、そうだよな。全てをぶつけてこそケンカだよな」

意地がある。萃香は、およそ初めての死の危機に腹をくくつた。死に繋がる可能性があるケンカは幾度となくやつてきた。だが、死に直面するようなケンカは初めてだった。

ここで逃げるなんて今までの全てを捨てるようなものだ。そう思つた萃香は死へ繋がる底へと身を投げた。

「私も醉狂でね。今まで最高にわくわくしてゐるよ」

恐怖の混じつた笑顔。でも、間違ひなくそこには歓喜もあつた。

「——行こうか」

「——ああ」

萃香は本気を出した。

散じていた自分を全て一身に萃める。身が木々を優に越し、山へと到ろうする前に集まりだし、凝縮され、元の身体になる。

気が溢れんばかりに充溢し、鬼の身体といえどもはち切れんばかり。

「中々」

そう口にした布都には、怯えもなくば勇ましむ意思もない。

ただ前へと進み剣を振り上げる。

「おう」

答える萃香は、来る布都に目がけて剛腕を振りかぶる。  
交差する刹那。

布都は身をよじり、萃香の腕を躲す。

——が、暴的な圧は避けられず、左肩より先が吹き飛んだ。

衝撃を堪える暇もなく吹つ飛んだおかげで、布都はその刹那の間に剣を振り下ろし、剣先を萃香に当てることが出来た。

その後、遅れてきた衝撃に全身が包まれ、布都の身体は飛ばされた。最中、布都は灰銀の輝きを見た。

## 第21話 様々な

屠自古は見慣れた床の木の節をじつと見ていた。他にすることがない。というより、したいことがない。そんなわけで見飽きた床をじつと見ていた。

そんなところに、

「——屠自古」

扉が開き、思わず期待いっぱいに振り向いたが——。

「ち、父上でしたか」

「おや、誰か待っていたのかな?」

「いえ、そういうわけでは……」

尻すぼみになる声。

素直になり切れない素直な子どもとは可愛いものである。

馬子は、膝を曲げ屠自古と同じ目線になると微笑んだ。

「安心しなさい。彼女は屠自古のことを嫌いになつたわけじやないのだから」

「父上、わ、私はつ」

屠自古は慌てふためいた。

別にそんなことを心配したわけじやないとはつきりと言いたかつたが、言葉に出来なかつた。言つてしまふと、もつと遠くに行つてしまふような気がした。

「んん? 続けて『らん』

催促される。

でも、今の気持ちを言葉にしたくはない。

「別に何でもないです」

「本当にそうかい?」

「もちろんです!」

はつきりと答えてやつた。

だいたいなんでこんな目に会わなければいけないのか!

布都のくせに! 布都のくせに!

「ま、好きにしなさい。——それじゃ、私はもう行くから」

「え、もう行くのですか？」

「これから政務だ。その前にちょっと顔を見に来ただけさ」

「そうですか……」

ああ、またつまらない毎日が始まる。

同じものを見ているはずなのに、何か違う。

屠自古は馬子を見送ると、目を閉じて天を仰いだ。

色は薄く淡泊で、音は乾いていてもの悲しい。

どうしてここまで違うのだろうと、屠自古は上げた顔を下げた。



物部本邸。

そういうところがあるので、まさか何者が襲つてくるとは誰も考へない。それでも見張りはいる。必然、やることなど口クにない。

よつて、門兵は緩んでいた。槍を重心を託して、雑談するほどに。

「——おい、聞いたかよ」

「何がだ？」

「うちの姫様。いや、元姫様だけど」

「ああ、その話は俺も聞いたぜ」

人とはうわざ話が好きものである。

「しばらく姿を見せてないらしいな」

「そうそう。もしかして、蘇我のやつらに消されたんじやないかって上が話してるのを聞いたぜ」

「いや俺もすぐにはそう思つたが、あの姫様がそう簡単に消されるたまかと思うとどうにもなあ」

「そうか？ いかに姫様が凄かろうと、敵の真ん中にいたんじやどうにもならんだろう？」

「ああ、お前はあの遠征にいなかつたんだっけか」

「つていうと、あれか？」

物部ではあの遠征といえばすぐに伝わる。

「そう、あれだ。あの場であれを見たやつは、姫様が消されたなんて言  
われてもそう簡単には信じられないぜ？」

「うーむ、それほどなのか？」

「そりや凄いといえば贊個様もいるがね。でも姫様はそれとは少し  
違つた感じがしたよ」

「まあ、なんか地に足が着いてても浮いてるような方だつたが」「  
「それもそうだが、なんて言うかその、……上手く言えねえな」

「おいなんだよ」

「仕方ねえだろ。一応立場もあるんだ」

そんな門兵がいる後ろ、中央の屋敷でも同一人物について話がされ  
ていた。

部屋に二人。

贊個は守屋に訴えた。

「兄上、煙の無いところに火は立ちません。これはきちんと姉上の所  
在を確かめる必要があるのでは？」

「では蘇我を疑うというか？」

「そ、そういう訳ではありませんが、念のためということで……」

「あいつの放浪癖など、前からだろう」

「前とは違います！ 姉上は今蘇我の身の上です。その身の所在が分  
からないとあれば、必ずや周りの者たちがあらぬことを考えます」

「今のお前のようにか？」

「私は、別にそういう訳では」

「ではどういう訳だ？」

贊個は、少なからず瞠目した。

兄と姉は共に仲が良さそうだったというのに、どうしてこうなの  
か。心を掛けていないようにしか見えない。

「答えぬか？ お前はあいつのことを分かつておらん」

「……それはどういう意味でしようか」

「言葉のままだ」

そう言われると、言えることが出ない。

そんな贊個に、守屋は続ける。

「だいたいお前のお遊びからすると、お前はあいつの無事を信じていないとおかしいのではないか？」

「つ——。信じています！　ですが、いやだからこそ、確かめねばいけないとそう思うのです」

「まあ、これ以上は言わん。無駄であるからな」

守屋は話を切り上げた。

「とにかく余計なことはせずにあることだ」

贊個は従うしかなかつた。



時は流れる。

身も心も絶えず更新され、移ろいでいく。

「屠自古、少しいいかな？」

屠自古のあてがわれた部屋にやつてきた馬子は、声色の読ませない声で中へと語りかけた。

「返事がないようですね」

「寝ているのかもしれない」

同行人と話す馬子。

二人だつた。

「せつかく来てもらつたのに、悪いね」

「いえ。——ああでも、それこそせつかくなので顔くらいは拝もうかと

「じゃあ——」

「はい」

扉を開けると、屠自古が机につづぶすような形で寝ていた。柔らか

な頬が机に負けている。

「これはこれは大変可愛らしい」

「自慢の娘でね」

「ええ、これは自慢したくもなるでしょう」

静かな寝息。普段は可愛さが大きいに勝るが、黙っているとふと貴族らしい美しさを感じさせる。

口がわずかばかり開かれる。

「ううん……、ふとお……」

馬子は少し目を大きく開けると、眉間にしわを寄せ目を細めた。

「……失敗したかなあ」

「馬子殿？」

「失礼。気になさらいでいただきたい」

同行者にとつては、初めて見る馬子の表情だった。いつも怜悧さに笑顔を蓄え、隙が無いのに親しみやすいという、ある種の完成された顔をしていた。でも今見せた表情は、ひどく人間臭いものが含まれていた。

「——とにかく、今日はどうもありがとうございました。とても可愛らしいものも見れて、しばらく幸せにすごせそうです」

「それは良かつた。今度はちゃんと意識のあるうちに連れしよう」

「いえ、顔は憶えたのでそれにはおよびません。しつと無関係を装つて親しくなるのもいいかもしれない。寝言の人物が誰かは分かりませんが、私が屠自古の一番になつてみせましょう」

馬子は笑った。

「それは楽しみですね。願わくば、もっと楽しいことになればいいのですが」

同行者は頭を下げ、礼を示した。

「では、私はこれで」

「ええ。体には気をつけて」

「はい。そちらこそお気をつけください」

去る同行者を見送りながら、馬子はふと一つの言葉が浮かびそれを口にした。

「言い忘れていましたが」

「はい？」

振り返つて目が合う。

「泣かせたら酷い目にあうかもしませんよ？」

「おお、それは怖い」

笑つて返す同行者だが、

「そうでなくとも、そんな目に合うかも知れませんがね」

「ほお？」

「少なくとも、私はそうなることを願つてているのです」

馬子がまた人間臭い表情を出した。

「つと、引き留めて悪かつたですね、廐戸殿」

「いえ、貴方のお話ならば是非というとこ」

同行者、廐戸皇子は去つていった。



山は見上げるものであり、また登るものでもあつた。  
そして登つたあとは、その結果を誇らんとばかりに景色を見下ろす  
もの。

「どうだ良い眺めだろ？」

「雲が下にあるとは、少し驚いた」

「だろう？ 普段上にあるものが下に見えると、気分の良いものさ」

「はて？ 雲が我の上にあるとはおもつておらぬが」

「物理的な話をしているんだよ」

「それは悪かつたな」

「まったく。ノリが良いのか悪いのか判断が付きづらい」

「ノリは良いが、他者をからかいたくなる性質と言えばいいか？」

「ああ、その通りみたいだな！」

景色がつまみだと言わんばかりに、二人は飲んでいた。鬼をも酔わす酒ともなれば、人の身ではひどく辛かつたものだが、次第に慣れていった。

「なあ、布都。お前はこれからどうするつもりだ？ 鬼ともケンカ出来る人間なんて聞いたことねえ」

「特にはないぞ。ずっと、ずっと、前からな。ただ何となく生きてきた。せめて楽しい思いくらいはしてみたいと、それくらいだ」

「なるほどなあ……」

「酒に酔うような快楽とはこれを突き詰めたものだろう？」

「そうだけど、ちつとばかし違うかもな」

「ほう？」

「いや、私にも上手くは言えねえんだが、なんか足りねえって感じかな？」

「ふむ。ならば、その足りないを見つけるのがこれからのおの目的であるな」

目的なんて無くても生きていける。だが、それが無くては人生に彩りが欠ける。

「ならば私は近いうちに人の世界に帰らねばなるまい」

「お前がそう思つたのなら、きっと探し物はそこにあるんだろうよ」

「というより、久しく見ていない顔に会いたくてな」

「お、そいつ強いのか？」

「ただの人間」

「なんだよ」

「だが、我の娘である」

「え、お前子ども産んでたのかよ」

「義理だぞ」

「？ よく分からん」

「人間には色々あるというやつだ。とにかく可愛くて可愛くて仕方がないのだ」

「へえ？ それじゃその可愛いやつとずっと離れているお前は、今は

そいつが恋しくて仕方がないわけだ？」

布都はほがらかに笑つてみせた。

「どうにもそのようであるぞ？ お主との旅も楽しかつたがな？」

「おいおい、私が嫉妬したみたいにするなよ」

「おお、これはすまん。存外、我、モテるようでな？」

「つけ」

萃香は分かりやすく吐き捨てた。

「ん？ つてことはだ」

萃香は意地悪を思いついた。

「そういうえば人間といえば、雄雌でつがいを作りたがう？」

「そうであるが？」

「じゃあいづれその可愛い娘もつがいを作るわけだ？」

布都は、二度、三度、瞬いた。

言つてる意味が理解出来ない。いや理解出来ているけれども、受け取りたくなかった。

それにより遅れて返事をした。

「屠自古は可愛い。それは間違いないが、だからといって他のやつが、いや、なんというか、あれだ、そんなやつが現れたら、その何だ？ うん、――潰す」

「わお」

「生まれてきてしまつた大失態を悔いてもらうしかない」

真顔で言う布都であつたが、そこまで言い終わるとまたほがらかに笑つた。

「つま、そんなことはあり得ないとと思うがな!!」

そんな台詞を残して。

## 第22話　帰郷

萃香と別れた布都はゆるりと人の世界へと戻ってきた。

向かつたのは蘇我の屋敷。

道中、かなりの多くの視線にさらされた。

——無理もない。

かなりの間、姿を見せていなかつた。それが物部の姫であり、蘇我馬子の妻という存在であれば当然というもの。

とはいえ付き合う気なんてさらさらなく、視線を無視して歩き、屋敷に着いた。それからも注目は終わらない。えらく驚いた顔の門兵をしり目にして、そそくさと自室に向かう。いくら視線は気にならないといつても限度がある。鬱陶しいと思うのは避けれない。むすつとした表情で歩く布都。

自室に入ると、匂いがした。

——これは。

鼻の奥から脳天、そして身体の中心にまで、酸いというと違うけれども似たような感覚が走る。

——懐かしいのか。

ふと、物部の屋敷に行つても同じように感じるのだろうかとも思つたが、もう出歩く気にはなれなかつた。部屋の空気が身体の隅々まで行き渡ると、途端に気力の全てが沈静化し睡魔を覚えた。それはこの空間と同一になりたいと思うほどのものだつた。

布都はさつさと寝具を用意すると、そのままするりと夢の世界に入つた。

これは一種の至福であろう。夢の入り口で布都はそう思った。いや、極楽と言つた方が良かつたか？　と、好きでもない仏経典での知識を巡らせながら……。

蘇我の屋敷は当然大騒ぎになつた。

死亡説や誅殺説、様々あつたわけだが、当の本人はひよっこり一人で帰つてきている。当然騒ぎにもなる。

とはいへ、そうそうに部屋に籠つた布都に会いに行こうとする者はいない。用事という用事もないし、正直に言つてしまえば少し怖いというのもあるだろう。普通ではないといふのはそういうことである。ただまあ、例外というのはいるもので――。

知らせを聞くやいなや部屋を飛び出した者がいる。

その者は思考がぐるぐると回つている。

思えば、屋敷内で走るなんてことはもう無くなつていた。周りの視線、礼儀や品に意識がいくようになつてきていた。それでも走り出した。あれこれ考える前に、体が勝手に動いた。気持ちが背を押すではなく、気持ちが胸ぐらをひつつかんでも身体を動かしたかのよう。

一日散。部屋の前に着くやいなや、扉を横にすつとばす。

「——布都っ!!」

いた。

ただ、寝ていた。

屠自古にとつてはそれは少しの安心を覚えさせるものだつた。心の準備など出来てゐるはずもなく、ただ衝動で駆け出していた。何と言えば、何を話せばとか。相手は何思つてゐるのだろうかとか、自分は忘れられたわけではとか。そのような事が言葉になる前のぼんやりした状態で屠自古の脳裏を駆け回り、確かめたくない怖さの中でもただ会いたい見たいという一心で駆けていた。

「……布都?」

屠自古の見た布都は、前と変わりがなかつた。すやすやと寝具に身をくるんで寝ていた。時はある程度経つたかのように思われたが、それでも布都に変化は見られなかつた。といつても、見たことがない布都を見たには違ひなかつた。

目を閉じ黙つて寝ている布都は、どこか神聖というか生氣がないというか、そんな不思議な感触を抱かせるものだつた。

起こすどころか、触れるのもためらわれるその様。

屠自古は少しの間見つめた後、踵を返すしかなかつた。

そのあと父の所へ行き、事の顛末を語つた。

「寝ていて、話せませんでした」

「疲れているんだろう。起きるまでそつとしておきなさい」

「……はい」

屠自古はひとまず頷くことにした。政務で忙しいところに押しかけてきているわけである。そのくらいの分別はついている。

そして立ち去るその寸前。

「ああ、そうそう。明日は例の人が屠自古に会いたいって言つてたらから、空けておきなさい」

「はい。——て、父上つ？」

「うん？」

「その、例の人つて……」

「君が都をぶらついている時に絡まれた時に助けてくれたあの人だよ」

「し、知つておられたのですか」

「私は全てを知つているんだよ」

「父上が言うと冗談に聞こえません」

馬子は笑つて流した。

屠自古は知る由もないが、その全てが仕組まれたことである。仕組まれたというと策略的であるが、実際は当事者の一人である廻戸皇子が企画した演出というやつである。馬子はそれに乗つただけ。

「じゃあ今日はもうゆつくりしておきなさい。明日にそなえてね」

「はい、こうします」

屠自古は自室へと帰つた。

時というのは流れるものである。

緑が茶へ、茶が緑へ。

時などというのは人間が勝手に感じているものであるが、人間がい

なくとも大地は芽吹きを繰り返す。人間なんてものはその上にいるものでもなければ、ましてや下にいるものではない。単純に共にあるものである。時の移ろいに合わせて芽吹いて咲いて枯れゆくものである。その流れに則していらないのなら、自然の中にはいない。つまるところ、人間ではない。妖怪、それとも神、もしくは仙。

「ううむ」

目覚めた布都はうねつた。

長い夢を見ていた気がする。

全てが溶け込んで自らの正体も分からなくなつて、でもそれを知覚している自分は在るというような。時の中にいるのに、時の中にない。妙な感覚。

起きると全てが固定されて見えた。

木の天井。

身を起こすと、知つている部屋が見えた。

「——そうか」

帰つてきたのだと、改めて思つた。

膝を立て、手をつき起き上がるうとすると、

「うぎゃ」

横に転倒した。

——二、三日くらいは寝ていたようだ。

思いのほか疲れていたのだろうと得心すると、布都はもう一度立ち上がろうとした。

全身の感覚がぼんやりとしている。数日眠りこけていたからだと、布都はすぐに理解したが、また倒れた。

今度は立ち上がりきつたあとのことだつた。

重心のバランスが取れずによろけてしまい、それを修正出来なかつた。

「ぎゃ」

二度の転倒の理由は確かにあつた。

布都は左の袖を右手で握りしめた。

布都の右手は抵抗なく左袖を掴みきつた。

そこには袖しかなかつた。

腕はない。

萃香に消し飛ばされたきり。

「慣れたと思っていたのだが、存外そうでもないらしい」

その萃香としばらく旅をしていたのである。布都としては、まさか帰ってきたあとに腕がないことに煩わされるとは思わなかつた。

今度こそと立ち上がるど、しつかり立ち、前を見据えた。目的が決まつた。

——馬子殿に頼んで、服を用意してもらおう。

袖が長くひらひらしたものが欲しかつた。

今も同じ特徴を持つものを着てはいるが、旅の途中に見繕つたものである。生まれも育ちも高貴な布都としては品質が大いに気にくわなない。

布都は、馬子の元へと向かつた。

「——ということで、服が欲しいのですが

「それは構いませんが」

馬子にしてみれば久しく顔を見せたと思つたら、いきなり服を新調したいと言われ、さすがに理解が追いつかなかつた。そもそも、布都の言う『ということ』とやらも分からない。

「——ああ、屠自古には会いましたか？」

「え？」

帰るやいなや寝て、起きるやいなやここに來た。

出会つたのは、すれ違つた人間を勘定にいれなければ馬子だけといつてもいいくらい。

「貴女が帰つてきたと聞いて、飛んで会いに行つたそうですが寝ていてそのまま引き返したそうで」

「ほお、それはもつたいないことを」

その時の顔を見たかつたと、布都は純粹に惜しんだ。

「ずいぶん寂しがつて いましたよ」

「ふむ。……まあ、ゆつくりと待ち構えていることにしましよう」

その方が面白そだと、布都是悪い笑みを見せる。

「——それで、どうでした?」

「はて、何をでしよう?」

「鬼、ですよ」

布都はきょとんとした表情を作ったあと、につこりと笑つてみせた。

「気の良いやつでしたよ」

「そうですか」

馬子はおぼろげであるが何となく分かつた。少なくとも、鬼に会つたのは確實らしいとも。布都から感じるものも、変わらない様であるが少し雰囲気が軽くなつたような気がした。

「鬼というのは酒や喧嘩好きなようで、我々が思つているよりはるかに即物的というか生を謳歌しているというか、まあとにかく愉快なやつらでした」

布都が他者についてここまで喋るのは珍しいことだつた。

馬子は少し意外に思い、続きを引き出そうとした。

「鬼と面白い交流を楽しんだようですね」

「うむ。視界が広がつたというよりか、今まで見えていたものがより見えるようになつたというべきか。とにかく、良い出会いであつたと思えます」

布都がここまで物事を好意的に判じ、かつ言い切ることはそこまでない。

続ける。

「ただ、鬼というのに固執するのはよくないかもしませんね」「など?」

「種族問わずに面白いものは面白いということです」

裏を返せば、種族問わずにつまらないものはつまらない。

布都はにこやかな表情を一転させ、含みのある笑みを浮かべる。

「もう少し言うと、つまらないものはせめて糧になるのが義務でしょう」

そう言う布都に、敢えて馬子は改まった様子で言つた。

「布都姫。もし、面白いけれど氣に入らない者が現れたらどうします

か?」

「……? そのようなことが有り得ますので?」

馬子ははつきりとした声色で、

「きっと」

と、短く答えた。

## 第23話　願望がそれを否定する

屠自古は迷っていた。

会いたいけれど、行きたくない。

一度目に訪ねた時は、寝ていて話せなかつた。二度目に訪ねた時は、部屋には居なかつた。それどころか家の者が掃除をしているところに遭遇して、恥かしかつた。人の気配がしたから思わず名前を呼んだのに、まさか本人がいないとは思わなかつた。家人から子どもを見るような目で見られて恥ずかしかつた。

「そうだ」

屠自古は決意した。

向こうから会いに来るまでは、自分から行かない！

——布都のくせに！　布都のくせに！！

何度もかは分からぬ呪詛のようなもを心で唱えながら、屠自古はどたどたと廊下を走つた。

別に布都に会わなければいけないわけでもないと。別に会いたい人は他にもいるのだと。

それで布都であるが、屠自古を待つていた。

いつか来るだろうと思っていたが、一向にこない。聞いた限りでは、何度も来たのだと言う。だが間が悪かつたみたいで、直接会えていない。

しかし自分から行くより、向こうから来の方が多い面白いことになるだろうと、外出もせずにしばらく待つていたのだがさすがに飽きた。

——都にでも遊びに行くか。

朝ではあるが、空は曇り模様。

雨が降るかも知れないというのに、何故そんなことを思ったのかは分からぬが、とにかく行こうと思つた。

退屈には勝てない。

——ただ待つだけというのはいかんな。

ということで、都に向かつた。常人をはるか超える速度、けれども布都にとつては別段急いでるわけでもない速度。

都に着くと、久しぶりという気分と相変わらずという感想が出てきた。

相変わらずといった感じの人通り。にぎやかさ。

良好な空模様でもないのに、よくもまあ人が集まっているものであると感心しながら、歩く。妙な新鮮感に浸りながら、布都はしばらく散策をしていた。

——なにやらよく見えるな。

色映りが良いといったところか。布都には人の気のようなものが前より色濃く見えた。

とはいって、しばらくすると次第に見飽きてきた。

——いつそあいつも連れてくればよかつたか。  
と、思うも。

——とはいって、あの角は隠せまい。

一人では飽きてしまうのも、二人ならば、誰かとならば。なんて考えれるくらいには、他人を意識に入れるようになつていて。

そんなわけで、一人ではつまらないし帰ろうかと思案し始めたころ、なんとなくであるがとある一角に目が入った。

それは背伸びをしたために周りの人間に意識が入つたからかもしれないし。天啓のようなものかもしれない。注目を浴びているのはいつものことで、もうすでに慣れて気にしないでいたのだけれども、不思議とその注目に意識が入つて、その注目がまた別のところにあって、その別のところというのに視線をやつてしまつたがために——。

「あ、とじ——」

少し遠くであるが、知つた姿を見て思わず名前を口に出し、そのまま寄つて行こうとした時だつた。

——な、なんじゃあ、あいつ!?

そこには屠自古と、その横に変な頭をした変なやつがいた。男、だ

ろうか。——よく分からなかつた。とても中性的で、判断つかない容貌だつたが、着てゐる服は男物だつた。

繰り返すが、布都は注目を浴びていた。

これは今は少し修正が必要で、矢が殺到するかの如くに注目が刺さつていた。

物陰に半身を隠し、顔だけ出している。

怪しいどころではない。

そんな奇行をしている者を見かけたら、とりあえず見てしまうだろう。どうしてそのようなことをしているかとか、どんなやつがとか。思わず二度、三度と見てしまつても不躾だと自戒はしないだろう。それどころか四度、五度、見る者さえ少なくなる。

初めは何か変な事をしているやつがいる。次には、身なりがいい。その次には、その身体的特徴からとある名前が思い浮かぶ。そして、いやそんな馬鹿な事がと打ち消す。だが、目に移る光景が証拠となり困惑する。ついには、疑問を抱きつつも認めざるを得なくなる。

あれは”あの”物部布都ではないか、と。

そしてその物部布都も似たような思考が脳内で巡回していた。

初めは屠自古の横になにかおまけがいる。次には、身なりがいい。その次には、その身体的特徴からとある疑惑が出る。あれは誰だと。よもや屠自古の——と。そして、いやそんな馬鹿な事がと打ち消す。だが、目に移る惨状が証拠となり困惑する。ついには、疑問を突き飛ばして認めずに記憶を消そうと思い始める。

あれは”单なる”思い違いではないか、と。

——いや、しかしつづけ——。

かくして、物部布都は答えに至つた。

——否定出来ない。

ゆらり揺れるように身を反転し、生氣の感じられない表情のまま駆けた。足だけが雄弁に、その他は寡黙に。

答えの出せない疑問について考えるのは止めだと。確かめに行くのだと。思わず逃げるよう走り去つてしまつたことを、正当化した。

悩みは後ろから来るか、前から来るか。

走る布都には、後ろから追つて来るようしか思えない。

屋敷に飛んで帰り、自室に籠り、部屋の隅で頭を抱えて小さくなつて、ああでもないこうでもないと、悩み果てていた。しばらくすると、やはり答えは出ないと屋敷を出た。

そして、どたどたと政治の中心に分け入ると、

「馬子殿――――――！」

すがりついた。

ぎよつとした馬子は、とにかく人払いをした。

「馬子殿、馬子殿、なんですかあいつ、なんですかあいつ」

布都の瞳は潤んでいた。

「ええっと、どうしましたか？」

「どうしましたか？」じやござらん！ 屠自古が、どこの馬か牛の骨とも分からんようなやつと！」

ここで馬子は全てを理解した。

「ああ、それはおそらく屠自古の婚約者です」

「婚約者？ ああ、なるほどそうでしたか。――ん、婚約者？ ジョ、冗談を……」

「貴族の、それも蘇我の娘ですから」

「それはそうですが」

「相手も良き者を選びました」

「そんなものは存在しませぬ」

「いえ、それが大そうな人物になるでしょう。歴史に名を残すような者ですよ」

「しかし屠自古とは関係ありません」

「ですが、向こうも気に入っているようです」

「冗談でありますよ？」

「いえ、冗談ではありません。私も認知した者です。なんでも悪漢に絡まっていたところを助けてもらつたそうで――」

動転している布都は話を理解するので精一杯で、その話のおかしさに気づかなかつた。蘇我の娘が悪漢に絡まれる機会なぞ、あえて作り

でもしないとあり得ないことに。

「武も知もその両方とも傑出しています。また、この国における仏教の第一人者とも言えるでしょう」

「——ぶ、仏教？」

「居場所は、上宮——」

布都は、

「おや」

いなくなっていた。

法が、世界が、裁けない悪があつた時どうするか。  
布都なら間違いなく「そんなもの知つたことか」と一瞥もしないだ  
ろう。

が、事にもよる。

布都は世界の大惡を誅せんと駆けた。もう悩みは後ろから追つて  
きていない。前にある惡を打ち碎かんと走るのみだった。

——急け者の神め！

強く踏み込み

——神道らしく、神を想つてやろうではないか！  
地を蹴り上げ、

——お前が動かぬというのであれば！  
空を跳ぶ。

——精々信徒らしく、我が代わりに罰してやる！  
蒼を誇る空に、

——おお、謳おうではないか！ 血の杯を掲げ、高らかに！  
その姿を刻まんと、

——怨敵の首と共に！  
意思を示す。

——隠り世の門をいざ開かん！  
布都是、突貫した。

目的地へとたどり着いた布都は、覚えのある気配に向かつて突っ込んだ。

塀を飛び越え、閉ざされる木の板を蹴り飛ばし、

「おんどりやあ！」

耳か角か分からんものが生えた頭に、飛び蹴りした。

「つ!?

が、外した。

「避けるでない！　このガキヤ！」

睨みつけ、叫ぶ布都。

蹴りかかられた方は当然というべき疑問を発した。

「いつたい何ですか、貴方は!?」

と叫びつつ、状況把握に努めようとした時、すぐに結論は出た。

灰銀の髪に、実体がないような白い肌。白いぶかぶかとした装束は明らかに高級品。それも一部の中のそのまた一部の者くらいではないと手が入らないようなもの。

そんな特徴に該当する者といえば、一人しかいない。

物部布都。

幼少の頃からその力を認められた天才。

今では物部を名乗りながら蘇我の中心部にいるという妙な立ち位置。

殴りかかられた廐戸皇子が知らないわけがない。

何故なら——。

「いいでしょ！　その挑戦受けようではありませんか！　全人類の頂に立つことが決まっている私が、まず貴女を超えたという事実を作ることによつてその第一歩としましよう！」

布都はちょっと冷静になつた。

「——お前、阿呆か？」

なんだか触つてはいけないものを触つてしまつたような感覚になつた布都であるが、目の前から感じる力はそれなりのものだつた。

——はて？

いぶかしむ布都。

「驚くのも無理はないでしよう。この美貌にこの力。神は私に二物を  
与えたというか、神が私なのかもしません」

布都はもう一度同じことを思った。

「お前、阿呆か？」

それに対し、心外とばかりに、

「なんということでしょうか。——いや、そういうものですね。そう  
ですね。地を行く人間が如何にして天の意思を知れるのでしょうか。  
そう、知ることなど出来はしない。でも、聞き伝えでなら知ることは  
可能。まず手始めに貴女に教えて差し上げることにしましょう」

布都は、目まいがした。

——こんなのが屠自古の……？

目の前が真つ暗になりそうだつた。

——屠自古、許せ。お主の婚約者は夢幻だつたのだ。

地に足をついていたながら、頭は雲と一緒にふわふわしている。なん  
たる悲劇であろうか。布都はこの悲劇を呪わずにいられない。どう  
うして自ら屠自古に恨まれるようなことをしなければいけないのか。

——無情なり

そう小さく呟いた布都は、身体を捻り、右腕を振るつた。

瞬間、鋭利な刃が飛ぶ。

人間を二つに分けるには充分すぎる程の鋭さ。

それは——。

「何です、これは」

飛刃が近くに寄った瞬間、散じた。いつも簡単に防がれ、——いや  
防ぐ動作すらなかつた。まるで飛刃が怯え散らしたかのようだ。

——まだ奥があるな。

そう判断した布都は、とりあえず暴いてやろうと思つた。

「嫌なやつめ。性別すらよく分からぬ分際で屠自古に近づこうと  
は、思い上がり過ぎてそのまま天に召されれば良かつたものを」  
「天と一体なのが私なのです。性別がどうたらど、下々の者が気にす

るところには私はいないのです。——しかし、私は寛大なので教えてさしあげましょう

仰々しく手を広げ、

「今現在、私は便宜上により廻戸と名乗っています。しかし、私は、私を神子と名付けました。神の子たる私が時を経て成長した時には、子が取れて神となるでしょう。さて、その時性別というのはそれほどに大事なことなのでしょうか？　しいていうなら、私の性別は神子です。——いかがです？」

布都は頭が痛くなつた。

——こいつの前にいる我、可哀想。こいつの話を聞いている我、可哀想。

つい現実逃避しそうになつたが、逃避するわけにもいかない。言葉が使えぬとあれば、残る方法は一つ。

——したことはないが、折檻の方くらいは知つておる。

「思い上がつたガキにはお仕置きが必要であるな」

「道理を知らない無知には、優しく説き諭すのが必要でしよう？」

戦意が乗つた視線が交差した。

了解を得たことを確認出来た両者は、部屋を飛び出た。

部屋の外、ひらけた場所に互いに距離を取りつつ降り立つた。人が集まつてくる。

「……知つていますか？　若者を邪魔するだけの存在は捨てられて仕舞いですよ？」

「真っ直ぐ歩くことも出来ない赤ん坊を正してやるのも義務であろう」

「それを大きなお世話というのです」

「見るに堪えなくてな？」

「耐える必要はありません。さつさと（）退場されればよろしい」

「本性が垣間見えているぞガキめ」

「シワが目立ちますよ御婆ちゃん」

自分を特別で崇高な存在だと勘違いしている排他的なガキ。これが現状の布都のする、廻戸、いや神子への評価。

「まずその勘違いを正してやろう」

右手を開き、小指から順にゆっくり内に折っていく。

高まる靈氣に、周囲の地面の小石が震え出す。

——己がただの人間であることを嫌でも実感させてやる。

布都は真っ直ぐ突っ込んだ。

敵はそれなりに力を持っている。が、人である。

——ん？ そういえば。

布都は人間とともにに戦つたことはない。加減がいまいち分からない。一撃で殺しては意味がない。

布都は、

「つ!?

吹つ飛んだ。

「おや、強すぎましたか？ これでもかなり手加減してるつもりだったのですが……」

空中で体勢をたてなおし、地面に足をつくと、神子を睨みつつ状況の把握に努めた。

距離はまだあるといつたところで、対象から黄色い光が壁のように発せられ、そのままぶつかってきた。

「……中々面白い冗談を吐くな。髪型もそうだが、笑いを取りにきているのか？」

「ええ。ですがこの度では私が笑わされていますね。まさかこれほどに差があるとは思いませんでした。この世に生を受けたその瞬間から私は頂にいたのやもしれません」

悲しく笑う神子だったが、布都にはそこに自惚れが見えた。

「思い上がり過ぎもいい加減にしておけ。よもや我が全力だとは思つていらないだろうな」

「ええ、その程度理解しているに決まっているじゃありませんか。で、その上で言っているのです。——この程度なのかと」

今度は失望を表す神子。

そこには混じり気が無かつた。

布都には覚えることだつた。

「つふ」

笑いが出た。

「どうかしました？」

そのままくつくつと口元を隠し笑い続ける布都に、神子はそう聞いたが返答はなくただ笑い声だけが発せられた。

——馬子殿は上手く言つたものだな。

面白いけれども気にくわない者。

愚かさも正しくつけあがればなるほど面白いらしい。

ただ気にくないとすれば。

——屠自古はまだ嫁には出さん。

笑いを止めるとき、布都は改めて神子を見据えた。

偏見を少し止めてみると、なるほどその力はかなりのもの。雑魚妖怪と比べるまでもないだろう。布都は反省した。さつきはあまりにも加減しすぎたと。布都は考えを改めた。そことこの妖怪とやるくらいにしてやろう、と。

「お前、モテるであろう？」

「否定はしませんが」

どうしてそのようなことを急に？　と、首を傾げる神子。

「残念だが、屠自古は諦めろ」

「そう言われると、ますます欲しくなりますね」

「ならば我を負かしてみるがいい」

「雑作もないことで——」

瞬間、布都から感じられていた靈力がはねあがつた。

「ならば、決死の試練に挑むがいい。せいぜい心を強く保つことだ。折れるのが増長した鼻だけで済むといいな？」

## 第24話 間合いの中

布都は足を上げ、地を踏みしめた。

地に靈力が行き渡る。

神道からなる物部の秘術は自然を利用するものがほとんどである。必然、自然について知らなければ扱えない。この場合の知るというのは、書物を読んで知識を得るとは違う。感覚的に理解しているかどうかとなる。

布都是少しだけ移動すると、一度足を上げ、地面を踏んだ。靈力が点穴を衝き、地が震える。

きしみを上げる地面に、神子は危険を感じ取つた。

即座に空中へ浮かび上がり、

「皆の者！ 早くこの場から立ち去りなさい！」

周囲の見物人に注意をうながした。

それにより、ようやく現実に思考が追いついた見物人らは逃げ出す。

その間も事態は進行している。

酷くなる震え。やがて地面に亀裂が走り出し、ついに割れる。

割れる大地を見下ろす神子は、余裕を持つてその様を見ていた。

唯一の懸念は周りの人間の被害だけだつた。自分を襲つてきた敵により、死傷者が出了とあつては外聞が悪い。その危険さえ取り除かれれば、もう心配はなかつた。

「なるほど、これが物部の術ですか。私でなければ最低でも体勢くらいは崩せたでしょうね」

「予兆というやつだ」

「はて？」

「その自信満々の面が割れるところだよ」

詭弁、奇策、搦め手。布都是その全てを扱う。楽しむため、必要であるため。理由はいくつかあるが、今回の場合は後者。必要だつた。布都が萃香との戦闘で負つた代償は少なくない。片腕の欠損だけでなく、単純な全身の疲労もあつた。むしろその方が大きい。全力、

限界、それらを超えて行使された肉体は形とその機能を保てているものの、元のように動けるような状態までは回復しなかった。鬼と対等に遊ぶというのはこういうことらしいと納得した布都であったが、少し残念に思うところもあつた。しばらくは、こういった遊びは出来ないと思えば、そもそも思う。だが鬼と遊んだあとならば、ある程度の妖怪では遊んでももう大して楽しめないだろうとも思った。

それなのに、今、戦闘している。

あくまで強気な台詞を吐いている布都だが、その内心はどうして自分は戦っているのだろうかと自問していた。理由なぞ考えることもなく自明であるが、それでもどうしてこうなつたんだろうかと思ってしまう。体がだるい。地割れを起こしたときもそう。力任せに靈力でもなんでも地面に流せばよかつたものを、わざわざ極小の労力でそれをおこなおうとするくらいにはだるい。

「はあ」

しかしここで引くことは出来ない。目の前に大悪がいるのにそれを処さないというのはこの世の倫理に反する。万人が泣こうが知ったことではないが、その中にあの子が入つてくるなら話は別である。「この世の全てが理知によつて解説されると思つてゐるようなお氣楽なやつに理外の理を教えてやろう」

「それを為すのが、——不老不死です」

「……不老不死だと？」

突然の言葉。

布都は引っかかりを覚えた。

「よもやそれを……？」

「ええ、私はそれを目指しています」

「笑えないな」

「はて」

やはり言葉では埒が明かない。

——本当に笑えない。

不死ほどつまらなく、恐ろしいものがあろうか。簡単な話、寝たくても寝ることが出来ないようなものだ。枯れない花があれば不気味

だろう。長寿こそ目指しけれ、そこに不老に不死となれば、時間の獄に入れられるに等しい。

時の移ろいに慣れてしまつた時、それは心が摩耗した時であろう。一瞬の開花、燃える激情。それらが生の醍醐味だろうに。

「世の摂理を知らんのか」

「貴女は知つているような言い方で」

「少なくとも人は死ぬ」

「私が人を超えれば済む話」

「身体がどうかなつたとしても、中身までもが変わるかな」

「初めから違うとは考えませんか」

「そもそも何のために生きたい」

「生を全うするため」

「そうかよ」

布都は唾を吐き捨てた。  
忌々しさ。しかし――。

心を落ち着かせようと、ゆっくり息を吐く。  
吸つて吐いて、吸つて吐いて。

——不死、か。

理外のものを無理やり理内に押し込めば、どうしても歪みが生まれる。その歪みとどう付き合うつもりなのか。  
「確かめてやる」

目を閉じる。

暗闇が訪れる。

視界が閉ざされたことにより、他の感覚が澄む。

音、臭い。靈力。

その流れに耳を傾ける。

せせらぎ。水の音。

混じり合い、発露する。

光。球。たゆたう靈魂。

当てもなく、ゆらゆら揺れ動く。

水面に浮かぶ葉のよう。

心象が言葉になり、やがて形になる。

身が宙へと浮く。

周囲は無音なるとも賑やか。輪郭はおぼろげで、光輪のようになとい。

瞼を開けると、暗い雲より抜け出てきた光が瞳に入つてくる。  
死とは――。

「その間合いは絶大なりとも極小。寄り添うように近いが、触れるには遠すぎる。ゆらり揺らめいて、現世旅。――さあ、戯れようじやないか」

割れた地面から、ぼんわりとした光が続々と浮かび上がつてくる。輪郭のぼやけたそれらはどんどん数を増し、夜空に浮かぶ星々のように地⾯を彩る。

「お前、モテるのだろう？ 随分と好かれてるようだ」

『何に？』とは神子は言えなかつた。

物部の秘術は神道から来ている。神道は靈魂を重んじる。思考を加速させる欠片はこれで充分だつた。

「まさか――」

「人気者は大変だな？」

布都は嗤つた。

戦闘は理屈ではない。ただの力比べでもない。意思や思念の交流である。

布都の解釈するには、騙し合いである。それに到らなければ、戦闘とは見做さない。

「恐れるからこそ、招き寄せるのだ。それ、行くぞ？」

布都は人差し指を伸ばし、ひよいつと上げた。

それを合図に、周りの球状の光が神子へとゆっくり進みだす。

「つ！」

こんなにもはつきりと目に見える形で死が迫る光景に、神子は堪らず。

「このような虚偽威しにつ」

「おや、ひどいことを言うじやないか。理解しないから恐怖が生まれ

るのだ。拒絶せずに話しかけてみたらどうだ？」

馬鹿を言えと怒鳴りたいところだつたが、それどころではない。ゆらめく光はどんどん迫つてきている。

神子は分からなくなつた。

目の前に対峙している存在は一体何者なのか。何か根本的な思い違いをしているのではないだろうか。

——何故。

そんな思いが神子の胸の内に満ちる。

知識の上では知っていた。幼少のころから才知を認められた存在。自分と似たような経歴を持つている。違うところと言えば、変わり者と知られそし謗そしられるところか。しかしどうしてだろうか、この異質さは。噂で聞く変わり者なんてものじやない。死靈と戯れる者など聞いていない。明らかにこの世の存在ではない。死は忌避すべきもの。よつて、目の前の物部布都とかいう存在もまた同じ――。

「日陰者は日陰に帰れ。ここは天照らす天道の元。死なぞ、一部の隙も無く入る余地などない！」

剣を抜き放つ。

薄暗い天候の中でも、少し靈力を流すだけで輝かんばかりの光を放つ靈劍。あらゆる手を利用し、苦労して手に入れたシロモノである。まずは暗雲から消し去つて――。

「――天道は我にあり！」

剣を高らかに掲げ、まっすぐ上に光を放つ。

多分に靈力を含んだ光は、分厚い雲を蹴散らし太陽を暴いた。

「――次は、そのつまらない詐術の番です」

掲げた剣を横に傾けると、陽の光を受け反射した。多大に込めた靈力の剣が反射した光は、灼熱の光線と化した。光が布都へ――。

「つ！」

防御姿勢をとる暇もなく、布都は光に灼かれた。

それでも靈力で障壁くらいは作ることが出来た。だが、その急ごしらえの障壁は即座に壊され緩衝材程度の役割しか果たさなかつた。

布都は地面に叩きつけられる。

数度転がる。動きが止まるとき、仰向けに。

宙に漂わせていた光も全て搔き消える。

空が見えた。

気味の悪い空。芋虫のような雲が身を寄せ合っている。光さえも隙間を見つけることが困難なほどに押し合っている。そんな空に一力所だけ穴があいている。まるで腸を破かれたよう。そこから差す光はさしづめ血であろうか。

頬が緩む。

——楽しくなってきた。

空に開いた穴は、だんだん雲によつて塞がれていく。欠損は埋められるものらしい。

「やはり詐術の類。よくもまあ、あのような偽りを言つたものです」

「偽り、か」

「まだありますか？　もう貴女の手は理解しました。詐術の類は通じませんよ」

小さく笑いが飛び出る。

見破られたところで何一つ問題はない。そもそも防衛過剰な相手とその心理を突いた策でしか無かつた。目的は相手の対応を見ること。その対応で相手の心を見ようとしただけ。目的は充分に果たしている。

ゆつくり立ち上がる。

身がところどころ焼け焦げているが、問題はない。もう、問題はない。

身の心配をする時期は過ぎた。

「一応断つておこうか」

「何がですか？」

「私は人を殺したことがある」

「戦闘を経験したことがあれば、よくあることでしょう」

「そういう意味ではない。何故この場面で言うか、それが重要である」

「……脅しでしょうか」

「いや、覚悟をうながしただけである。せいぜい楽しませるがいい」  
唇を舐めると、土の味。唾と一緒に吐き捨てる。

ゆつくり息を吐くと、酒気のようなものを感じる。心が浮つき、身  
が軽くなる。視界は淡く歪み始め、全てが好ましく想えてくる。

「くふ」

全てを肯定するということは、全てを否定することに等しい。  
成り立ちはしないのだから。

「集中は切らすなよ。まあ、それだけ臆病ならば問題はないだろうが」

「——臆病、と言いましたか？」

靈力の糸を操り渦を起こす。

風。

吹き荒ぶ風は、地面の砂を巻き上げ、自身と共に流れゆく。

「今度は何の詐術でしようか？ 偽りばかりで実のないものに、私は  
——」

実はあつた。風に乗った砂がそれ。

見えない攻撃は知つていれば対応は出来るが、知らない攻撃は対応  
のしようがない。

目に砂が入り込み、思わず閉じてしまつた神子に、布都は即座に距  
離を詰めた。

「——阿呆め、敵から目を離すな」

その言葉を聞いた神子は、理解した。

焦り。

その前に、対処を。

敵が来る。来た。

やる事は一つ。

靈力を急速に高め、殻のように具現させる。

「下だぞ」

薄く目を開け、下を見る、が。——いない。

「阿呆」

上から強い衝撃。

とにかく出力を上げ、防御する。

防殻は破られていない。

「つち、硬いな」

言葉の後、衝撃が和らぐ。

遠ざかるのが見えた。

「せっかく良いものを持つておるのに、全然使い切れておらんな。お前の知覚はちゃんと上から来る我を感じていたはずだ。なのに言葉一つでお前はそれを無視して、下を見たのだ。神の子が聞いてあきれ

る」

神子は言い返せない。

全てが事実だった。

けれど、事実はある。

「……それでも私は無傷です。貴女とは違う」

如何に近づこうとも、防殻を破れない限りは負傷することはない。であれば、一方的に攻撃を与えるのはこちらのほう。

神子は現実と推測で心の落ち着きを取り戻してきた。

だが布都にとつては取るに足らないこと。

「——然り。けれども、絶対はない。およそ駆け引きなんてものは、頼みとするものが破られた時に最高潮になるのだ」

全てを払つた果ての果て。極上の果実。

「さて、次はどうやつて攻めてみようか。特に何か思い浮かぶというわけでもないが、何もしないというのも暇であるし。はてさてどうしたものか」

一切の焦りが見えない布都の表情。

神子は嫌になつた。

永遠に延々と続きそうな攻防のように感じられた。

それこそ冗談ではないと吐き捨てたかつたが、口に出す労力が躊躇われた。この先そこまで続くか分からないのであれば、少しの体力も温存すべきだと思った。しかし、そんな永遠なんて望むわけがない。逃れる術はある。簡単な話、こちらも攻撃を仕掛けて相手が活動出来なくしてしまえばいいだけのこと。そう思い到ると、いくらか楽になつた。そう、これは永遠なんかではない。終わりはちゃんとあつ

て、そしてその終わりはある程度自分で左右できる代物であると。

息を吐くと、気持ちが落ち着いた。

「……次はそちらが防ぐ番です」

「ほお！」

神子の言葉に、喜色に富んだ返事をする布都。

むつとしつつ、神子は剣を布都に突き付ける。

靈力がふんだんに込められたそれは光り、あふれんばかりの輝きを放つた。その輝きだけで目を灼かんばかり。

「うむうむ。なるほど靈力の総量だけでいえば我より上であろう」「当然です」

「しかしそれだけだ。別に今までになかった話じやない」

「……何が言いたいので？」

「体験と経験の積み重ねで熟していくものが食べたいのだ。だからこうせつせと教えてやつていてるのだ」

「上からですね」

「経験不足どころか、戦闘が初めてなんじやないかとすら思つてゐる。かぶりつきたくなる衝動を必死に抑えているのを褒めて欲しくらいなのだが」

「気持ちのいい比喩ではありませんね。人に向かつて食べるだとか」「比喩なのだが、比喩でもなかつたりする。いや、微妙な塩梅でな？出来れば真に死の恐怖を味わつて欲しかつたのだが、どうにもこれが難しい。加減するには強すぎるが、本気で殺るには経験が足りてなすぎる。人間なんてのは腹でもぶち破つたら、大抵死ぬのだ。少しの隙を突けば、造作もない。さすがに我も困つてきた」

「……ならば止めませんか。そもそも私は望んでいない」「うーむ、それもいい気がしてきた。どうにも昂つた気持ちが抜けてきてなあ」

腕を組み首を傾げる布都。そこからは緊張感の無さが見て取れた。本当に気分では無くなつてきたらしく、威圧感や異物感といったようなものがかなり薄れている。

神子は正直ほつとした。

気の隙間、そこを衝く。堅固な守りを破る最善の方法。

布都は衝かれた。

「つ好機！」

宙を浮く布都の後方の地面から穴が開き、何かが飛び出した。

人、いや仙。いや仙でもなく、邪仙。

「素敵ですわね！　こんな素体が手に入るなんて！」

その邪仙は神子も見知った姿。

「霍菁莪っ！」

水色の衣服に身を包み、いつも樂し氣に笑顔を携える仙人。師でもある。正直その思考や素行は相いれないが、それでも仙道を知り、また教えてくれる。無下には出来ない。そんな存在が――。

「がつ」

布都は受けた衝撃に血と声で反応した。

背から手が突つ込まれ腹を突き破られている。

布都の肉体は決して堅いわけではない。靈力で補強することで、ある程度頑強に出来るが、身体事体はさほどではない。何より、布都の今の肉体は万全とは程遠い状態にある。

「つな」

首を後ろへやると、ようやくその姿を確認出来た。

「えー、神子様を助けに来た者ってところでどうでしょう？」

楽しげな声色。子どものような純粹な笑み。

腕が引き抜かれる。

再び襲う衝撃に布都の肉体は耐えられずに、地に落ちた。

「菁莪！　何故！」

神子は即座に詰め寄った。

「はて、何故と申されましても……」

対する菁莪は、人差し指を頬に当てて首を傾げてみせた。

「お邪魔でした？」

「もう戦いは終わるところだつたのだ！」

「――あら、神子様。それはいけませんわ。『終わるところ』では、まだ終わつてはいません。ちゃんとお教えしたはずですよ？」

「そんなことはいい！ それよりっ」

神子は飛び越してきた布都を振り返った。

布都は地面に倒れ伏し、その周囲に血だまりを作っていた。どう見ても致命傷。助かる見込みは感じられない。そう、死とは突然襲ってくるもの。そんなの到底許容出来るものではない。だからこそ、この邪仙を師と仰いだ。だが、この結果はどうだろうか。納得出来るものなのか。

「神子様？ お顔がすぐれませんよ？ たつた一つの命に頓着されるようでは、人の上に立てません。天より人を見下ろす者がそれでどうするのです？」

「理屈は分かるが……」

しかし、と続けようとした神子、そして菁莪は、上から頭を糸でつり上げられたかのようにびくっと跳ねて緊張した。それは禍々しさとしか形容出来ないものだった。

立つっていた。

「……仙はまだ喰つたことが無くてなあ？」

血に飢えた獣の舌なめずり。天上へと昇るような恍惚の笑み。

「婿は下がつておれ。巻き込まない自信はない」

「は？」

婿、そう呼ばれたのが自分だと分かった神子であるが、問題はそこではない。

「何故、立つて……」

ひん死の重体だつたはず。いや、今でもそう見える。でも何故――。

「もう、抑える必要もないようだ――」

布都は、笑みを凶惡のものに変えた。それは完全に捕食者の笑み。

神子から布都の身の心配が消え去り、逆に菁莪への心配へと移つた。

その菁莪の顔は険しい。普段の笑みは完全に消えていた。

「……獣を飼いならすのは趣味じゃないのですけど」

「代わりに我が腹の中で飼つてやる」

布都から気がほどばしる。

靈力に妖力が混じつていく。

「さて、仙人狩りの時間だ」

はためくだけだった左袖が浮き上がり、中から黒いもやが出てくる。触れるもの全てを腐蝕させてしまうようなそれ。

明らかな劇物。

菁莪は大きな計算違いを覚つた。

「ま、待つて——」

待たれない。布都是行動を——。

「ちよ、ちよ——」

菁莪は全力で逃げ出した。

布都は追つた。

「えつと、私は……？」

一人になつた神子はその場で立ちぼうけになつた。

## 第25話 欲望と策謀

風を頬で感じた。

ようやく落ち着いてきた、らしい。

「なんとまあ……」

激動の一日だつた。そしてどこかではまだ激動真っ最中なのであらうと。平穏な一日がやたら物騒な客により吹き飛んでしまつた。思えば、今日は何をする予定だつたかしらん。うふふ。

ふざけていると、思い出した。

そして同時に予定が直に現れた。

「皇子！ 来ました——つて、ええ!?」

声の方に視線をやると、人が集まつていた。

そして、その人垣を押しのけこちらにやつて来る少女。和らげな緑の衣服に、活発そうな瞳。そう、蘇我屠自古。会つて、お茶でもゆつくり飲むはずだつた。

なのに、この惨状。荒れ果てた地。恐怖や驚愕の顔の人々。人は天災には逆らえないというが、彼女らがそうなのかもしれない。

「つわ、つよ、つせ」

割れ地の上で飛び飛びに足を運ぶ。

地が割れてるせいで、尋常じやなく足場が悪い。しかしそんなことは屠自古にはどうでもよかつた。それより何故か黄昏ている婚約者の方が気になつた。

「ど、どうされたのです?!」

屠自古は肩を揺さぶつた。

「え、ああ、綺麗な空だなあと思いまして」「は？」

空は鈍色一色。使い古された刀剣の類の方がまだきらめくかもしない。

「……その、君の親はどうちらとも凄い人だね」

想いをそのまま言葉には出来ず、伝わりようが無いくらいの遠回しなつた。きっと空のせい。

「え？　あ、いや、父上はともかく母上は知りませぬ！　口クに顔も見  
たこともないですし！」

「ん？　君の母はあるもののべ——」

「つ違います!!」

鼻息荒く否定した屠自古。

「あいつは断じて母などとは!!　あいつは、その、あれです！　布都で  
す！」

「……そうですか」

その権幕に、神子は思わず改まった。

どうやら親子仲は悪いらしい。色んな意味で。

「今しがたまで、その布都さんはここにいらしてましたよ」

「え、そうなのですか？」

「ええ」

「どうして今は居ないのですか？　もしかして私が来るのを知つて  
!?」

「いや、それは無いでしょう。さすがに未来を見るなどと——」

「いやあいつならやりかねません」

さえぎる屠自古。

「……嫌いなんですか？」

「嫌い、というわけでもないような気がしないでもありませんが、……  
いややつぱり嫌いです！」

神子は目を丸くした。

表情豊かだとは思っていたが、ここまでとは思わなかつた。でもこ  
れは多分、あの人物が関わっているからこそなんだろうと思うと、や  
はり好ましくはない。

だから少し意趣返し。

「——いやあ、大変でしたよ。貴女を嫁には出さんと暴れ放題で

「……え？　布都がですか？」

「ええ」

目も口も丸くする屠自古。

「もしかして、この辺りの……」

「ええ、そうです。貴女の母がやつていつたことですよ」「は、母ではつ！」

顔を真っ赤にして抗議する屠自古。そこからは複雑な喜び模様が見て取れた。とにかく認めたくないらしい。

あることを思いつく。

神子は悪い笑みを浮かべた。

「今度、遠くに遊びに行きましょうか。お母さんも連れて」

「え？ 布都もですか？」

認めていることも気づいていないのかどうか分からないが、とにかくこれは復讐になる。

「当然です。私たちの旅のおまけに連れて行きましょう」

神子は笑みを濃くする。

あの化け物にも弱点があるようで、思い返せば例の件の発端はそれが要因だつた。目の前で存分にいちゃいちゃしてやろう。そんで泣かせてやろう。たぶん最高に愉快だろう。

「お、皇子？」

「ん？ ああ、何もないですよ」

神子は心で誓つた。

——絶対、泣かす！

気分がすこぶる良くなってきた。

勝手に頬がゆるむ。

いけないいけないと手で包み込むが、抑えられない。

道中に散々いやついて涙目になつたあいつに、「歳をとると涙もろくなると言いますからね」と言つてやろう。続けて「それで何か感動するような光景でもあつたのですか？ 伯母上？」と付け加えてやろう。さぞ愉快だろう。

……その前に、師を失うことになつていなかといいが。



驚くものを見た時の反応とは人それぞれだろうか。その反応が幾通りかは分からぬが、その数は多くはないだろう。思考や理性を飛び越えて本能に近いところまでやつてきた衝撃。それは天より遣された神の子を自称する前衛的な髪型の持ち主をも、その他大勢と同じような反応を示すものだつた。

それほどまでに目の前の光景は――。

「ねえ、布都様あ！」

「寄るな。失せろ」

猫なで声で布都に纏わりつく菁莪。

「そう言わずに！」

「ええい鬱陶しい！」

「ああんっ」

軽く振り払われただけのように見えたが、菁莪は吹き飛ばされたようには地に倒れ。

「痛いですわあ。これはもう責任を取つてもらわないとお」

追われていたはずの者が追つているというかなんていうか、仲直りしたのだろうか。そんな変なことを思つてしまふ。

目が合う。

「お、おお！　これはこれは婿殿。よくぞ会えたな！　この偶然に我也神に感謝したいところだ！」

ここは上宮。どう考へても廄戸皇子に会いに来る以外に来る機会がない場所。会いに来たというよりは、連れてきたという方が正しいようだ。

「……どうも。何の用でしようか

邪仙に足首を掴まれながら、気にした様子無くそのまま引きずつて来る様は中々に異様。

「帰りたい。家はここだけども。

「いや、な？　顔を見たくなつてな？」

「昨日の今日ですが」

「いやいや、あんのクソガキがどのような面しているのかと思うと氣

になつて気になつて思わずな？」

良く分からぬが、別段仲良くする気はないらしい。

「どうも、天に愛された素晴らしい面です。ではご用件は済ませられたでしよう。出口はあちらです」

「そうかそうか。我もこのような火を点けたくなるような場からはさつさとおさらばしたいのだが、ちょっと土産があつてな」

見るからに、土産は足元のそれ。

「いりません。連れて帰つてください」

「あら、神子様。それはちよつと傷つきますう」

心底楽しそうに悲しそうに、菁莪は言う。

「私は貴女様に惜しみない愛を捧げた身。それを物のように——」

「知識だけ置いて、その方とご一緒にされて下さい。どうやら愛に飢えていいるようなので」

「おいおい、感心せんな。師に向かつてその口の利き方はどうかと思うぞ媚殿？　ここはやはりそういう部分の教育も兼ねて、師としばらく寝食を共にするのはどうだらうか」「身の危険を感じますので、お譲りしますよ。私の代わりに、常識や礼でも習うといいのではないのでしょうか」

「あいにく、それらとは無関係になるように生きてている」

「ああ、そのようですね」

菁莪がようやく起き上がる。

「私を取り合いになさるのはたいへん結構なことですが、この身は一つですので交代で我慢してくださいな」

「この邪仙から本当に学ぶべきはこの精神性ではないだらうか。」

「そうですわ、神子様」

「はい？」

表情を変えた菁莪。何か用事があつたらしい。

「北の方へ旅をしようかと思ひますの」

「そうですか」

ただの報告だつた。

「神子様も高貴なお人。準備も色々ありましょう」

「はい」

何か食い違つた。

すぐに理解した。

「……どうして私が行くことになつてているのです？」

「あら、師が旅出ると言えば弟子は走つてついてくるものですからよ。仙道とはそういうものです」

「怪しいことで」

「なんと！ 私をお疑いですか!?」

「……はあ」

どうやら頷くまでこの調子が続くようである。これも力を得るまでの辛抱。

「分かりました。行けばよいのでしょう行けば」

「はい！」

「しかし私にも公務があります。……予定を作るのも一苦労ではないというのに」

「申し訳ございません。ですが、神子様にも益のある話だと確信しているのです」

「それはどのようなもので？ もし本当にうまみがあるなら、気分も乗るのですが」

「それは——」

霍薈義は嘘はつかない。ただ伝えることをわざと伏せたりする。言うことと言わないことを意図的に操れば、嘘をつく必要もないといふわけだ。騙されて動くのではなく、自らの自己決定により動く。少なくとも、当人はそう思う。

「おい、聞いておらんぞ」

そんな中、布都が口をはさんだ。

顔をしかめている。

布都にすれば、話が違うとすら言いたくなることだった。

そしてその言葉の意図するところ、それを薈義がすぐに感じ取つた。

「あら布都様、『私たち二人で』とは言つておりませんでしたわよ。そ

れとも二人つきりをお望みでしたか？　ああ、それは気が回らず  
……

「ずいぶんと口が回ることだ。これを師と仰げば、それはそれは大そ  
うな人物になるであろうな」

それは明らかに神子に向けて言つていた。

「耳が痛いですね」

「おや、それはどちらの耳が痛いのか」

「……貴女は舌の上に毒でも乗つてるのでしょうか」

「絶品のな」

布都は舌を出して見せた。

「あら、それはたいへん興味ありますわ。是非とも味わいたいもので  
すかさず寄る菁莪。

距離を取る布都。

実際に嫌そうな顔を浮かべている。

知つてる者からすれば、おそらく珍しい表情である。

話が進まない。

神子は話を切り出す。

「で、どうして北なのですか？」

「——かの地では神が統治する国がある、と言われていますのはご存  
知でしよう？」

「ええ、誰でも知つているような噂ですね」

「さて、私は仙でございます。ある程度の事は対処可能

「探りに行つたのですね」

「ええ。ですが、すぐに帰つてくるはめになりました」

「貴女ほどの人が？」

「仙であり続けるとは、畢竟死なぬことです。危ない橋は渡らないこ  
とです」

「ならば、そもそも行かなければ良かつたのでは」

「それが、そこの神は剣を欲しているとも、もしくは手に入れたらとも、  
そんな情報を得たので」

「それが欲しいと？」

「ええ、貴方の為に」

そこに含まれた意味を神子は感じ取った。

「……そうですか。それは仕方ありませんね」

「そこの靈剣とは違い、正真正銘の神の剣です。全てを断ち切る剣。まさに剣というべきもので」

「——それをどうやって手に入れるつもりで？　その神が既に持つているにしろ、探している段階にしろ、目的がかち合うことになりますが」

「それはもう、頑張って譲つてもらうのですよ」

「……貴女らしいことで」

明るい展望が見えない旅。

北に行くにつれ、危険が大きくなるのは周知のことである。基本的には未知の妖怪が多くなる。そんな危険を冒してまでたどり着いたところで、その先にさらなる危険がある。北の向こうに国があるという噂は、菁莪の感じからどうやら本当であるらしいが、それだけ。

しかし、そんな不確定なものにあの布都が参加するというのが気になつた。

黙つて聞いている布都に問い合わせてみる。

「貴女はどうして菁莪に賛成したので？」

「興味があつた、ではいかんかな？」

「足らない、と答えましょう」

「では、こう答えよう。損じたものを得るためにと」

布都は左袖を掴んで見せる。

「それで菁莪の話に乗つたわけですか」

「そんなところにしておいてくれ」

当たつているとも言えないが、外れているわけでもないらしい。少なくとも、菁莪が関係しているのは確かだ。でなければ、今そこで殺し合いが始まっているだろうし。

「まあまあ、よろしいではありませんか。思つたが吉日です。早い出立を——」

「ですから私は公務が」

「あら、別に神子様を置いていつてもよろしいのですよ？　旅の仲間は他にもいますし」

「……他とは？」

この面子に入つても大丈夫というか、わざわざ菁莪が連れて行こうとする人物の名が思い浮かばない。

「屠自古様とか、お誘いしたのですが」

「——死にたいのか？」

布都が詰め寄つた。

「——まさか。私はとことん生きて飽くまで楽しみたいのです

「ならば妙なことはするな」

「いえ、これは私からのお節介のようなものですねわ」

「……どういうことだ？」

「もうすでにこのヤマト王朝の重臣たちは、北の向こうの国を認知しています」

「噂で、だろう」

「いいえ、私がきつちり証拠を持ち帰つてきたのですから」

「証拠？」

「その証拠は喋ることが出来ますので。少し舌足らずな感も否めなかつたのですが、子どもの方が持ち運びに便利でしたので」

物騒な内容はさておき、布都はそれが意味するものを感じ取つた。

「……つまり、王朝は土地を欲しがつたという訳か」

「さすがは布都様。ご理解が早くありますね」

大軍が動く。そして自分たちも。

理屈を理解出来た布都の気分は良くない。

危険を乗り越えた先には、国がある。国があるということは、そこには住まう民がいる。民がいるということは、それにもなう文明がある。つまりところ併合して、それら全てを手に入れてしまおうというわけである。

菁莪がどういう手口を使つたかは、布都には知り得ることではなかつたが、おおよその見当はついた。人の欲を突くのが上手い邪仙は、おそらく例の国を魅力的な土地と説き、その国力は大したことな

いと説いたのであろう。後はそれの説得力を上げるために、子どもを連れてきて、想定通りのことを喋らせた。

「お前、口クな死に方はせんなん」

「仙人ですから」

「ふん」

一人の邪仙の欲が国を動かした。その欲はあまりにも純粹で、自分のためであり他人のためでもあった。

國を挙げての北征が始まる。

名だたる重臣が兵を率い、権力争いをも引き連れて、足を時を進め  
る。

まがりなりにも一つの國として、味方として共同体として。

剣を槍を矛を。北に向けようと。

邪仙は裏の無い笑みを携え、飽くまで楽しもうとする。それ以外に生きることでやることがあるだろうかと言わんばかりに。

## 第26話　流れる時

団結はそれだけで力になる。

例えそれが真ならざるとも、手を取り合えば充分に効果は発揮される。少なくとも、妖怪が跋扈する世界で、人の住む世を作ることが出来た王朝であればそれなりに。何と言つても、物部と蘇我が手を組んで一つの作業に取り組んでいる。字面だけで言えば、平和の幕開けのようなものだが、実際の内容は恐ろしく物騒。

北の地を征服する。

人は理屈だけでは動かない。それは人の集合体である国も同じだつた。

ヤマト王朝は欲で動いている。

木を刈り倒し、材木とする。大規模な伐採が行われた。大人数が動くならば、それだけの食料もいる。火も起こさなければならない。後続のためにも、道をつくらなければならない。

物部氏を中心とする集団が先行し、安全を確保する。その後に蘇我氏を中心とする集団が、人が休めるように地をならしていく。

協力という素晴らしい行為。

人を殺し、隸属させ、土地を奪う。

その為の協力。

この恐ろしい集団は大まかに物部と蘇我の両派に分かれている。この国家的計画には、多くの重臣も同行しており、物部氏で言うと守屋自ら氏族を率いている。蘇我では、馬子の名代として蘇我系の神子が来ている。これには政治的な思慮が様々付随しているが、ややこしいことは置いておいて、神子が代わりを務めているというのが大きなことだつた。

布都も集団の中にはいる。が、蘇我の集団より外れ、物部の集団に身を置いていた。

いる理由はただ呼ばれただけ。わざわざ呼んでくるというところに少し興味が湧いたからいにすぎない。

ということで、布都は守屋と歩いている。

弟の贊個は先遣隊を率いていて、この場にはいない。

物部氏としては、力を見せつけるいい機会であるため意欲は高い。その中心にいる守屋と布都だけが冷めている。

「まさかこんな大所帯になるとは思いませんでした」

と、布都が遠回しに愚痴を言うと守屋も乗った。

「まつたくだ。しかし、この状況では代わりに誰かを行かすわけにはいかん。代わりを立てられた蘇我が羨ましい」

個々の能力を高めることに主眼を持つ物部氏は、それにともなつてか性格的にも我が強い。これらの上に立つのは、さらに個と能力を持つ者である。よつて集団としては、協調が不得意。能力を考えると力を発揮出来ていない。そんな問題があつた。

それでも周りの氏族より格段に強いので、集団としての能力向上をしようとはならない要因になつた。なまじ強いため、誇りが生まれる。その誇りが我を強め、他者との連携を拒む。それにともなう連携下手の言い訳として、弱いから群れるのだというものが採用される。とはいえ物部氏の昨今の戦闘能力向上は著しい。贊個が普段から、物部の術を周りの人間に教えていた。これが功をそうし、格段といえるほど向上に繋がつていて。

その贊個の元なら簡単な連携くらいは可能であつても、氏族として大きなまとまりになると不足があつた。そうなつた場合にはやはり当主の守屋が必要となつた。

実績や能力を知らなくても、その人物に心酔してしまうような現象。不思議と目が行き魅かれてしまう。それを俗にカリスマ性と呼ぶが、守屋の場合はどうだろうか。——少し違う。氏族の未来。象徴。そういうつたものに近かつた。

皆、守屋を通して別のものを見ている。

物部氏にとつて幸運だったのは、この当主が実利を考えることが出来て、かつおよそ人の上に立つ際に必要な能力が軒並み高かつたこと。そしてなにより、現実を見ているくせに妙に理想論者であつたこと。人は希望が無ければ、前には進めない。理想が必要だった。理想に向けて音頭をとつてくれる人が必要だつた。

に向けて音頭をとつてくれる人が必要だつた。

そうでなければ、蘇我との政争に心が耐えられなかつた。寝返る味方、増えていく敵。天皇の周りのほとんどが蘇我の親戚。それどころか、新たな天皇ですら蘇我系。天皇の母は馬子の姉である。物部にとっては、時を増すごとに政情は不利になつてゐる。

物部氏族の危機感は尋常なものではない。

個を貴ぶのに、個では敵わないと理解させられる。

拒むには理想がいる。

それも大きく強固な理想が。

守屋は実に分かりやすい答えを用意した。

『強い者が勝つ』

最終的にはこうなるはずだと。

「俺の代わりがいれば幾分か楽だつたのだがな」

「これはまた贅沢なことを」

「見せつけられると、言いたくもなる」

身分が高い者は妻子帶同である。が、守屋は単身である。そんな余裕はない。

「大海に身を投げ、浮くか沈むか。出た結果が天命である。——これでは我が氏族の未来は明るくないな」

「兄上は未来はないとお思いいで？」

「分からんさ。まだ賭けることが出来る以上は結論を出すにはまだ早い」

「……ずいぶんと時の進みが早くなりましたなあ」

「ああ、昔に比べてずいぶん早くなつた」

はつきり言う守屋。が、渋みがある。

「進まない時なんぞ魅力に欠けるが、何とも情の無いことだ」

「待てと言つても待つてはくれませんから。——ああそうです、不老不死でも目指してみればどうでしょう？」

「いずれ全てが朽ち、その後に自分だけ残るか。ぞつとする話だ。それならば何をするにしても意味をなさない。その瞬間、身動きが取れなくなつてしまうわ」

「然り。然り」

布都は少し気分がよくなつた。

「憎悪でもなく理屈でもない。けれども敵対する以外にない関係。まるで時がそうさせてるようですね」

布都は守屋が蘇我を嫌つてゐるわけではないのを知つてゐる。もちろん好きでもない。好惡によるものではない関係。

「時か神か、はてさて何か。とにかく、当事者としては存分に役割を果たそう」

「兄上の考える『物部守屋』の役割とは?」

一拍。

「——漠然としていて上手く言えんな」

「そういうものですか」

「ああ」

守屋は改まつた。

「……天命というものがある。俺はそう思つている」

「はい」

「だが、その天命というものは、俺の思うにだが」

「はい」

「そう細かく決まつてないのでないかと思うのだ」

「では何と?」

「受けた天命、——それに縛られるか使用するか」

難しい顔の守屋。

「上手く言えないが、そんな感じだ」

説明不十分だと自分でも思うのか、さらに言葉を続ける。

「……天の意思の結果に人間が振り回されることがあつても、結果それ自体が定められているわけではない」

「私は天の意思とやらを感じたことが無く」

「当然だ。意思が意思について考えるか」

「それはどういう」

布都は理解が苦しくなつてきた。

「そのままだ。俺が、——いや親父殿がそう感じ、息子の俺が引き継いだことだ。物部の当主である俺がな」

「私は道具ではありませんが」

「道具などであつて堪るか。我を通して、この物部布都だ」

「なんとも釈然としませんが」

「酔つ払いの戯言とでも受け取れ」

「おや、酔つておられたので？」

「現実にな。内腑が痛むわ」

「それはそれは」

分からぬものを分からぬままにしておく。それもまた一興。布都は守屋から距離を離した。

日暮れも近い。

茜は、人の手が及んでいない林の中でも差した。

人は言う、暮れが不安で帳は恐怖だと。

先の見えない不安が恐怖と化す。

ヤマトからの一向は予想をはるかに上回る速度で北へと進んでいた。妖怪の来襲などの危険がほとんどなく、拍子抜けしていた。北というものは、妖怪が跋扈する大地という当初の観念が崩れ去るほどだった。

原因は分からぬ。分からぬが、進めるならよし。けれども、進むたびに言い様にならない不安が募る。やがて恐怖に変貌しそうなそれを必死に押し留めて、前へ進む。皆前へ進んでいる。ならば足を進めるしかない。一人取り残される恐怖よりましまど、多くの者は思つてている。

当然例外もある。

「皇子、皇子！ 外の世界とはこのやうなものござりますか！」

「ええ、そのようですね」

例えばそう、とある蘇我陣営のとあるお偉いさんだつたりとか。

そのお偉いさんらが都から離れたのは初めての事だつた。何でも

初めてのことというのは、期待や不安で心がいっぱいにあるものである。

それでもいっぱいになつたはずの片隅に欠けたものを感じていた。「布都も来ていると聞いたのですが、……あいつはどこにいるので？」

「ああ、の方なら物部方にいるそうですよ」

「な、何故です？」

「何故つて、物部だからではないでしようか」

「でも、あいつは、父上のつ——」

言葉は続かなかつた。言葉にしたくなかった、でも言葉にしないでもいられなかつた。随分と布都とは言葉を交わしていない。会つたと、ちゃんと言えるのはどれだけ前の事だろうか。でもあの時は代わりに父がいた。そして今はいない。

言いようのない不安、けれども一人でもない。だから、何か紛らわそうと話しかけようと——。

「——神子様」

突然現れた何者かに、先を越された。

「つわあ！」

驚く——も、そつちのけで会話が始まる。

「そろそろ近づいてまいりましたわ」

「その貴方の言う、例の国ですか」

「はい。もうビンビンですよ」

「すぐというわけですか」

「いえ、正確にはもう少しあつた気がするのですが、不思議ともうすでに色濃く感じられるくらいに近寄つてると言つたところでしようか」「つまり？」

「楽しくなりそうです

「……そうですか」

「ああ、一応言つておきますが、死なないようにお願ひいたしますね」

「それは問題ありません」

「それはよかつたです。全てを捨てて逃げるくらいの度量がないと、上には立てませんから」

「言わなくとも分かっています」

そこにいるのにのけ者にされるというのは、気分の良い体験ではない。割つて入る。

「——つ皇子、この者は一体何ですか」

「つあ、えーっと、それはですね……」

何やら言いにくそうにたじろぐ様が実に怪しかった。妙齡の、それも美しい女。もしや——。

突如、首周りに生暖かいものが包み込んできた。

手。

「ひつ

「どうも、初めまして?」

びくつと身体が跳ねるも、身を腕で包み込まれ、振りほどくにも勇気が要つた。

「菁莪娘々と言いますの。どうぞよろしくしてくださいね?」

好感度全開な声の感じ。なのに背筋が震える。

「わ、私は、べ、別に……」

「別に?」

「ひい」

急いで離れ、この場で唯一安全な背中に貼りつく。

「お、皇子、あの者は怪しい、——怪しいですよ!」

「あら酷い。私のどこが怪しいのでしょうか?」

「全部だ全部!」

「あれれ、嫌われちゃつたのでしょうか?」

至極残念そうに頬に人差し指を当て首を傾げる様に、少し後ろめたさを覚えつつも同情は出来そうにはない。

「菁莪、あまり屠自古をいじめないでやつてください。そういうのは不慣れなのですから」

「それは失礼しましたわ。あまりにも可愛らしいので、つい」

「あんまり揶揄つてると、怖い保護者が出てきて苦労しますよ。知つているでしよう?」

「の方、急に切り替わるので見極めが難しいのですよねえ」

「その割にはずいぶんと迫っていたみたいですが」

「境界を見極めたかったので」

「なるほど。それで何か分かりましたか？」

「これがまつたく」

「駄目ではありますんか。一応人伝手に聞いた話では、普段は温厚だ  
そうですよ」

「その者は幻でも見ていたのではないですか？」

「私もそう思う、と言いたいとこですけどね」

人間第一印象が大事。だが第一印象は所詮第一印象。時を重ねて  
いくごとにあるべくものへと変化していく。そして、あの蘇我馬子と  
いう人物が下した判断は、一考を超えたものとしていいはずだ。だが  
同時に軽口に悩まされているだけという線もある。当人にとつては、  
そんなつもりは無かつたと本気で言うかも知れない。ただこちらが  
勝手に深読みして勝手に悩み果てただけだと。

そんな悲しいこともそうない。

手の平で踊らされるのは絶対に避けたいが、勝手に踊っているだけ  
という無様はもつと避けたい。



物部側の役目は先行偵察のようなものであるが、その補給を全て他  
者任せにしているわけでもない。自分たちもある程度の食糧は  
持ってきているし、水だって汲んでくる。奥深くまで言つた後に、食  
料の提供を拒否されたらどうなるかは自明である以上、当然の自衛措  
置である。

布都も川辺を探して歩いていた。

探そうと思えばすぐに見つかる布都是、集団からは離れて歩いて

いた。一人の方が気が楽だし、なにより足を引っ張られることもない。

感覚を澄ませば、すぐに川のせせらぎの音すら聞こえてくる。

あとはそこへ向かつて歩いていくだけ。

わざわざ知らせてやらなくても、いずれ他の者も気づくだろうと教えに行つてやるつもりもない。すれ違えば、方向くらいは教えないこともないが。

何かあればそのまま死につながるような地で一人でいるというのは、実に変なこと。もし一人でいるような者を発見したならば、まずは疑いから入るだろう。

だから布都も、木々を抜け川を目にした瞬間、疑つた。  
視界には、川辺で背を向けた状態で、しゃがみつつ水面を覗き込んでいる者が。

布都の疑惑は強みを増す。

人のような生き物がいるならば、川を探そうと感覚を澄ませた時に発見しているはずである。なのに実際に目にするまで分からなかつた。

一見無防備な背中があまりにも危険に感じる。分かつている危険とは違う、正体不明な危険。分からぬからこそその危険。予想が出来ない。

未知は既知にする為には、行動を起こすのが近道。

布都は口を開いた。

「そこで何をしている」

無防備な背が動いた。

「——それはこっちの台詞だと思うけど?」

正面を向いたそれは、ただの少女のようだつた。もちろん”ただ”とつけるとおかしい所がある。この国では見ない、金色の髪。その上に奇妙な帽子。

「では何者だ?」

「そもそもこっちの——、いやいや。通りすがりの女の子つてことにしとかない?」

「ではその通りすがりの女の子はここで何をしていたのだ？」

「うん？　ただ見ていただけだよ」

「水面をか？」

「そう。正確には川の流れだけど」

「おもしろいのか？」

「面白いというか、興味があるのさ」

「ふうん」

子どもはそういうものが好きであることは布都も知っている。そして目の前の少女が、いわゆる『子ども』でもないことも知っている。だが、そういうことにして欲しいらしく、その様子を崩さない少女。これ以上問い合わせても仕方がないので、手段を換えることにした。「こんなところで、どうする気だ？　夜も近い。迷えば死ぬことになると思うが」

「確かにその通り。お互にね」

「そうだな」

話の平行線。

「……まあいいや。少し歩み寄ろうか。——でだ、迷子つてわけじゃないんだろう？　もし迷子なら道案内でもしてやつてもいいよ。もう用事は済んだし、戻ろうと思ってね」

「迷子というわけじゃないが、もしお前が帰り道の心配をするなら同行してやつてもいいぞ」

「いいね、そういうの好きだよ。私の周りはお堅いやつばかりで、話してもつまらないんだ」

互いに歩み寄る。

「私は、諏訪子。そつちは？」

「我的名は布都。ただの通りすがりだ」

「ふうん」

じろりと上から下まで舐めるように見られる。

「良い剣を持つてるね。ちよつと興味あるな」

「残念だが良い剣ではない。なんなら触らせてやつてもいい」「本当に？」

「ああ」

布都は腰を前に出し、諏訪子に抜かせようと促した。

「……やつぱやめた」

「いいのか？」

「つまらないからね」

「そうか」

二人は川を発つた。

少し歩き、物部氏の集団まで行くと、布都は出迎えた守屋に意味ありげな目配せをして「道案内をしてくれる迷子を連れてきました」と言つた。守屋はただ頷いた。

守屋は布都が去った後に、顔をしかめ呟いた。

「よく分からんが、——今更やれることなぞ多くはないだろう」想いを振り切るよう、首を振る。

何も見えないが、きっとそうなのだろうと。認知すら出来ない者に道案内をさせる程度には腹は括り終えている。なるようにしかならないと。

## 第27話 進む行程

それから、幾度か過ぎた日の夜。

林の中に点々と明かりが灯っている。

先頭を行く物部は、常に未知と言う不安と戦っていた。後発組は、物部の残した後を辿るだけでいいが、先行く物部はそうもいかない。安全など定かではない場所で、限りなく最善の状態で休める地を探すしかない。

そんな物部氏一行も、夜が深まつた今、休息地を見つけ腰を下ろしていた。

周囲を探索し、大丈夫であろうと贊個が結論を出した結果、この場で休息を取ることになった。術者の実力と信頼性を重ね合わせた時に、物部氏の中では贊個が一番である。布都是相変わらずあまり干渉していない。周りから見た布都是、先頭にはいるが何やらぶつぶつとひとり言を言っているように見えていた。力のある者は、布都の横にぼんやりと不思議な存在を感じることが出来て、それが布都が言う迷子という者であるというのは分かつたが、実際それが何なのかはまったく分からぬままだつた。

そんな布都是重心を地に下ろし、木に背を預け、目を閉じていた。他の者も似たような体勢である。いつ何があるか分からぬ状況では、すぐに立ち上がれることが望ましいわけである。明日の為にゆっくり休息をとろうとして、明日が来なかつたら本末転倒なわけである。

「しかし、だいぶ大所帶じやないか——」

横から声がしたので布都是うつすら目を開けると、諏訪子が辺りを見回しながら立つていた。

「何だ、見て回ってきたのか？」

「ざつくりね」

「何か面白いものでもあつたようだが」

「まあねー」

言葉とは裏腹に、諏訪子は少し難しい顔をした。

「ただ、私の勘はよく当たるはず、——だつたんだよなあ」

腑に落ちない。答えは合っているはずなのに、合つてなかつたように思える。複雑で端的に言い表せない。

諏訪子の表情は猜疑に満ちていた。

が、布都には関係ない。

「勘など外れることを前提にするものであろう」

「——それは普通の人間の理屈でいいんだよ。私が気になるのは、私の勘が外れたかもしれないってこと」

「お前は巫女か何か」

「いやいや、そんなんじやがないね。近いと言つたらそうなんだけど、そこには絶対的な隔たりがあるんだなこれが」「……まあ、言う気がないのならいくら詮索しても予想にしかならないか」

「そういうこと。物分かりが良くて助かるよ」

気分良さそうにした諏訪子に、布都はまた質問を投げてみる。その身の正体について聞いても、答えてくれないであろうことは分かつている。なので、簡単なことを聞いた。

「あとどのくらいで着く?」

「もう近いよ。この感じなら明日一日歩いてれば、着くだろうさ」

朗報に、気が楽になつた。

この集団野宿は色々と面倒なもので、元の屋敷生活を何度も思い出してしまつっていた。

「つてなわけで、明日に備えてよくよく眠るといいよ——」  
声だけ聞こえた。

意味深に思え、何事か問うてみようと目を凝らしてみたが、やはり姿がなかつた。



朝になり、進行が再開されると、そう時を起たずして家屋群のようなものが見えてきた。

家人に調べさせたが、その全てが空だつた。生活をしていた名残りはあるが、どれもが時が経つていた。

「捨てられた村だろう」

それが結論になつた。

ここではそれ以上の判断は出来ないと、調査は打ち切りになつた。細かい調査は後発組みがやるだろうと先を急いだ。

ようやく近づいたという氣の逸りもあつて、無人の家屋などにいつまでも構つていられない。

近づいたという感触は全体の中に広がつていて。

家屋群から進めば進むほどに、一行の緊張感が増していく。集中力が研がれ、感覚が澄ませられる。

敵地にやつってきた。そう思えば、皆自然とそうなつた。

ただ、この頃になると不思議な何かを氣のせいと言うにはあまりにもはつきりとした形で感じられる者が多くなつてきた。

気持ちの昂りからくるものではない。進んでいるのに、どこか迷い込んで来てしまつたような感覚。何らかの領域に入つたというようだ。

それは、間違いではなかつた。

諏訪子の声。

「さて、頃合いかな——」

「んん?」

横を行く諏訪子が布都の疑問の声に応答せず、前へと駆けて振り返つた。

「ひとまずは遠くより長きの旅ご苦労」

風で布がはためくように、辺りにざわめきが起こつた。急に声が聞こえてきた、音が直接やつてきた。

「姿を見せなかつた非礼を詫びたいところ、と言うと嘘になるか。まあでも、見せてあげるから感謝してくれ」

光があふれ、その中心から一人の少女が現れた。

「どうも、私は諏訪子。——神だよ」

疑うより他に納得するしかなかつた。神が顕現するということの意味を思い知らされた。およそ有り得ないが有り得ている。そんな現実。

存在そのものが異質だった。

「……何じや？ 我は騙されていたのか？」

ざわめき困惑する中、布都は表情を変えずに首を傾げていた。諏訪子の視線が布都に行く。

「勘の鋭さとその理解の速さには驚かされるけど、それは私の助けにもなる」

「ううん？」

「さて私は神なのだけれど、神というのがどういう存在かは皆もご存じだと思う」

布都も、周囲も、話についていけない。

「私はどちらかと言うと、君らにとつての味方になり得るのさ。何故なら、計画通り行けば君たちはここで皆死ぬ予定だ」

物騒な話。仔細は分からずとも、何となく分かる。

「おつと、怒りを私に向けるのはよしてくれよ。計画したのは私じゃない。協力したのは事実だが、別に好き好んでやつたわけじやない。ある程度言う事を聞かなきやいけない関係のやつがいてね、そいつの要請なのさ」

見えてこない話を次々とする諏訪子。

「一応言つておくけど、私は信仰の強い地ならかなりの力が出せる。おそらく今君たちが想像したよりもはるかずつと強いものがね」

手を広げ、身振り手振りで説明していく。

「でだ、ちよつと諸事情で私には仕返してやりたいやつがいるんだ。だから君たちには私の味方をしてもらいたい。協力すれば、私から君たちを害することはしないと約束しよう。そしてもし協力を得られないのではれば、当初の予定通り死んでくれ。恨み辛みを深く残して死んでくれると、私の糧にもなるからありがたい」

具体的なことがまったく見えてこない。

布都が口をはさむ。

「よく分からんが、負け犬の世話をしろというわけか？」

「本当に驚かせるね。でも、少し違う。正確に言うと、負け犬の世話をしている負け犬の私の世話をしてほしいのさ」

「ややこしいな」

「ま、そいつ神奈子つて言うんだけどさ、そいつの計画に付き合つてやつてるんだ。ただ、言われたとおりにやるのも面白くなくてさ？」

首をかしげ、おどける諏訪子。

が、布都是意に介さない。

「何だお前弱いのか？ それならお前を倒して、さつさと去ることにするが」

「……言つておくけど、神の間の話だ。人間じやどうにもならないと思うね。大体私の負けたやつは軍神なんだ。真っ向からやり合つたら到底勝ち目はない」

「だがそいつも負け犬なのだろう？」

「それも神同士の勝負の話。人の物差しで測ると死ぬよ」

「ずいぶんと死を使つて脅すじやないか」

「定命の者に対するいい文句だと思つてね？ 遊びに付き合わないやつは疎まれるのさ。神に疎まれるのは嫌だろ？」

「神遊びなんぞに無理矢理付き合わそうとする神など、人から疎まれるだろうよ」

「神なんてのはそんなもんさ。だから諦めて私に付き合えよ。悪いようにはしないって」

布都是守屋を見た。

この集団の決定権は守屋にある。である以上、自分の判断を探る前に、さつさと確認しておいた方がいい。

結果、守屋は頷いてみせた。

意味するところは好きにしろ。

布都是げんなりした。

——覚悟を決めるにしても、限度があるだろう。

自分の決定で多くの人間の進退が決まる。それも生死というものの。

今まで散々避けてきたものが、避けづらい形で自分に降り掛かつてくる。実に面白くなかった。

——愚痴は聞かんぞ。

布都は口を開いた。

「付き合つてやる。——ただし、我は別に考えろ」

それが最大の譲歩。

「気が向かなければ、我だけでも去る」

その全てを置いて帰ることが、その時出来るのかどうかさだかではない。それでも口にしないと仮初めの納得すら出来なさそうだった。諏訪子は分かつていた。

「うん、分かつた。それで構わない」

「ここが合意点であると。

「とりあえずでも参加してくれるなら、それでいい。充分だ」

話は終わり。

口の次は足の出番。

足を進めなければ、話は進まない。

一行は内に様々なるものを秘めながら、その地へと向かつた。



それから少し時間が経つてのこと。  
「みく様つ」

神子の後ろにどこからともなく現れた菁莪が、抱きついた。

神子は、殺氣立つ護衛を下がらせ、殺氣立つ屠自古の頭を撫で、

「——何か朗報ですか？」

と言つた。

「はい、それもう！」

菁莪は神子の前に回り込むと、手を合わせ頬に当てながら、実に嬉しそうに話しだした。

「後は神子様の許可次第つてとこです！」

何度も頷く神子。

「そうですか、ご苦労です」

「いえ、そんなわざわざ言われるような……」

神子は咳払いをした。

「——で、当然何の話か聞かせてもらえますよね？」

「もちろんですわ。でないと話が進みませんものね」

「ええ、本当に」

神子は人の心が読めたらどんなに楽になるだろうかと、そう思わされた。本気で身に着けてみようかとも。

よそに、菁義は語りだす。

「——今から行く国の国主に話をつけてきたというわけです」「国主と？」

「はい、つまり神ですわね」

「……詳しく」

「おや、気になりますか？　そうですわね、その気の誘引がなんとも魅力なもので——」

「早く」

神子の声色に怒氣が混じり、菁義は両の手の平を広げて見せた。

「神子様、神子様」

「何ですか」

「申し訳ありませんが、そちらの可愛らしい方も」

「……ああ、分かりました」

神子は屠自古の背を押した。

「少しの間だけ、離れていてください。二人きりじゃないと出来ない話があるようなので」

「は、はい」

屠自古はぎこちなく頷くと、小走りで離れていった。途中でちらちら振り返つてみたが、どうにもならない。

「——で、そこまでの話とは何んでしよう」

改まつた神子に菁義は、

「神遊びですか？」

短く答えた。

「遊びですか？」

「そう、遊び。辺りの人間にはいい迷惑な話ではありますが、これはたいへん利用出来ます」

「知つてることを話してください」

「かいつまんで話しますと、復讐の手伝いを復讐で邪魔されそうのを邪魔をするというところです」

「ややこしいですね」

「人を使つて何かをしようとしてる神と、それを邪魔しようとしてる神。私はその前者から頼まれごとをされたわけです」

「何を」

「頭が付いた手足が欲しいとのこと」

「手が足りないと？」

「そちらしいですわよ。わざわざ向こうから頼みに来るくらいですから」

「もしかしてこの遠征は——」

青義は神子の唇に人差し指を当てた。

「見返りは簡単ですわよ。生命の保護と、その神の加護。事が上手くいけば、今まで探していた剣もいらなくなるという副次結果もつくので、悪い話じやありません」

「わざわざ断る必要もない話であるのは、間違いなさそうで」「はい。ですから——」

「乗つた上でどうやってこちらの利益を最大化させるか、ですか」「素晴らしいですわ！」

「私もそろそろ慣れてきました。特に最近環境に揉まれたせいだと思いますが」

「喜ばしい限りではありませんか。そしてこれは一つの神子様の復讐にも繋がりますわよ」

「復讐? どうしてですか?」

「この間の勝負では、実質負けでしたでしょう? やり返す機会では

ありませんか。構図としては蘇我対物部の分かりやすい図ですし」

「……なるほど」

神子は分かった。理知過ぎた。今まで経験が追いついていかつたために手の届かなかつたところに、理知が届くようになつた。だから善哉の言つた狙いに一つ言つていらない部分があることに気づいた。思えば露骨ではあつた。

気づけば、色々と疑うことが出てきた。

そもそももつと前から目をつけていたのではないかとか。思えば登場の仕方が良すぎるとか。

——我欲に忠実過ぎるからこそその邪仙か。

到つたからこそ、もう一つ思考が進んだ。

——ならば、私にとつての最大の利益とは。

それは少し難しい問い合わせだつた。

いくらか答えは出来たけれど、そのどれもが最大とするには不足なものばかりだつた。

「で、神子様？　どうします？」

「ああ、話は受けましよう。そうではないと話が進まないようです」

「では、そのように計らつて来ますわ」

「はい」

神子は、ふわりと浮かび上がり遠くなつていく善哉の背中を見送る。

「いつか欲の重みで地に落ちる時がくるのでしょうか」

地に落ちるにしても、知つてゐる知識を渡してからにしてほしい。

神子は肩落とした。

「上は扱いづらい者しかいないようで……」

## 第28話 人

夜が去つた。また訪れるまで。

物部が来た。いつまでもかは知らず。

諏訪子に案内された物部一向は、ここまで来てようやく自分たち以外の人間の姿を見ることが出来た。

家屋が立ち並ぶ町というか、村というか。町にしては活気がなく、村にしては大きすぎる。見かける人々はそのどれもが瘦せており、こちらを無感情に見て いるだけだった。

「敵対の意思すら見えないとは、不気味すぎる……」

と、不安が言葉になり、口に出す者も少なくない。

少なくともこちらは侵略者のはず、なのにどうして抵抗がないのか。

「警戒は怠るなよ」

動搖する者たちを引き締めようと/or>する者。

「一度、引き返して後ろと合流した方が……」

怯える者。

「何をお考えなのか……」

守屋がいるであろう方をちらちらと見る者。

不気味過ぎる状況に、各自の心がまとまりを乱し始める。

そもそもこの家屋群の地も奇妙だつた。文化が違うという一言だけでは片づけられない違和感があつた。

やたらと大きな路地、そこら中にある社のようなもの。その周りに家屋と畠等が散つて いる。まるで社を中心として、複数の村が重なつて いるよう。

それは無視出来るものではなかつた。

「兄上、あの社から妙なものを感じます」

前方で指揮を執つていた贊個も、守屋の元にやつてきて報告をしに来ていた。

「……どううな」

「分かるのですか？」

「村の構造を見れば、あれが何かしらの意味を持つていてることは分か  
る。少なくとも、神を見た後だ。疑わざにいる方がおかしい」

「なるほど。で、兄上はどのようになさるつもりで?」

「どうもせん」

「は?」

ぎよつとして聞き返す贊個。

「むしろどうすることが出来ると言うのだ。もう我らは賭けた後よ。  
あの神が足を止めると言うまでは、黙つて進むしかあるまい」

「しかし、それでは——」

「もう遅い。このまま引き返し、ヤマトの地まで逃げるか? 物部は

求心力を失い、蘇我に戦うことすら出来ずに敗北するだろう」

「いえ、そこまで引かずとも、少し引きそこで待つだけでよいのではな  
いでしようが」

「我らは先鋒だ。何故、先鋒か。後ろを頼れば、逃げ帰るのとそう大き  
くは変わらない。我らは我らでやるしかないのだ」

「……だから賭けですか」

「ああ」

物部の名聲が掛かっている。これが物部を支える大きな柱にして、  
蝕む病。

「賭けの対象は一つだけでしょうか? 二つ、いえ三つにすることは  
出来ませんか?」

「諦めろ。お前の言いたいことは分かるが、どの道この状況では失う  
方が多い。物部が王朝でどのような立ち位置であるかを忘れるな」

「ですが——」

「くどい」

食い下がろうとする贊個を守屋はさえぎると、もう一言付け加え  
る。

「もう一度言おう、”この状況”では失う方が多い。以上だ」

「……よく理解しました。私は私の責務を果たします」

贊個が前へと戻つていく。

鼻を鳴らす守屋の横に、諫訪子が蛇のようにによろりとやつて来て

いた。

「……へえ、聞いてたよりはるかに理知的じやないか」

「神が何の用だ」

「いやあ、やっぱ人間つて面白いって思つてね。花は咲くときと散り際が美しいけれど、人間はどうかなつてね」

「悪趣味なことだ」

「人は好きだよ。ただ人のとは違つて、神としての好きだけど

何とも安心出来ない言葉。

守屋は横目だけでちらりと見ている。

「だからさ、一応言つておこうと思つてね」

神とかいうものがわざわざ前置きを置くなど、不吉以外に何があるだろうか。守屋は即座に覚悟した。

「私の裏切りは初めからバレてる」

「ああ」

「驚かなくて安心した」

「予想の範囲内だ」

「じゃあもう一つ、向こうは蘇我を味方に引き入れて私に対抗しようとしているみたいだよ」

「……確定と思つてもいいのか？」

「いいよ。私の知り得る限りの情報からするに、間違いないとまで言えるほどだ」

「そうか」

神と神の戦い、物部と蘇我の戦い。

「……こが明暗になるか。それとも布石に終わるか」

リスクの高い賭けなんてものは、何度もしたくないもの。そんな賭けは一度で済ましてしまいたい。賭けに勝ち続けられると思うほど愚かでもないし、負けると決まつたわけでもないのに絶望するほど怠惰でもない。

「出来る限りことをする。要は何をするか、それだけだ」

上手いくときというのは、案外その直前まで不安でいっぱいたりするものだ。不安で細心なくらいが良いのだろう。慢心は知を

暗くして失敗を招く。

しかし、結局のところ――。

「神にでも祈るか」

「お、信心深いね。良い事だ」

「別にお前に祈るわけじゃない」

「それでも、さ。いや私に祈つてくれて構わないのだけど」

「何の神かも分からんのに信仰できるか」

「おつとそれは失礼。私は土着神、まあ――祟り神さ」

諏訪子の口が深く割れ、濃い笑みを表した。蛇のような長い舌がちらりと顔から首まで出てくる。

「一重に神なんて言つても、色々さ。祟り神もまたそう。上も下もある。小さな神々を従える私はこの地では、最上級の力を持っているのさ」

「それは頼もしいことだが――」

「そう、懸念の通り。相手は軍神。まともにやり合えば負ける。数をそろえたあいつに勝つのは、正攻法じや駄目だろうね。それで負けたやつが言うんだから、間違いはない」

「では正攻法ではない策が知りたい」

「それは私も考え中。ただ勘の赴くままに動いただけにすぎない。考えるのはこれからさ」

「なんとも行き当たりばつたりなことだ」

「それでも、やるのさ」

「……神も人もそう変わらないということか」

空は青かった。

布都は少し離れたところで話していた。

わざわざ物陰に隠れてひそひそと。

「――というようなわけなんですけど、どうでしょう？ 私と組みませんか？」

「……私たちと言わなのが肝か」

「お目が鋭いことで」

「あちこち飛び回つて、苦労なことだな。努力家だとは知らなかつた」

「仙は努力の賜物でござりますゆえ」

「ならば我には向いていないな」

「ご謙遜を。人と死を超越すれば、それはおよそ仙ですわ」

「化け物と何が違うのか知りたいものだな」

「品性、でしようか？」

「よく分かる解説でびっくりした」

密談である。長話は出来ない。

すぐに話は終わり去つていった。

布都は集団へと戻ると、複雑な表情をしている守屋に近寄つた。

「なにやら浮かない様子ですが」

「ああ、布都か。少し思うところがあつてな」

「聞いても？」

「ああ」

守屋は少し遠くを見るような目つきをした。

「実際に神なんてものと言葉を交わしていると分からなくなつてな」

「何がです」

「何に頼り、何に賭すのか。全てを奮うにあたいするものかどうか。

そんなどこだらうか」

「なんと兄上らしくもない。迷いを言葉にすることは」

「……神のせいだらう」

「ならば搖きぶつた神を信仰して、根の強い信心でもつて事に当たる

ほかありますまい」

「それが出来たら苦労はしないのだが」

「……本当に迷つておられるようで、少しごつくりしました」

「どうか。悪いな」

「いえ、我的ことならばお気遣いなく。ただ――」

「分かつてゐる。下には見せられない。組織の頭が迷えば、手足は不

安で堪らなくなる

「ですが迷つたままで」

「それも分かつてゐる。良い結果はつかないだろう」

時が進んでいく。時代が変化していく。

今でも大連の地位にふさわしいだけの力をもつてゐる物部氏。個々の能力は他の豪族と比にすらならない。なのに、時が進むにつれて味方は減り敵が増えていく。最大の敵が時であるように感じる。その潮流を上手く使つてゐる蘇我は見事というほかないが、問題はその潮流 자체である。

妖怪を追い払い、人の生活圏を広げていく。その先頭こそが物部氏であったが、いざそれが叶い、人の生活圏が増え人口も増えていくと、人と人との繋がりが強くなってきた。妖怪を前にすれば、人は人同士として結びつき合うが、人が人を前にすれば、人は人の勢力で結びつき合う。

人が安心を掴んでいく今、比例するように物部の名声は薄れていく。少なくとも、こんな地まで遠征するはめになるくらいに。もし、このままこれが加速していき、物部がいなくとも妖怪から身を守れるんじやないかと思われるようになれば、そこが物部の最期だろう。

人の繁栄が物部の衰退を生んでいく。

それに対し、物部が必死に力をつけたとしてどれほどの意味を持つだろうか。何とも見当ちがいな努力をしてゐるようにしか思えなくなる。それでもそうするくらいしか出来ないのも現状。もし、蘇我から力を持つた傑物でも出てくれればそれすらも崩れてしまう。

守屋は思わず涙を得ない。

人の下について、人の意に応えるだけならばどれだけ良かつただろうかと。自由に人を動かせる立場にいながら、何一つ動かせないない現状じやなければと。

物部獨力で国と渡り合えるような力を持つしかない。

でもそれだといずれ国と敵として扱われる。それこそ今まで追いつてきた妖怪のように物部が追い払われるだろう。

「ままならんな……」

光明が見えずに呟く守屋。

何一つ関わる気が無かつた布都も、こう滅びの道を見せられてくると、どうにも言葉にしづらい感情が浮かんできた。子どもの頃はめいといっぱい遊ぶことが出来るが、年を重ねて大人になつてくるとそれが少しずつ叶わなくなつてくる。様々なしがらみが足に纏わりつき、心をも蝕む。

布都は時の流れを感じた。

ただ、布都は守屋とは少し価値観が異なる。

「時は平等ですよ、兄上」

布都は守屋の目を直視した。

「いずれ、皆等しく滅びを迎えるのです。物部も蘇我も」

「早いか遅いかだと？」

「ええ、それだけでしょう。であるなら、滅びる前に綺麗に咲けばいいではありませんか」

「どう咲くがいいと？」

「それは兄上が好きなようにすればよいでしょう。未来は未来です。未だ来ていないものです。であるならば、物部も蘇我もどちらが先かは分からぬ。もしかしたら、手を取り合うやもしれなければ、同時に滅ぶかもしれない。——不確定、素晴らしいではありませんか」

「個として、自由に動いてきたお前だからこそその言だな。物部を名乗り続けるお前の結論であるなら、それもまた物部の一つだろう。心に留めておこう」

「雲は晴れましたか？」

「いや、足が軽くなつたくらいだな」

「それはそれは」

## 第29話 気にくわないもの

時も足も進んでいく。

どちらも進む以外に術を知らない。

進めば、変わり映えのしない光景にも変化が見えてきて、視線が行く。

境の分かりづらい村の集合群を抜けると、さらに大きな村が見えてきた。とはいっても、見える範囲での変化はそうない。ただ大きく多くなつていつたくらい。とても大きな村、——都といつてもいいのかかもしれない。だがそこには商業施設等の建物が見当たらない。相変わらず民家と社のみ。ただそれが大きな円を描くように寄り集まつていて、その中央にと大きな社がそびえ立つていた。

その中心付近にまで物部一行はたどり着いた。

——どうするか。

予想と大きく違う展開に戸惑う人たちを置いて、布都は別行動をとつた。

少し離れると、空を見上げた。　くすんだ空は如何様にも姿を変えそうだった。

——自分は必要ない。

そう思つた。

諏訪子と名乗る神はどこに行つたかは知らないが、姿が見えない。侵略しに来た集団に対し、抵抗の一つもしない民衆にこちらとしても何かすることもなく、淡々と行軍が進んでいく。神が危害を加えないと言つたのをどこまで信用するかという問題でもあるが、実際として危険が見られないとあれば、気も変化してくるというもので。

つまるところ、何かあると思つていたのに何もないでの肩透かしをくらつて退屈になつた。

集団行動などしてては、見つけられたかもしれない楽しみを逃してしまう。布都にとつては、別行動をとるには充分すぎる理由だつた。

木を隠すなら森の中。見られたくないものは煩雜かつ小さなところ

ろに隠すもの。幾重もの戦闘の経験によつて磨かれた勘を頼りに、隅の方から探索していく。

隠したいものというのは、陰気なところに持つてくものである。気分がそうしたがるのか、それとも陰気という属性が為にそこへ行きたがるのか、それは分からない。

民家に挟まれた狭い路地。

日中のほどんど影が差すせいで、地も空氣も湿つていて。

布都は、話しかけられた。

「あんた、外から来たのか？」

くたびれた男。頬がこけていて、目だけがぎょろつと力を感じさせた。まともに立つのも辛いのか、壁に背を寄り座つている。よく見ればまだ若いことが分かる。

「……そ、うだが何だ？」

「そりや良かつたな」

「何故？」

「ここまで来るつてことは、そういうことなんだろう？ 安心しろよ、ここに居る限りは殺されはしねえ。神様がいるからな」

離しているだけで陰気が移りそうな男に、話を止めたくなつたが、向こうから快く情報をくれるようなので乗ることにした。

「……何かしてくれるのか？」

「そうだ。守ってくれる」

「それは結構なことだな」

「だろう？ 僕もここに来てから妖怪なんぞ見もしなくなつた」

布都は、小さく鼻で笑つた。

妖怪からは襲われるだけではなく、襲い襲われるそういう関係にある。神に祈りを捧げつつも、武器を研ぎ、術を鍊磨し、妖怪を払わんとしてきた大和の者たちは考えが違いすぎる。神に守られるかわりに、牙を捨てるなど考えられないこと。それとも、実際に守られてみればそういうものなのだろうか。

「……ただ、死なないということだねえ」

「どういうことだ？」

「あんた、見たところ良いとこの出だろ？ 何だつてこんなところに追いやられたかは知らないが、ここじや身分なんてない。神か人かだけだよ」

「早く話せ」

「そうかよ」

男がようようと立ち上がった。

笑みを浮かべているが、ひどくぎこちない。

「命の安全を命で買つてるのさ。ここにいれば殺されはしない。神は人を殺さない。つまらない話だ」

「どうやつて買う？」

「そりや信仰だろう」

——信仰とは何なりや。

と、問おうとしたが先に答えが返ってきた。

「簡単なことさ、期待に応え続ければいい。命を削つて捧げるような祈りを捧ぐのさ」

「本末転倒であろう？」

「はは、まつたくだ。だが、向こうの理屈はこうさ、『元に還つている』だとよ」

「頭がおかしいんじゃないか、その神は」

「まつたくその通り！」と言いたいところだが、それは人の尺度だろう

う

神の尺度を採用したような言葉。

「お前はそれでいいのか？」

「良いも悪いもない。ここに来てしまった以上は、受け入れるしかない。自分の番が来るのその時までただ生きるだけ。逃げれば、妖怪に喰われて死ぬだけさ」

「この周囲に妖怪は少なかつたが」

「運が良かつただけだろう。現に逃げた奴は全て屍で戻つてきた」

「見たのか？」

「いくらかな」

思つたより饒舌だなと思いつつ、続きをうながす。

「そう言えれば、いくらか人に会つたが口を利こうとしなかつたな」

「そりや簡単だ。長いやつほどそうなる。話すことなんてない。ただその時が来るまで生きているだけだ」

「お前もいざれそうなるのか？」

「……冗談じやねえ。つて書いてえどころだが、どうしようもねえ」

「なるほどな」

「命を削つて命を買つてるんだ。命を買うのを辞めて、外に飛び出せば削る命が無くなる。これじやどうしようもない。お前さんも覚悟はしておいた方がいいぜ」

「なるほど、よく分かつた。あいつが命を使つて脅してきたわけがな」

「……何の話だ？」

「ああ、気にしなくていい。こちらの話だ」

布都は不思議だった。

少し不快になつている自分が不思議だつた。

他人に、それも出会つたばかりの他人に情でも感じたのだろうか。不思議で堪らない。でもその前に。

「——お前何だ？」

布都は男を蹴り飛ばした。

男の形が崩れ、小さな蛇の集まりとなつて周囲に散つて行つた。

「いやあ、おみぐど！」

声の方向。横を見上げると、民家の屋根に諏訪子が座つていた。

「……不快な茶番だな。気分が悪い」

「そうだろ？ ええつと、物部布都だつけ？ 想像の通りさ。蛇の集合体に術をかけたものだ」

「靈魂だけ本物でか？」

「そう。彼はちょうど昨日に元に還つたのさ。そこに私がちよちよいと細工をしたというわけだ」

「で、我にあんなものを見せたわけを聞こうか」

「……ひどいもんどうう？」

諏訪子は顔をしかめていた。

「この地は元は私の地だつたんだ。祟り神だなんていつても、祟るこ

としかしないわけじゃない。ちゃんと人に恩恵だつて与える。言つたろ？ 私は人が好きだつて。でも、それがために負けたのさ。この

地と私の神力を奪いに来たやつにさ。私が私だけのために戦えば負けはしなかつたけれど、そうすればこの地は不浄の土地になつてしまふ。人なんてとても住めるものじやなくなる」

気づけば、諏訪子は地上に降りていて、目の前に立つていた。

「元のあいつは悪いやつじゃないつて知つてはいるんだ。でも、今のがいつは復讐で眼が眩んでる。あいつの下についた私は従うしかない。あいつの目的が叶えれば済むと思つたけれど、その前にこの地の人々が持たない。だから私は賭けた」

「物部にか？」

「そう」

「何故？」

「勘だよ」

「真面目に言つてゐるのか？」

「真剣だよ。これ以上ないくらいに。全てをその勘に委ねたのさ」

「どこかで似た話を聞いたな」

「私も聞いてたよ。だからやつぱり私の理知より私の勘を信じようと思つた」

「理知を信じればどうしていた？」

「もう一個の集団の方に交渉に行つていたかな？ なんかすごく力を持つたやついるだろ？」

「今からでも遅くはないぞ？」

諏訪子の言つてゐるやつが誰だか分かると、笑いが込み上げてきた。

「つづく、神に頼られたとあれば、それはもう気持ちよく返事をするだろう」「なるほど、そういうやつか。でも、もう遅いみたいでねえ」

「それは残念だつたなあ」

「そうでもないさ。あいつが選んだつてことは、私には合わなかつたろうし」

「ん？」

諦念を混じらせ諏訪子は笑い、咳く。

「……過去と遊ぶのは神のやることじゃない」

悲しいことや辛いこと、たくさんあつた。けれども、神が直接人間に干渉しすぎるのは神格を弱めることに繋がる。神格が弱まれば、他の神に下されることもあればその存在を保てなくなることにもつながる。

それでも耐えきれなくなつた想いが身を動かした。

「私はね、神も人も巻き込んで遊びたいんだ。もちろん皆笑いながら」失敗すればどうなるか。考えなくとも分かる。

「神が祈るなんて馬鹿な話だろ？」でも毎日祈つた。川に神力を流して吉兆を見た。そしていつも変わりがなかつた流れに流れが出来た。その搖れがどういうものかははつきりと分からなければ、私の勘はそこに賭けるべきだと言つた。だから私は動いている。私は勘に従つているのさ」

眉をわずかに寄せ聞いている布都。

諏訪子はじっくり見る。

「上手く隠しているけど、秘めた力は相当。私の勘は良い方向にあると思つたね」

「我より上のやつもいたんじゃないか？」

「……そう。だから正直勘が外れたのかと危惧したよ。でも今なら大丈夫。賭けられる」

「理由が分からん」

「簡単さ。こいつに賭けたのなら失敗しても仕様がないと思えたからさ」

「失敗してはいかんだろう」

「至極その通り。でもそこが重要なのさ。失敗することを考えていては成功しない。余計な思考はいらない。理屈が出てくる場面じやない。失敗した時の覚悟はすでに終わらせた。あとは全力で事に当たるだけ」

雰囲気は軽くとも、言葉は重い。

「その全力があの不快な真似か？」

「それも一環。輪の外にいるからちょっと不安になつてね」「お前の願い通りに動いてくれるかと?」

「平たく言えばそうなる」

「言わないと?」

「動きを縛るつもりはない。むしろ存分に動いてくれていい。けれど方向だけはある程度同じところを見ていて欲しかつたんだ」改まる諏訪子。

布都は存念を素直に言うことにした。

「別にお前と敵対しようとは思つてはいない。これから別な事情でも入らなければであるが」

「ああ、それでいいよ」

「一応改めて聞いておくが、お前の目的は復讐だつたか?」

「そう。すごく簡単に言つた形だけどね。もう少し言葉を足すなら、あいつの復讐の阻止」

「つまりこういうわけだ」

諏訪子の言動と、この地の現状。

「この地の民を使つて何かしようとしているのを止めたい、——そういうことだな?」

「うん、当たり。あいつの計画通りにいけば、この地の民は持たない。怨恨を集めて神具に封入して武器にするのが計画。その怨恨のためにこの地の民は苦しまされている。そのために生かされている。で、その怨恨を操れるのは私だけというわけ」

「で、あれこれと迷つているうちにこうなつたと?」

「……始めはただの信仰合戦。でもそれじや土着神には勝てない。だからあいつはあいつを信仰しなければ生きられないようにしたのさ。妖怪を使ってね」

「生死による恐怖か」

「ま、そんな感じで、徐々に押され、最後は力押ししさ」

要は分野が違う。神と言うのは漠然と神ではなく、何かしらを司る神である。諏訪子は土着神、もしくは祟り神。そんな諏訪子の攻撃手

段といえば祟ることであるが、相手が神であれば如何ほどの効果があるか。しかし、土着神として強く信仰され多くの神を従えている諏訪子はこの地ではまさしく最上位の力を持つていた。その気になれば神さえも祟り滅してしまえるくらいの。しかし、それほどの力を崇りとして現世に出してしまえば、辺りはとても人の住める地ではなくなる。それは本意ではない。結果、諏訪子は畠違いの戦いをするしかなく、結果敗れた。

諏訪子はため息を吐いた。

「前に会った時はもつと大らかというか、気が大きいけど気さくなやつだったんだ。だから油断してたというのもある。どこか様子が違うあいつのことを、ちゃんと考えなかつたのが失敗の要因だつた。……でもまだ失敗出来る。最後の一回が残っている」

えらく重いこと。

「物部にとつてはえらく鬱陶しい話だ」

「似た物同士つてところだろ？」

「馬鹿言え。失敗出来る回数がわずかに違う」

「それは失礼——」

話はそこで途切れることになった。

布都も諏訪子も空を見上げた。

「そろそろだね」

「……物騒な空だ」

天がうごめいていた。



不穏な空も、不淨な空も、同じく空。空だけはずっと続いている。

上を見上げてみれば、見えるものは空のはず。布都是目を陥しくした。

後発組がたどり着いたらしい。それに合わせて空が変わり空気が変わった。何かが起こる。

「これが神というやつか」

見上げた空の違いに気づけるのは一体どれだけか。

天候を変えるとかいう次元の話ではない。

性質そのものが変えられたような変わりよう。

「それだけあいつも本気だつてことさ」

常人には見えない力の渦が、空に蓋をしたように覆っている。その力が集まる中心に何かがいる。それが何かは考えずとも分かる。

「あとは事を起こして、あそこに流れる力が増やすだけというわけか」「その通り。それで一時的にあいつは強大な力を得る」

「一時的に、か」

「そう。所詮入れ物には合わない力だ。抑え留めておき続けるのは無理がある。だから入れ物を用意して、それに移す。あとはそれを使って復讐するっていうのが、あいつの計画」

ぼやかされると、聞きたくなるもの。

「その入れ物とやらは用意出来たのか?」

「ああ、多分ね」

「多分?」

「私にははつきりとは分かつていない。あいつの方が詳しいしね」

「ずいぶんといい加減なことだな」

「やるのはあいつだ。私は所詮ちっぽけな土着神さ」

「ふうん」

まだある。

「それで、結局どうするつもりだ?」

「私かい?」

「それもだが、その計画とやらもだ」

「簡単な話さ。人と人を争わせて、怨恨を加速させる」

「争うもなにも、こここのやつら無気力すぎるであろう」

「誤算だつたろうね。人という者を理解していなさすぎたんだろう。

ただ生きているだけじゃ、人間に活力は湧かない。存在することそれ

自体に意味を持つ神とは違う

「じゃあどうするつもりだ」

「もう想像はついてるんじゃないかい？」

布都は睨んだ。

「お前——」

「おつと、やめてくれよ。私は嘘は言つていない」

布都は諷訪子の言葉を思い出した。「私からは君たちを害することはない」という言葉を。

「……誘導はすでに済ませたというわけか？」

「嫌だな、私は手足の一部のように動いただけだよ。他にもいるって」「それに加担するようなやつは、よほど性根が悪いな。裏でこそそと、自分は直接手を下さずに入だけを動かすらしい」

「待つてくれよ、私が直接どうこうするわけにもいかないだろう？」

私は私の出来る範囲で全力をしているだけだよ

嘘はなくとも、やはり意地が悪い。

「蛇のように長い舌のわけが分かつた気がする。器用に包んでしまえるのだろうな」

「おいおい、一体何だつて言うんだ。所属感が強い人間にはとても見えなかつたのに、どうしてそんなに当たつてくるのさ」

「知るかよ」

布都はふてくされた。

そんな疑問は自分の中でもあつた。その違和より、不快が勝つた。

——余計なことを。

そう思つた時、布都は不快の訳を理解した。

物部と蘇我。その争いを、どこからか出しやばつてきた神が自分たちのいざこざで余計な手を出してきた。

——気にくわない。

どちらにも情のようないわけではない。でも、争つている以上はどうしても勝ち負けは出る。それはそれで仕方がないものだと思っている。でもだからこそ、その結果をよそ者がちよつかい出してきたのが気にくわない。

人と人とのが、その知性と情熱を傾けて競い争つてゐるところに、神  
が自分たちの都合で邪魔をしてくる。例え勝敗の結果が変わらな  
かつたとしても、不快感は拭えない。

布都は自分の言つたことを思い出した。  
協力するかどうかの時、「気が向かなければ、我だけでも去る」と  
言つたことを。

——去つてやろうか。

それも悪くないと思える。

ただその時は間違えなく、形成は蘇我に一気に傾く。

そこには神子がいる。そして邪仙がついている。

いくら物部が精強であると言つても、この場ではかなりの不利を被  
る。

——駄目だ。

「……結局は、我也個を押し通すことが出来ないのか」

そもそも個とは、他の個がないと区別出来ない。集団がないといけ  
ない。生物が自分しかいないのであれば、個という概念を感じること  
も出来ないかもしれない。人は人を感じずには、連帯感も疎外感も感  
じることが出来ない。個を強く感じたければ、集団を意識するのが一  
番。そしてその集団の滅びを見ることを喜べそうにはない。それが  
どちらとしても。

「少し、修正がいるようだ」

「ん？」

酔つた様に、その場を最大限楽しむのが良いと思つた。でも今では  
それだけでは不足があると思つた。少なくとも、人が人として生きる  
には足りない。

「結末に納得してやる」

それが例えどんなものでも。

「そうやって我は我を通して見せよう」

答えは更新されていくもの。

だから今はこれでいい。

人が願いを持つて全力で走るのなら、その結末がどんなものであれ

納得するしかない。やり切ったのであれば、そうするしかない。叶うことを願わない限りはきっとそう。

「変えてやる——」

布都は最後だけ吐き捨てた。

## 第30話 理解

呪いと願いはどう違うのだろうか。もしくは願いの一種なのだろうか。恨み辛みが意思を押し、呪いへと到る。手を合わせ、願おう。『世に幸あれ!』と。

もう発端など誰も分からぬ。気にしている暇などない。ことが始まつてしまえば、切つ掛けなどそう大事なことではなかつた。ただ目の前の敵を撃ち払う。殺す。感情をぶつける。幸あれ。自分に、他人に。

喧噪の声。

怒声と悲鳴が飛び交つていた。

——どうしてこうなつたのだろう。

贊個は力を奮いながらも、脳裏ではそう思つていた。

始まりは分からぬ。ただ、何かしらのいさかいがあつた。知らせ受け、事を荒立てるのはまずいと急行したはず——。

「どうしてつ……」

来るのなら、迎えなければならぬ。そうしないと仲間が死ぬ。だが、代わりに相手が死ぬ。例え自分が殺さなくても、仲間がどどめを刺す。

夢は無残だつた。理想は汚れた。

戦うことでは決して得られない結果を求めた。

独りでは立つていられないことは分かつてゐた。だから、同じ人間ならば手を結びあえると思つた。少なくとも、妖怪を前にしては人間という一つの塊になれるのだからと。

だが、結果はこれだ。

上がる断末魔。地を濡らす鮮血。

一帯の温度が上昇し、熱気を纏う。

襲い来る鉄器。

「くそつ」

やられるわけにはいかず、反撃。

その度に人が死ぬ。

伸ばした手は星どころか、月にさえ届かなかつた。空を搔いただけの手は、人を殺すだけだつた。

見上げた空は禍々しく、とぐろを巻いていた。

地に在る身体で、手をいくら伸ばそうと届くはずがなかつた。声が空まで響くわけもなかつた。天の意思是聞こえない。自分たち人間がアリの喧嘩を見ているように、天もまた同じように見てゐるのかもしない。聞こえるはずがない。届くはずがない。

世界は何一つ変わらない。自分の見えるところを世界と呼ぶ人間なら世界が変わる。でもいつかは気づかされる。我々とて天からすればアリに過ぎないということを。

どれだけ力をつけようとも、どれだけ人の上に立とうとも、変わらない。

空は地上から怨恨を吸い取つていた。

——どうすれば。

解は簡単だつた。争いを止めればいい。

でも手段は無かつた。声は届かない。

最上の策とは、自然とそうなつたように事が進むことをいうらしい。

では自然とはなんだろうか。神だろうか。

恨みを吸い取るのならば、神への恨みも吸い取つてもらいたい。

この渦に飲まれるしかない罠に嵌めた全てに。——幸あらんこと

を。



物部勢が押し、蘇我勢が押されている。  
——旗色が悪い。

熱が迫つてくる。

「お下がり下さい！」

必死の形相でやつてくる家人。

なんだか人の尊厳なんてものを考えてみたくなる。

人は誰だって自分が一番大切だらうと思う。そうでなくとも、近しい人。家族や恋人、もしくは主。そういうものを上げるのではないだろうか。

どれも大事なれど大切な、そんな人間たちがあつけなく倒れていく様を見ていると、価値とか尊厳とかそういうものを考えたくなる。昨日笑っていた顔が浮かぶ。声が浮かぶ。

人と人が争っているのに、この不条理感一体何なのだろうか。人とはこんなに簡単に動かなくなってしまうものなのかな。物になつてしまるものなのかな。知識の上では至極簡単なことでも、現実でこうも見せられると自分が実のところでは何も知らなかつたのだと、知つたつもりでいたことに気づかされる。

だから、間違つていなかつた。

——不老不死しかない。

この唾棄すべき現実から離れるには、やはりそれしかない。

「お、皇子っ」

抱きついてくる屠自古の頭を撫でる。

「私のそばにいれば心配はありません」

ただ、これは一体どうしたものだらうか。物部の強さ、想定の倍どころではない。個々の能力が高すぎる。仮にも訓練を受け武器を持った兵たちが、ろくに抵抗もできずに倒れていく。組織的な動きが保てなくなってきた。旗色があまりにも悪すぎる。少なくとも、前にいるとはいえ、総大将である自分の眼前まで敵が来ているくらいには。

は。

「つ皇子!! おさがり下さい! ここは持ちません!!」

叫ぶ家人。

「くそ! 物部め!」

恨みをぶつける家人。

体勢としては受けの構え。現実は、構えではなく押されて凹んだにすぎない。

——このままではまずい。

あまり前には出ないようにと言われていたが、この際仕方がなかつた。

「落ち着きなさい！——こには私がいる！」

屠自古を置き、前へ踏み出し、剣を抜く。

次に次にと攻め寄ろうとしていた物部の兵を、抜き放つた剣の放つ光彩だけで吹き飛ばす。

「そこの者」

近くにいた家人に目配せをする。

意味を理解した家人が屠自古を連れ、後ろへと下がっていく。

「敵は強い。まずはそれを理解しましょう。そしてこちらには私がいる。次にそれを理解しましょう」

まだ期は熟していない。もう少し場が温まってから、颯爽と登場して注目を集めた方が良かつた。まだあまり目立つなとも言われてもいる。だが、状況がそれを許さない。

「敵の頭を狙え！　あいつだ！」

敵の声。

明らかに注目を浴びる。

頭を狙うのは常套手段。やはり効果的。

「しかし、ただの頭だと思つてもらつては困りますね。画期的で前衛的な素晴らしい頭です。見るも考えるも惚れ惚れするかのような——」

——

言い切る前に、火球がいっぱい飛んでくる。

やはり適切な判断だつたらしい。これは他の者では到底対処不可能な攻撃。それがわざわざ集まってくれて対処が楽になつた。

「残念ですが、まだ虫の羽音の方が勝る」

鬱陶しいだけと暗に告げる。

剣を收め、片手をつき出す。

球体を広げるようなイメージで力を発すると、具現した光の膜が火球とぶつかり打ち消す。芸も仕込みもない。込められた靈力に差がありすぎるだけ。

「これで持ち直しました。さて——」

結局人を動かすのは氣である。

「おおつ」

蘇我陣営は今の攻防の間で、完全に組織として復活した。  
「来るなら構いませんが、次は攻撃します——」

行動の果ては補填不可能な代償。すなわち死。双方にそれが強く  
伝わり、簡単に手を出せない状況が生まれる。

膠着。

「まずは一旦戦いを止めませんか？ やるならここではないと思いま  
すが？」

その問いかけには、神子が思ったより早く応えがあった。  
飛び上がりたくなつた程の感情を抑え、贊個は言う。

「——賛成する。我らも本意ではない」

「どうも」

神子は微笑んだ。

地上はこれでいい。

空を睨み、神を想う。

——馬鹿め。

思わず、どつかのおつかない母を思い出すようなそんな笑い方に変  
じてしまう。

——使えると思ったか。この私を。

人間を争わせて怨恨を生ませようなどと、雑な計画を立てたもの  
だ。協力する見返りが、命の保証と神の加護による物部への勝利？  
ふざけてる。我々のことを何一つ理解していない。これを裏切りだ  
と思うなら勝手にするがいい。少し賢くなつたねと大いに馬鹿にし  
てやる。

人は人のために生きていて、神のためには生きていない。神のため  
に祈りを捧げても、神の啓示に従つても、人は人としか生きられない。  
人は人のために生きている。人形にはなり切れない。人形にすらな  
れなかつた結果が、ここに住む無気力な人間たちだ。

「我々の生き方は我々で決める。上が勝手にごちやごちやと口を出す

ものではない！」

再び剣を抜き放ち、頭上に座する大渦の空に剣戟を放つ。

「天を解せないのならば、神に代わって私が天に寄り添おう——」

渦は破られ、散り散りに。

怨恨と言う名の計画が、その形を保てずに地上に降り注いだ。太陽の光が地上へと伸びてきた。

「——愚か者」

空が震えた。

伝搬するよう空気が震え、地が震え。心が揺れた。

「ヒトが私の邪魔をするか」

空に複数の影。

大きなそれ。地上に降つてきている。

「煩わしい。ヒトはヒトと遊んでおれば良いものを」

影。いや、大きな柱。

「天網恢恢疎にして漏らさず。——報いを受けよ」

柱は各地に円周上に降り注いだ。

船が岩礁に乗り上げたかのような揺れが地上で起ころる。力の高まり。

柱と柱で結ばれた結界が出現。

「生きて出られると思うな。帰るところに還してやろう」顕現。

声の主が姿を現す。

雲が裂かれ、光が漏れる。差した光から、ゆっくり降りてくる。赤と青の服に、紫がかつた青の髪。背には謎の輪。遠くて表情までは分からぬが、醸し出す雰囲気は剣呑そのもの。

「まずはお前からだな」

目が合った、そんな気がした。

「私は八坂加奈子。またの名をタケミナカタ。——神への裏切りの代償は大きいと知れ」

名乗りよりも、後半の言葉のほうに。

——何を言うか。

神子は侮蔑の面を作つて見せた。

同じところに立つていすらしないのに、裏切りとは何か。始めから利用するだけだつたはずだろう。

「初めから協調関係ですらなかつたというのに、厚かましいことで。ああ、もしやどこぞ邪仙の言いくるめられたのでしょうか？ だとすれば、お笑いものです」

「——愚弄するか」

「いえ、現象について論じただけですよ」

馬鹿は言われなければ氣づかない。馬鹿は自分の無知を容認出来ない。何という素晴らしき馬鹿の輪廻。ぐるりと回る終わりなき輪。背負つているのが馬鹿の輪とはお笑いでしかない。

「背中の感性について語りたいところですが、今の私は少し忙しい」この場で、この状況で、主犯である神に向かつて言う言葉は簡単だつた。

「邪魔者はさつさと退場してもらいましょう」

神子は、我ながら性格が悪くなつたと内で愚痴りながら、その全ての責を師と義母に押し付けることにした。

「理を解せない神に、神たる資格なし。さつさと落ちて頭を垂れるがいい」

ここは神地ならぬ人地。

——神遊びがしたいのなら、よそでやるがいい。

笑みが深まる。  
そして気づく。

「なるほど。決めるのは地位でも力でもなく、意思のようですね。何だかわくわくしてきました」

下にいる者から愚弄されたとあれば、毛穴から怒りが吹き散らすかのような想いをするのは無理もなことかもしれない。

八坂加奈子と名乗つた神は、威厳を保ちつつも抑えきれない怒りを放つていた。

「——望みを叶えてやろう」

訳すると、殺す。

だが神子は笑みを解かない。

「ならばさつさと退場なされるといい」

意に介してやらなかつた。望みというのなら、『どつか行け』である。

これでもかと馬鹿にしてやりたい。そんな思いが神子の中に湧く。あのおつかない義母だったら、何と言つただろうか。そんなことまで考える。

しかしそんな余裕はない。

神を舐めているわけなど決してない。

むしろ自分より力を持つた存在だとはつきりと認識している。そう、だからこそその挑発。相手を知るため、そしてちょっと楽しい。ああ、なんだかあの人気が少しづつ分かつてき気がする。結局のところ、楽しいのだ。自分が上だと確信している相手を煽り憤慨させ、翻弄する。

「おや、何もしないのですか？ ひよつとして神というのは、偉そうにする以外に出来ることがないのでしょうか？ こんなものを崇拜している者は頭がどうかしているようで」

嘲り嗤う。

それで相手がどういう性質の者かが分かつてくる。  
怒るか、流すか、もしくはそのどれでもないか。

ハツタリとかそういうものじゃない。ただ相手を知ろうとするだけのもの。それに少しの楽しみを加えただけ。今なら分かる。戦いとはどういうものかを。

だからこうしよう——。

「——天道は我にあり！ 俗物はさつさとそこを退くが良い！」

上空の一切のものを押しのけ、自分に光を差させる。

この場の主役が自分であると示すように。

この世で一番輝き、その先もずっと輝き続ける存在。

——それこそが私。

その他は脇に溢れる演出に過ぎない。気に喰わぬのであれば、同じ舞台に立つしかない。入り口はいつだつて歓迎一色。もちろん出口

も同様。

「——俗物はお前だ。ニンゲン」

耳の触りが良くない言葉。嫌な予感がする。

「言葉を持ちえたことで勘違いしてしまったのか、それとも見苦しい勇気か。どちらにしても、過ぎたことだ」

思わず力が入る。

この神とやらは何一つ理解出来なかつたらしい。

もう少し加えてやろう。

「そうやつて空に浮かんでないと、不安で仕方ないですか？」見下ろしていないと、自我すら保てないですか？」

引きずり下ろす必要もない。

その滑稽な様を自覚させるだけでいい。

「頭の悪い者ほど高いところが好きだと、どこかで読んだ気がします。

今考えてみると、なるほどそのようだ——」

言葉の途中、風が起ころる。

「——分際を知れ」

奥で蠢きがあつた。

### 第31話 韶き

奥の轟きは、地響きを奏でた。

風の音。

大きく、強い。

風は地表をまくり上げ、木々や砂や生き物全てを吸収し大波のように寄つてくる。

自然の前では、人と植物も土砂も区別されない。神が自然の権化であるならば、その行いもまたそうのようで。神子は少し首を傾げる。

「なるほど、やはり神とは人間を理解しないものであるらしい」

神は知らない。人がいかに自然と向き合ってきたかを。無情な様を何度も目の辺りにしても、それでもと前を向き足を進めてきたかを。川の流れを操作し、堤防を作り、またそれらを壊されようとも何度も挑戦してきた。

「ただ流されゆく小石のような存在と思うな」

神子から靈力がほとばしる。

天にも届くような絶大さ。

「——救世の道はここから開かん」

剣が高らかに掲げられ、溢れていたそれに集束される。

「人を知るといい」

波と化した風を斬ろうと構えた、ところ――。

背後の気配が動いた。

「力の見せ所だ！ 気を抜くなよ！」

複数の人影が前に出てきた。

それは、今、戦っていたばかりの物部の術士たち。

「これは物部と蘇我ではない、人間と神そぞうだろ？」

振り返りながら言う男。

神子は然りと頷いた。

妖怪の前では組織の枠が無くなり人間という種になるように、神の前でもそうだつたらしい。

「享けうる害も利も、ことごとく受け入れなければならない時は終わつた。今ここで人が神から独立し、己が足で立つたことを証明してみせよう！」

迫る風に対し、突如現れた大きな壁が立ちはだかつた。  
物部の術士が作り上げたその壁は、明らかに強い意思と共に熟練された技を感じさせるものだつた。即座に強大な壁を出現させれる技量を見れば、周りの蘇我の兵たちも、今まで手加減をされていたことに気づく。

ゆるやかに下がつていた敵愾心が、さらに加速して下がつた。  
この行為をもつて、仲間意識が人と神とで完全に分かれる。

「——信仰とは何か」

神子は目前まで迫つて来た風を前にして、小さく言う。  
「神とは人とは」

風は強大なれど壁もまた強大。

暴風の響きが地を揺らすとも、人の心までは揺らせなかつた。

「答えは、そう」

風と壁がぶつかる。

音が増し、壁の方から風が舞い込む。  
決して軽いものではない。

けれども、人々は前を向き続けた。

「ただの意思に過ぎない」

風は霧散した。

同時に壁も解かれる。

辺りの興奮も前に、神子はすでに前傾姿勢をとつていた。  
踏み込み、地を蹴る。

眼前。

一閃。

剣戟は光の線となり、神を通過した。

さらに一閃。

斬られた断面が白い筋として現れた。  
神から憤怒の表情が出る。

「邪魔をするかニンゲン！」

叫ぶ神。

神子は目を細めた。

「おや、ようやくそれっぽい感情が見れましたね。初めからそうしていれば、愛嬌があつたと思いますよ」

「これは依り代にすぎぬ。神はお前らと違つて実体に縛られることはない！」

「もしや中身がないから、そのように弱いので？」

「弄るか」

「悔しいのであれば、もう一度やつてみますか？　しかし私も暇ではないので、その前に斬らせてもらいますが」

「ニンゲンっ」

憤怒に苦味が混じる。

「依り代と言つたわりには、効果があつたようで。ああ、そういえば弱つていたのですつけ？——敗れて、逃げて」

人の氣にしているところを突く。

師は優秀だつた。人を感情を逆なでにすることに関しては優秀過ぎると言つてもいいほど。もう一人もそう。およそ悪癖としてしか認められないことであつたけれど、実際に試してみると何とも気分の良い事であった。

「さてどうします？　何やらもう私の勝ちのようですが」

さらに挑発を重ねてみると、ふと憤怒の表情が引っ込んだ。

教えてくれていないこともあつたらしい。

急に我に返つたかのような変化。

何事だろうか。

分からぬ。

神の口がゆつくりと開かれる。

「……諏訪子。あれだ」

固い表情。視線が横へ。

そこには、少女がいた。

「それは最終手段だつて、自分でも言つてただろ」

「今がそれだ。どのみちこのままでは——」

「知らないぞ」

「時はそう長くは待つてくれない。私が私として存在し続けるために、必要だ」

「だから言つたんだ。お前は焦りすぎだつて。結局焦つたせいで、何もかも足りなくなつたじやないか。お前は馬鹿だよ、加奈子」

「そうかもしない。だが、そうじやないかもしない。所詮自己を規定出来なくなつた神なんて大したものじやない。おかげで、いくらでも汚れられる」

「……忠告はしといたからな」

「ああ」

不穏な会話。

楽観視した覚えはなかつたが、底冷えのするような何かを感じた。視線が戻る。

「——ということだ、人間諸君。もうごちやごちやとしたのは抜きだ。分かりやすいくこう。皆死ぬ。それでいい。ずいぶん分かりやすくなつた」

重たいのに軽い、軽いのに重たい。  
違和が重なつていく。

「皆と言いましたか？ 残念ですが、他は知らずとも私は死にません。というか、神もそうでしょう」

「いや、死ぬ。お前のとは少し意味が異なるだけだ。それを踏まえて、もう一度言おう。皆死ぬ。上手くいけば生きる。私か、お前たちか

「話が見えませんね」

「言葉でなく現実で語つてもいいが、少し急だな。一度行つてしまふともう後戻りは出来ない上に、無い時間がさらに時間が無くなる。残つて いる時間を燃やすような行為なのさ」

「それをするということで？」

「そうだ。そして、どうあつても邪魔をするのだろう？」

「邪魔をしないとどうするのです？」

「死んでもらう」「

「邪魔をすると？」

「死んでもらう」

「我々がどうすると思います？」

「死人はどうにも出来ない。ただの力の一部となつたものに意思などは存在しない」

「では我々は生きましょう。過去の英雄。私だけはそう呼ばれないのです」

「望みは？」

「さて？」

公然には出来ない。

代わりに笑つて見せる。

——不老不死。

そんな言葉を隠して。



神を蝕む力。およそ適正頼りのそれは、加奈子の神としての属性とは合わないものだった。本来、神格の高い神ならばある程度なら耐えきるのだが、諏訪子のそれは特別。

だからこそ加奈子は、諏訪子を下に付けようとしたし、成功もした。その代償に、残りの時間が大きく削られることにもなつたが目的さえ果たせば全ては良しと出来た。

だがそれは正真正銘の最期の手段だった。

文字通りの最期。実行すればそれが最期。

当初はそれに耐えうる道具を手に入れて、それに憑依させるつもりだつた。だが、事が急変しそれも上手くいかなくなつた。道具はまだ認識出来ておらず、人間の反意にも受けられない。保険で打つた手も駄目だつた様子。

毒を食らわば皿まで。

こうなればさらに怨恨を喰らつて少しでも力を得るしかない。全ては目的を果たさんがために。

「——諏訪子」

「残念だよ」

「悪いな」

「まつたくだ。せつかく色々考えてやつてたのに、台無しだ。私の徒労をねぎらうには、一言じや足りないね」

「そう言うな。もう最期なんだ」

「ほんと馬鹿なやつ」

「そうだな」

「……はあ。言つとくけど、私の勘はまだ死んじやいないんだけどね」

「だがもう待つてられない」

「そーかよ。これだけ言つて駄目なら、もう仕方がない」

「ああ」

諏訪子はゆつくりとまばたきをした。

「——サヨナラ加奈子」

地上から黒いモヤが湧き出す。

触れるだけで身が汚れるようなそれは全て八坂加奈子に向かつていつた。

收まり切れず、溢れる。

それは全盛期をも超える力、なれども時限付きの力。

加奈子は想像を超えると充分に想像していたそれに叫んだ。

苦悶。

想像で補えるものではなかつた。

想像を超えるものを、いかに想像を超えるものとして想像したからといって想像し得るだろうか。加奈子は自身に集まつた力を留めておくことすら困難だつた。

「つあ——」

それは誰の声か。

加奈子の身体から押し留めておけなかつた力が、周囲に散つた。力は怨恨。怨恨は帰るべきところに帰ろうと、ありもしない故郷を探

し、たどり着いた。怨恨の元は——。

「つあ、ああつあ——」

そこらじゅうから叫び声が上がる。

生きたまま火で炙ったかのような断末魔。

人から生まれたものは人に帰るらしい。

加奈子から溢れ出したそれらは、周囲の人間無差別にやつて來た。怨恨に包まれた人は叫び終わると、人の形を保つたまま、動かなくなつた。

「お、おい！ 大丈夫か！ 返事をしろ！」

似たような声が辺りから上がる。

返事はない。

ただ、動かない。

物部の人間から、思い当る者が出でてきた。それは悪い予感。

「——つ近づくな！ 絶対に！」

それは例の戦闘が色濃く記憶に残っていた贊個だった。

「何もしなければ事は荒立たない！」

樹海の戦闘。手を出すまで大人しかつた異様の妖怪。

贊個の中で繋がつた。

「とにかく距離を離せ!!」

それは悉く正解だつた。

「——何故知っている」

加奈子はようやく抑え留めることができて、周りを認識出来るようになつてきた。しかしそうなると、何故か自分が諏訪子との戦闘により苦労したことを見た人が既に学習済みかのように動いている。

「決して、決して、手を出すな!!!」

贊個の叫びに、皆が従う。

加奈子にすれば、驚くべきことだつた。諏訪子の領を侵略しに来た時に、動物を掛け合わせ穢れを含ませたものは恐ろし手こずらされたものだつた。手さえ出さなければ、何もないなどと、どうして戦闘の最中に思い至るだろうか。しかし、それを人間がやつている。それも事前に知つていたかのようだ。

「たつたの一回でも、攻撃に当たれば終わりだぞ！」

知っているといつても、その度合いがある。明らかにこの人間は知りすぎている。

「——そ、うか、お前たちはすでに体験していたのか」

理由は分からずとも、理解はした。しかしせつかくだ。活かさないにしてはもつたいない。

「敵味方の判別付かない。そんなことも知っているのだろうな？」

加奈子は怨恨に呑まれた人間たちに向かつて、腕を振る。

風の刃が飛び出し、巻き散る。

それを起点として、動き出した。

「つああつああつあああああ——」

喉が限界を超えて響きを発する。

この世の不吉の全てを詰め込んだかのような共鳴が、周囲で鳴り渡る。

もうそこには意思はない。ただの反応だけ。与えられた衝撃を吐き出すだけのモノと化した。そのモノが周囲に当たり散らすように衝撃を発し、それに触れた別のモノがまたそれに反応し、衝撃を発する。

「これはつ」

放つて置いていいはずがない。しかし、どうするか。およそ人間が関わっていいものではない。だからといって逃げることが出来ようか。柱で円状に張られた結界が絶望を具現化したの壁のように感じられた。

——どうしたつて逃れられない。

そんな想いが周囲の人間に伝播する。

が、その周囲には入らない人物がいた。

首を傾げると、頭から伸びる二本の角が斜めに空を搔いた。浮かぶは不敵な笑み。吐き出すそれもまた同じ。

「道が一つに絞られたというのに、一体どこを向いているのです？」

不思議な安心感、そして勇気があつた。

「見る方向は皆同じでしょう？」

指導者とは何か。英雄とは。偉人とは。

「下ではなく、前」

人に道を、歩く方向を。

「迷ったのなら、私が指し示してあげましょう」

剣が掲げられ、前へと向けられる。

それだけで充分だつた。

沈みかけていた人たちとは立ち直つた。

——今この場で立たないでいるなんて、どうして出来ようか。

突如友人が化け物なつたとしても、自らの運命を予感させられても、ただ前を指示されるだけで立つことが出来た。支えられたとしても、立つたのは間違いなく自分の足。前にふみ出すには充分だつた。

「おおお——」

喚声。

影も光も全て吐き出した。

身一つ、心一つ。

——皆と共にあらん。

その先には、

「死ぬことは許しません。生きて私の雄姿を見るのです！」

神子は気持ちよく駆けた。背中に心地よい圧を感じた。手始めにと、前方にいたソレに斬りかかる。

緩慢なソレは、容易に神子の剣の侵入を許した。が、それだけだつた。

——この、手応え。

神子は理解した。

もはや肉体は機能していない。まったく別のものが人体の形を取つてはいるだけ。よつて肉体の破壊は意味をなさない。浄化させきるよう、消す以外にない。

が、それにはあまりにも——。

「……手間のかかる」

周りの数全てを相手していれば、靈力は尽き切るだろう。それどこ

ろか、足りるかどうかも怪しい。すぐに物部の術士を頼るのが最善の策であると覺つたが、問題はその後である。これらは明らかにあの加奈子という神が吐き出した余剰である。もし同じ原理で倒さなければならぬのだとしたら、とてもじやないが持たない。可能性があるとしたら、周りの全てを放つて置いて、今ある全力で神に向かうしかない。

——策が……。

もしここで神以外のものを無視すればどうなるか。全てが上手くいつた時、名声はどうなるか。人は元凶より直接自分に近いの恐怖の方が優先される。誰だつて自分に向いた凶刃から救つてくれた人間の方を重く見る。よつてこの場合だと神を倒したとしても同程度であろう。神子にとつてそれは事後処理の観点からすると避けたい。折半に持ち込みくらいじや足りない。どちらの戦闘にも自分が都合良く顔を出すしかないが、どうだろうか。それだと大前提の神に対抗出来るかどうかが怪しくなる。

考えている時間はない。

徐々に徐々に、安地は減っていく。

後方はおそらく結界の壁ぎりぎりにいるだろう。

前は敵の鬱陶しさに有効打は与えれない。

物部勢が果敢に攻撃を開始するも、状況を開拓するというほどではない。このまま何事もなくいけば、もしかしたら——なんてところだ。

そんなことをあの神が許すはずがない。

結局のところ、神を相手にしなければならない。

「嫌な立場だ」

無事に帰れたとしても、蘇我馬子とかいう化け物に何を言われるのやらと考へると、ひどく億劫である。

——そう言え。

化け物といえば、もう一人。

## 第32話 転回

押し殺した悲鳴。声を出すのさえも恐ろしい。自己の存在が一時的に無くなってしまえばと思えてくるような状況。しかし、現実そのようなことは起こらない。彼、彼らの存在は確かに現実世界に在つて、世界の物理法則の中にある。肉体は壊れるものだつた。

恐怖を感じる以外に許されるものが限りなく少なかつた。悲惨だつた。抵抗出来ない死がすぐそこにあつた。戦うことが出来ない。ならば逃げるしかない。しかし結界がこれ以上先に行くことを妨げていた。逃げることが出来なければ、他に何が出来るというのか。神は区別しない。その神から吐き出された怨恨もまた同じく。

怨恨は非戦闘員の集団にも飛んできた。

逃げようにももうすでに結界の端。身を押そうが、人でつかえるのみ。

——どうして。

屠自古は呪うしかなかつた。

自分を抱えてここまで連れて來た人が——。

——どうしてつ。

急に投げ飛ばされ、この身だけは助かつた。

振り返ると、人の形が崩れしていく様が見えた。今の今まで自分を抱えてくれていた腕は黒く染みわたり、そこから氣味の悪いぶよぶよとした芋虫のようなものが毛みたいに生え出てきた。妙な水音がすると、動き出した。

身体が捻られ、続いて腕のそれが振り回される。

屠自古はとつさにしやがんだ。

上から音と風が通過するのを感じると、背中の血液が後ろへ飛び出るような感覚がした。

辺りを見渡すと、周りを見ると人が減つていた。

「あ」

人は減つていない。

減つたと思った人々は、吸いついたようにバケモノから腕から伸

びたそれにくつっていた。それは人をくつつけたまま上に掲げられていて、おそらくそのまま下に振り下ろすのだろうということがかつた。身がすくむ。自分だけ助かつた罰かもしれない。もうたくさんだ。少しだけ生き長らえたせいでこんなに怖い思いをするのなら、もういつそ何も感じなくなる方が――。

「――お、ここにおつたか。見つけるのに苦労した」

気づけば目の前に影。

すぐに分かつた。

揺れる灰銀の髪。ただ一人しか知らない。

「どうしてつ」

直前まで何度も思つたことが、別の意図で口から出る。

「どうしてとはなんじや?」

何事もなかつたように首を傾げる布都。この場に似つかわしくなさ過ぎて、どう反応していいのか分からない。

「こう密度が高いと上手く探せんかったな。うむむ」

どうしてアレに背を向けていられるのだろうか。屠自古は泣きそうになるくらいにわけが分からなかつた。

「ん? ああ、あれが怖いのか」

布都は首を後ろに向ける。

「まつたく、危うく馬子殿にどやされるところだつた。馬鹿め」

布都の身体が向き直ると、待ち構えていたようにバケモノより触手が生えて針のように伸びてきた。布都がそれをそのまま素手で受け止めたその時、バケモノの全身が光が内から溢れて霧のように焼き消えた。

「は?」

「ほれ、助けてやつたんだぞ。――感謝の言葉はまだなのか?」

「いや、そのつ――」

「なんと……、素直に礼も言えないとは我悲しい」

とてつもなく下手な泣き真似を見せられる屠自古。

まだ下手な真似は終わらない。

「およよよ。育て方が悪かつたのであろうか、それとも元が恐ろしく

残念だつたのであらうか

「おま、おまえつ」

いきなり現れて助けられて驚いているうちに、気づけばもの凄い罵倒されている。

感情が追いつかない。言いたいことなんて、いくらでもあつたのに、そのどれもが今では出てこない。

「い、今までどこにつ」

やつと出てきた言葉はそれだつた。そんなこと聞いたところでどうにもならないことは、言つてすぐに分かつた。それに自分から聞いたのに、その答えも理由も聞きたくなかった。

「『どこ』と言われると、そうだな。……どこであろうか？ 実のところ我にもよく分かっていない。行き着くところが分かつているようなそんな生き方もしてみたかったのかもしれんと、今更に思うところである」

「一体何を」

「つと、これはいかん。関係のない話をした。——というわけで、こういうのはどうであろう？」

にやりと笑い、

「どこかと問われると答えづらいが、今はここにいる。うむ、どうであろう？」

納得のいく答えが出来たといった表情の布都に、一発ぶちこんでやりたくなつた。今はここにいても次にはいなくなつてるかもしれないのに。やつぱり何も分かつていらない。

「待つのは嫌いだ」

「では走つて追いかけてみるか？ それともぴょんと飛んでしまうか？」

「追いつけなければどうする」

「知るかよ」

「は？」

「待つのが嫌なのだろう？ なら追いつくかどうかなんて関係あるまい」

話の本質が分からぬまま、乗つてみたが、何だか話が進みすぎてる。

「それに生憎我は追いつかなかつたことがない。そら、行くぞ」

「え、どこに——」

布都との距離が近づく。

「待つのが嫌なのだろう？　なら迷う必要も探す必要もあるまい」

不敵な笑い。

「あの素敵頭の計画はめでたくご破算よ。我がちよつと良いところ見せてやろうと思つただけで全てを搔つ攫われるのだ」

手が伸びてきて、

「目印は非常に見やすい。天にそびえる変な頭である」

一気に引き寄せられる。怪し気だけど柔らかな香の匂いがした。

「——空を行く我に障害はないのだ！」

片手で引き上げられ、足が宙に浮いたと思うと、すでに空にいた。

「え、う、ちよつ」

「落ちたところで死にはせん」

それはお前だけだろうと言いたくなつたが、恐怖で口に出来ない。

感じる風がどんどん強くなつていく。

目を開けているのも怖くて、摑まることしか出来なかつた。



見えないけれど、聞こえる。

風音に他の音が混じつていく。

人の声や物音。木を切り倒したような音が、まるで地面を叩いているかのようにそこら中で起ころる。

「——やあ、生きておるか？」

風が止み、布都が喋つたことで、屠自古は目を開けた。

布都の白い衣服が見え、そこから視線を伸ばすと、その光景が見れ

た。黒い鞭のようなものが地面をどんどんと叩いていたり、人がそれに対抗している様子が。

屠自古が神子は無事だろうかと心配した時、「見ての通りですが？」

その声がして、

「つえ!？」

目が合った。

しかし、すぐに逸らされ。

「……どういうつもりです?」

「安全な所へ連れて来たのだが?」

二人で話し始めた。

「こゝ」が安全に見えると?」

「言葉を変えると、マシなところへ連れて來た」

「……そういうことですか」

この場で安全な地などない。ならば一番マシな所はどこか。それは守る意思がある人間で、かつ力を持っている者のそば。

「で、貴方はどうするつもりで?」

「わざわざ聞くのか?」

「楽しそうだつたので」

「つまらないものを楽しもうとする勤勉さと謙虚さを身に着けようと思つてだな?」

「ならさつさと諦めることをおすすめしますよ。それは無駄というものです」

「ちよつと見ないうちに口が悪くなつたな。舌の上で毒でも転がして舐めてるのか?」

「たいへん美味ですよ? 舐めてみます? 口移しでもいいですよ?」

「阿呆め」

噛み切られたいのか。言外にそう言う布都の表情は、言葉に反して

楽しそうだった。

「じゃあ——」

「うむ」

遊びはそこここ。やることはやらなければいけない。

布都は、神子へと屠自古を押しやつた。

「私のそばから離れないように」

神子は片手で屠自古を抱き寄せ、もう片方の手で剣を持ち、前へ突き付けた。

「——道は光が通つた軌跡」

もう神子は神の対処を布都に任せた。よつて力の配分をする必要がなくなる。

「影は退くがいい」

剣から発せられた光はその一切を押ししどけ、放射状に広がつていった。

周囲に極光が走り渡り、怨恨のバケモノは大きく打撃を受けたようになにけ反つた。

布都はその間を駆け走り、神へと向かう。

事態が動いたと、周囲の人間は絶望の訪れを遅れさせただけ時間が、本格的に変わつていくのを感じた。

だが、それを感じたのは人間だけではなかつた。

「——絶望の産み方を知つてゐるか？」

上空より見下ろしてゐた神から、黒いもやが溢れ出す。

「望みというのは順序通りに絶えさせると効果的だ」

走り寄つていた布都に、もやが迫る。

それが人をバケモノへと変異させたものであると、皆すぐに分かつた。

布都は避けない。

——全てに通じる術などない。

そのまま突つ切つた。

「つ」

神をも含めた周囲の驚愕は無視。布都はただ神を見ていた。

手を握りしめ、靈力を練り上げる。

「やはり火がいい」

拳に火が宿る。

投げつける。

火は神にまで到達すると、火柱となつて周囲を焼いた。

正確には火は神を除いたその空間のみを焼いた。熱は神には届かなかつた。保有している力が違い過ぎる。今では、先ほどの神子の斬撃でも傷をつけられるか怪しい程に、神の中では力が充溢していた。それこそ抑えきれずに吐き出してしまうくらいに。

「ううむ」

布都は首をひねつた。

周囲の人間も、それが攻撃に値すらしなかつたことに気づいた。だが布都にはそんなことはどうでもよかつた。

気がかりを口に出す。

「何か反応しないのか？ これじゃつまらんぞ」

そんな布都を、神は無表情で見つめている。

「……何か言つたらどうだ？」

それの返答もない。一体何なんだと言いたくなつたが、返事がない以上はかける言葉もない。

口は利けるはずだつた。さつきまで喋つていたわけであるし、布都には理由が分からない。

結論から言うと、慣れから生じる思考の偏りであつた。

布都がどうしたものかと考え出したところで、神が口を開く。

「——お前は何だ？」

問われた布都是、

「何だかよく聞かれる氣がするな。いつも思うのだが、そういうのは口で説明出来るものなのかな？ もつと言うと、神に分からぬものがただの人に答えられるものなのかな？」

逆に聞き返した。

「それはお前がただの人ではなく、理より外れた存在だからだ」

「……確かに私は気づいたときから仲間外れだつたが、いつの間にか理からも断りを入れられて いたとは思わなんだな」「言葉遊びが好きなようだ」

「好かんのか？」

「非生産的だ。何も産まない」

「娯楽を産んでいるだろう」

「そんなものは仮初めの享楽に過ぎない。真なるものは人間には分からんだろうな」

「これはこれは、よもや風流を理解しておらぬとは。風が肌を撫で、水音が耳を潤わす。そんな楽しみを知らんのか？ 風の神と聞いたが、それは偽りであつたか？ まあ、實に信用にならない情報源ではあつたが」

「——何だと？」

段々と感情を見せ出す神、加奈子に、布都は氣分が良くなつてくる。「——ああ、そういうえば随分とゆつくりとしてるじゃないか、急ぐんじゃないのか？」

「急いで欲しいのか？」

「なるほど、急げなかつたわけか」

「何故そう思った」

「適当に予想を言つただけだが？」

にまにまと勝ち誇った顔をする布都。加奈子の目に熱が生まれる。「どうやら当たりだつたようで何より。どうせ抑えるのに手一杯で馴染むのに時間がかかるのだろう？ ろくに人間を知らないやつがそんな力を得るからそうなる」

「お前は——」

布都の言い草に、加奈子は自身の疑問に一つの答えが出た。

「あれを避けたのでも弾いたのでもなく、取り込んだというのか」

答えとばかりに、布都の中身のない袖が盛り上がる。

「種も仕掛けもあるが、そのどれもよく知らん」

袖の先から黒いもやが溢れ出す。明らかに受けた量を上回つていた。

「さて、満腹なところ悪いがおかわりはどうだろうか？ きっと美味いぞ」

布都の放つたもやが加奈子に襲いかかる。

「つ——」

避ける加奈子。

「遠慮することはない」

さらに放つ布都。

「元は欲しかったものだろう？」

何を避ける必要がある

布都も動いた。

加奈子の避けた先。

始めから知っていたように、そこへ向かっていた。

「物語の終わりなんてものはあつけないものだ」

一瞬の煌めき。

フツ。淡泊な音。張り詰めた糸を切ったような、そんな音。

光を斬つたかのよう。周囲にいた者すべては、瞬きにも似た一瞬の暗転、そして光を見た。灰銀の輝き。

そして皆が気づいた時、神は落下していく、布都是剣を抜いていた。

剣は淡くすんだ雪色の光を放っていた。

「猶予なくやつてくる断絶には、感情が追いつかないものだ」

落下する神は二つに割れていた。断面から怨恨が勢いよく吹きだしている。

布都是見下ろしながら、剣を腰に戻した。

知っていたが故に気づいた者が、その名を言つた。

「——布都御魂剣」

物部守屋の声だった。